

「ドール嬢は不安になつて来た。」
 「小林さん、小原さんの事を知つておいで、すか。」
 「知つては居ます。然し私はそれをあなたに話す自由を持たないのです。」
 小原はかう云つて歩き出した。ドール嬢はチツと小原の後姿を見た。小原は五六歩あるいてふり返つた。
 「ドール嬢 小林はあなたに逢ひたがつて居ますよ。あなたに遇ふために近く私と一緒に巴里へ行くのです！」
 「え？ ほんとですか。」
 ドール嬢は狼狽して小原君の後を追つた。

九

小原さん。あなた小林さんにお逢ひになつたのですか。
 ドール嬢は小原君に追ひついて聲をかけた。小原君はクルリと身を廻してドール嬢に向ひあつた。
 「えい、逢ひましたよ。毎日逢つて居ますよ。」
 小原君は氣軽く云つた。

「ありますよ。」
 「ありません、斷じて何の關係もありません。」
 ドール嬢、儼然として云ひ放つた。
 「あは、關係はないならばないでいゝのです。……あんまり云ひきると、あなたは後悔なさいますよ。」
 小原君はドール嬢と向ひあつて顔をのぞいた。
 「どうですか、前言をお取り消しになつては。」
 「いやです。私はあなたとはお話しません。」
 「なか／＼あなたは強くなりましたね。それも面白いでせう。が私から云へば、たしかにあなたと私とは關係があるのです。勿論直接ぢやない。小林と云ふ日本の畫家を通してはあるが。……」
 「え？ ……小林？」
 「えい、小林畫伯です。」
 「小林さんがどうしたのです。」
 「どうもしませんよ。唯私と小林とは友人です。そして小林はあなたを戀ひ慕つて居る。……それだけですよ。であなたが私と全く關係がないと云ふならば、小林とあなたは關係がないのです。」

「東京に小林さんはおいでになるのですか。」

「それはお話出来ません。」

小原君は皮肉に笑ひながら云つた。ドール嬢は當惑して了つた。

「私が東京に居るのを小林さんは御存じないのですか。」

「知らないでせう。」

「何故あなたはそれを話して下さいませんか。」

「ドール嬢、私はそれを小林君に話す自由を持たないのです。」

「何故ですか。」

「あなたが話してくれと云はないからです。」

ドール嬢は言葉につまつて了つた。小原君がかちほこつて云つた。

「どうですか、ドール嬢、御希望ならば小林君にあなたの事を話してあげませうか。」

「どうぞ話して下さい。そして私は小林さんに逢ひたい許りに日本迄来たのだと話して下さい。」

「え、話してあげませう。だが話せば小林君はすぐにあなたに逢ふでせう。」

「さうなれば私は 幸です。」

「幸でせうな。が私は小林君の友人です。だからあなたが東京においでになる事を話すと同時に、あ

なたの希望しない事迄も話さなくてはなりませんよ。」

「それは何の事です。」

「あなたの秘密です。」

「秘密？」

「え、あなたが小林にはどうしても話す事の出来ない秘密です。」

ドール嬢は危く後に倒れんとして辛うじて身を支へた。不安が胸に充ちた。がドール嬢は又小原君に對して反感の炎を燃やして來た。

「秘密とは何なのです。私は小林さんには何の秘密もありません。」

「さうですか。あなたはあなたの過去を皆小林君に秘密にする必要がないのですか。」

「ありません。」

「刺青も？」

「え？」

ドール嬢は眼の前が見えなくなつた。身が軽くなつた。冷汗が全身から湧いた。そして根をきられた木の様に前にのめつた。小原君がドール嬢を前から抱いた。

「ドール嬢、どうしたのです。」

「ドール嬢は小原君に抱かれたまま、しばらくは氣を失つて居た。」

「ドール嬢。」

小原君はドール嬢を抱いたまゝ、腰をかゝめた。不安になつた小原君は當惑してドール嬢の背をかく打つた。

「ドール嬢！」

ドール嬢の意識がやつと歸つて來た。そして彼女は小原君の腕を拂ひのけて、立ち上らうとして又腰を下した。

「氣分が悪いのですか。」

「え、少し。」

五六分の沈黙が続いた。ドール嬢はやつと立ち上つた。そして打ちのめされた様な疲労しきつた心で、やつと云つた。

「小原さん、どうか私の事を、しばらく小林さんに話さずに居て下さいまし。」

小原君は何とも答へなかつた。ドール嬢も下を向いたまゝ、黙つて了つた。

ドール嬢は到底小原に反感を持ち続ける事が出来なくなつて了つた。今小林畫伯に刺青の祕密が洩れて了つては總ての終りであると思つた。いつかは話さなくてはならぬ時が來るかも知れない。又話

すしかない事であるかも知れない。愛する者に對して、それは僅かの事であつても、祕密を持つ事は愛を裏切るものであるのは、ドール嬢には分り過ぎる程分つて居たが、刺青の祕密だけはどうしても洩らしてはならぬものと思はれた。

——それにしてはどうして此祕密が小原君に知れて了つたのであらう。夫は決して小林畫伯を通じては無い。否もし小林畫伯の口から小原に傳はつたのであつたならば、どれ程氣輕い事であらうか。

ドール嬢は一思ひに小原に、祕密を洩らした者の誰であるかを聞かうとした。が、それをきくのは一層恐しい事に思はれた。

「小原さん、今夜はこれで失禮します。どうかくれぐれも私の事を小原さんにはしばらくお話し下さいませんやうに。」

「え、なか／＼話しませんよ。話さうと思へば今夜にも話せますか。」

小原君は徹底的に勝利者であつた。今ならばドール嬢はどんな要求をも容れると思はれた。

「又逢ひませう。これからは私はあなたから逃げますまい。」

ドール嬢は敗北者の悲哀に此儘別るゝしかなかつたのである。

ドール嬢は重い心で電車に乗つて森ドクトルの家迄歸つて来た。先程の電話で、刺青の男がもう待つて居る時刻であるのが分つて居た。電話をきいた時は、飛び立つばかりうれしかつたが、思はずも小原に逢つたために、その喜びは跡方もなく冷えて了つて居た。

森ドクトルの玄關で靴をぬいてドール嬢は誰にも顔を見られたくなく思つて、ソツと自分に與へられた室へ入つた。そして電燈も灯さずに窓によつて東京の街を見つめた。又しても梅雨時の陰惨な雨が降り出して町の灯は物淋しくまたゝいて居た。

——もう刺青の男は此家に来て私の歸りを待つて居るであらう。——
さう思ふとさすが小林畫伯の消息をきたくて胸がをどらぬでもない。

——今、小林畫伯の消息を知つたところで、すぐに小林畫伯に逢ふのは、自分から危地にふみ入る様なものだ。一そ刺青の男にも逢ふまいか。

ドール嬢はいつ迄も町の灯に降り注ぐ雨を見て窓近く立つて居た。ふと物に襲はれた様にドール嬢は窓を離れた。

——さうだ、小原の話では、小林畫伯は私に逢ふために近く日本をたつて巴里へ行くと云つて居る

のだ、かうして居てはいけない。一日も早く逢はなくてはならない。——
ドール嬢は闇の中で呼鈴を押して、ベッドの上に腰を下した。程なくドアが打たれた。看護婦がドアをあけた。

「まア、まつくら。」

看護婦は闇の室に誰も居らぬと思つたらしかつた。

「坂上さんが来ておいで、すか。」

ドール嬢はベッドに腰かけたまゝきいた。看護婦は聲をきいて一時驚いたらしかつたが、闇の中をすかして見てドール嬢を見出して答へた。

「え、先生と先程から話しておいでになります。」

「さうですか、私が歸つた事を知らせて下さいまし。」

看護婦は室を出て行つた。ドール嬢は相變らずベッドの上に腰かけたまゝ、後々と心に湧き立つて来る不安を追ひ拂つて居た。

ドアが音もなくあいた。

「お、闇の中のチャンドークよ。」

聲は笑を帯びた刺青の男のそれであつた。

「夜の魔を光で追つてから、幸福をもたらす使が室に入るのをお許し下さい。」
 刺青の男は芝居の科白の様な調子で云ひながら、電燈を捜した。

「ドール嬢、電燈は？」

ドール嬢はやむなく電燈をひねつた。室に光が充ちて刺青の男が夜會服で立つて居るのが浮き出した。

「これは婦人に對する禮を失しましたかな。ベットがある室とは知らずに入りました。罪はドクトルにある。」

刺青の男は大股に室を出てドアの所に立つた。ドール嬢は物憂くて階下の應接間迄行くのはいやであつたが、禮儀を破る氣にはなれなかつた。相手が禮儀を正しくして居るのに我から禮儀を破る程大膽にはなれなかつた。

ドール嬢はドアに歩いて行つた。

刺青の男は先に立つて階段を下りて行つた。ドール嬢はその後について應接間へ行つた。

應接間には森ドクトルが葉巻を啣へてボンヤリと窓の外を見て居た。二人の入るのを見てドクトルは聲をかけた。

「さアどうぞ。」

刺青の男は椅子に腰を下した。ドール嬢は何も云はずに刺青の男と向ひあつて坐つた。

「ドクトル。失禮ですが一寸祕密にドール嬢に報告する事がありますので。……」

「あゝ、さうですか。」

ドクトルは快よく室を出んとした。ドール嬢は不思議に思つて刺青の男の顔を見た。

「ドクトルには祕密の方がいゝのでせう。」

刺青の男がドール嬢に云つた。ドール嬢は何と答へていゝのか分らなかつた。その間にドクトルは室を出て行つて了つた。刺青の男はドクトルの去るのを見送つて後、椅子をすゝめてドール嬢を見た。

ドール嬢。先刻電話でお話した通り、小林畫伯の消息が分かりました。畫伯は今東京に居ます。然も小原畫伯の家に居るのです。」

ドール嬢は事の意外に驚いて了つた。

「ほんとですか。」

「えい、ほんとです。一月前には乃木坂ホテルと云ふ宿屋に居たのです。其處が火事になつてからは確に小原畫伯の家に居るのです。」

ドール嬢は確信のある刺青の男の言葉をきいてますます驚いた。

「然も小原畫伯はそれを私にかくして居るのです。」
 「さうです、私にも。」
 ドール嬢はたつた今逢つたばかりの小原を思ひ出して悪く思ふと共に、甚だしい危険を感じない譯にはならなかつた。

二

「あなたにも？」

刺青の男はドール嬢の言葉をきいて問ひ續けた。

「何故に小原畫伯はそれ程小林畫伯の消息を秘密にする必要があるのでせう。」

「私にも其理由は分りません。」

刺青の男は暫く考へて居た。

「一體あなたと小原畫伯との關係は？」

「たゞ佛語の先生と弟子です。」

「どうして知り合におなりになつたのです。」

「それは私が日本に來た時、世話になりました醫科大學の先生の山岸博士に紹介されて、ルツソンを

始めた人です。」

「それだけですか、友情の點では？」

「ゲイシヤを見せて貰ひました。又帝國ホテルへ泊めて貰ひました。」

「さうですか、それは稍危険です、彼はあなたを愛して居るのではありませんか。」

「いゝえ決して。却つて私を悪んで居ます。」

「初めから？」

「いゝえ、初めは私を親切にして下さいました。」

刺青の男は暫く考へて居た。

「大體想像はつく。彼は恐らくあなたを愛して居たのです。そして恐らくあなたが小林畫伯を愛して居るのを話したので、今度はあなたを悪んで居るんです。」

「さうは私には信じられませんが、私を愛して居る程には見えませんでしたし、又愛の言葉をきいた事もありません。」

「それは日本に居る日本人の心は到底あなたには想像出來ません。勿論本心からの愛でないのは確ですが、つまりあなたの心を弄びたかつたのです。」

「そんな失禮な人でせうか。」

「恐らくさうです。」
刺青の男は腕を組んで考へて居た。ドール嬢は小原畫伯が悪心のある人であるのをきいて不安になつて來た。

「小原さんは私の秘密を知つて居るのです。」

かう云ひながらドール嬢は身をふるはせた。刺青の男は顔をあけた。

「さうです。知つて居る筈です。私が話したのです。それは私の失敗でした。お詫しなくてはならぬい。……」

ドール嬢は驚いて刺青の男の顔を見つめた。

「私の不注意でした。私は元來秘密を好まぬ男です。且又あなたに刺青のある事も、私から云へば秘密にする必要を認めないので。それで小原畫伯に自分の刺青の事を話す序手に話したのです。」

刺青の男は臆する所なく正直にスバくくと云つてのけた。ドール嬢は却つてサツパリして愉快であつた。

「あなたは近頃小原畫伯にお逢ひになりましたか。」

「え、先程往來で逢ひました。その時小原さんは私の秘密を突然云つたのです。私は腦貧血を起す程に驚きました。」

「あ、さうか。いよく彼は悪心の持主だ。そして其外何か云ひましたか。」

「小林さんが私に逢ふために近く巴里へ行くと言ひました。」

「巴里へ？ 現在あなたが日本に居るのに。」

「え、ですから小原さんはどう云ふ考へなのか私には分かりません。小林さんはほんとに巴里へ向けて旅立つでせうか。」

「何とも分らん。それは急がなくてはなりません。一日も早くあなたが日本に來て居られる事を小林さんに話さなくてはならない。」

刺青の男が考へ出した。その時ドール嬢は又不安になつて來た。

「坂上さん。私はどうしたらばいいのでせう。今私が東京に居るのが小林さんに知れれば、どうしても逢はなくてはならなくなるでせう。」

「勿論さうです。」

「それでは、私は……」

ドール嬢は不安の極泣き出してつた。刺青の男はそれを理解出來なくて、ドール嬢を見つめて居た。

「どうしたのです。ドール嬢。」

ドール嬢はまだ泣續けて居る。

「何故なくのです。何が悲しいのです。戀人と逢ふのが何故悲しいのです。」

ドール嬢は小聲で云つた。

「もし、今逢へばすべての終りです。戀の破綻が來るのです。」

「破綻？ 何故の破綻？」

刺青の男が尙も考へて居る。ドール嬢はやつと涙を収めて顔を上げた。

「私は今は小林さんに逢ふ事は出来ません。私は秘密を持つて小林さんに再び逢ふ事は出来ません。」

「秘密？ それは刺青ですか。」

「えい。」

「それはいけない。刺青を秘密にするのはいけない。話して了はなくてはいけない。愛するものに秘密を持つのは裏ぎる事だ。」

「……………」

ドール嬢は顔を伏せたまゝ答へなかつた。

「刺青を持つ事が何の罪です！ 何故刺青を愛人に見せないのです。身も心もすべてを投げ出さなくて愛がなりたちますか？」

刺青の男は叱る様にドール嬢に云つた。ドール嬢は悲しげに刺青の男の顔を見返した。

「ドール嬢私の云ふ事が違つて居るでせうか。」

聲は稍静かであつた。

「私にもよくそれは分つて居ます。けれどもどうか此れだけは小林さんには秘密にしたいのです。秘密にして居てこそ、私達の戀は保たれるのです。」

「それが虚偽でなければいゝが……………」

刺青の男は絶望した語調で云つた。

「早くあなたが日本に來て居る事を小原畫伯に話さなければ、小林畫伯は巴里に向つて出發して了ふ。それを話せば當然あなた方は逢ふ事になる。逢ひながらあなたが秘密を持つて居る事は戀の破綻になるのは火を賭るよりあきらかだ。…………どうすべきだらうか。」

刺青の男は迷ひきつて我事の如く嘆息の聲を洩らした。かうきくとドール嬢も將來が全く暗黒であ

る様に思はれて来た。

「どうしたならばいいのでせう。坂上さん私を救つて下さい。」

「え、救つてあげたいのです。たゞあなたが何故に刺青を祕密にしなければならぬのか、私に了解出来ないのが困るのです。……概略だけでもいいのですが、あなたの刺青に就いても少し知りたく思ひます。」

刺青の男はさす様にドール嬢に云つた。ドール嬢は答へる言葉がなかつた。

「あゝ、やむを得ない。ドール嬢では一日も早く刺青を抹殺してお了ひ下さい。そして一日も早く小林畫伯にお逢ひ下さい。私はたゞその時期を待つしかありません。」

刺青の男の聲は悲しかった。ドール嬢は顔を伏せて了つた。――

——此人の云ふより外に途はないかも知れない。勇氣を出して森ドクトルに刺青の除去をたのむしかな。……だがどの位の日數がかかるのであらうか。――

ドール嬢は決心して刺青の男に云つた。

「お話しに致します。早速ドクトルに話します。そして一日も早く刺青から解放されます。どうかそれ迄の間、小林さんを日本にとめて置いて下さい。それをひたすらあなたにお願ひします。」

「それしかないでせうな。私から云へばそれ程の月日を空費するのはつまらぬ事とは思はれますが。」

刺青の男は淋しく云つて口をつぐんで了つた。ドール嬢も顔を伏せて了つた。

「さア、さう話がきまれば、私は今夜来た序手に自分の背の魔物の退治をやつて貰ひませう。」

刺青の男は靜かに應接間を出て行つた。ドール嬢は一人應接間に残つて顔を伏せたまゝ考へ續けて居た。刺青の男の云ふ事は確に正しい。小林畫伯に對して祕密を持つのは恐ろしい事に相違ない。然し今此刺青が小林畫伯の眼につく様な事があれば、此刺青の歴史をきかれるにきまつて居る。その時にはどうしてもあの大戰亂の幕のきつて落された夜の事を話さなくてはならない。そして我身に獨逸の畫家ホフマンの魂が残つて居るのが知れたならば、當然小林畫伯の愛は消え失せて、自分は淋しい將來を持つしかない。

ドール嬢はすべての終りが一分一分と近づいて来るのを感じて、不安は涙に變つて頬をつたつてバラバラと膝に落ちた。

ドアが靜かにあいた。看護婦が立つて居た。

「ドールさん。先生がおよびです。」

ドール嬢は涙を拭つて立つた。そして看護婦の後について治療室に入った。其處には刺青の男が後向きに椅子に腰かけて、背一面の美しい刺青が現れて居た。ドクトルが雪狀炭酸を筒に入れて熱心に刺青の抹殺を續けて居た。

「ドール嬢、どうです。かなり薄くなつたでせう。」
 ドクトルはドール嬢を振り向いて云つた。
 「あまり目立つて薄くならぬので一月前から、此女の眼と眉とを特に扱ひ出したのです。男の眉に比較すれば、かなり色が薄くなつたのがお分りになるでせう。」
 ドール嬢は吸ひつく様に刺青を見つめた。ドクトルの云ふ様に、女の眉はもうかなり薄くなつて居た。

「先づ眼から薄れて行く。哀れな魔女よ。」

刺青の男が詩の様に調子をつけて云つた。その聲がドール嬢の胸に沁み渡つた。

「過去のドンキホーテ、生れながらのワガボン。それは跡方もなく刺青と共に消えて去れ。」

刺青の男は又歌つた。ドクトルは致々として仕事を續けて居る。

「色々の刺青！ それは形體だけであれ。心に刻まれし刺青を戀のみが抹殺する。新しき戀よ。汝はいつ此ドンキホーテに將來の光明を與へてくれるのだ。」

刺青の男は夢心地に歌つて居る。

相戀 相思

「ドール嬢、どうですか。今夜こそあなたの不安を取去つて了ひませんか。」

ドクトルは、ドール嬢の室をノックして入るや否や話しかけた。ドール嬢は一時ハツとしたが、チツとテーブルを見つめて心の動搖を沈めた。心の中では……結句自分の祕密を取り去らなくては、小林畫伯に逢ふ事は出来ない。若しその決心がつかないならば、折角日本迄來た甲斐がない。今夜こそドクトルの言葉に従ふべき夜である……と思ひ定めたのであつた。

「ドクトル、私は決心しました。」

ドール嬢は、顔色を蒼白にしてドクトルを見返した。

「それがいい。それがいい。さア……」

ドクトルは氣早に身を動かした。

「一寸待つて下さい。まだ御願ひする事があります。」

ドクトルはドール嬢を見つめながら、ドール嬢の言葉を待つた。

「お願いです。どうかすべてを秘密にお願いします。」

「勿論です。醫者は職務上知り得た秘密を他言する事を法律上禁じられて居ります。」

ドクトルの言葉は謹嚴の調に満ちて居た。ドール嬢はドクトルの誓ひの言葉をきいて、すつかり安心したが、すぐそれに繼いで、新たな不安に襲はれた。

——ドクトルは確かに誰にも他言はしない。がドクトルにも秘密を知られる事が自分に堪へられるであらうか。……それは到底堪へられない、自分自身さへも恐ろしい蛇である。悪むべき、戦慄すべき蛇の刺青である。——

ドール嬢はかたく唇をかみしめた。

「ドール嬢。さア、さう決心がついたならば、すぐにその氣味の悪いものを、とり除かうではありませんか。」

ドクトルは再びドール嬢をせきたてた。

「一寸待つて下さい。」

ドール嬢は嘆願の調子でドクトルに向つて云つた。

「いや。もう何も云はぬ方がいゝでせう。すぐに初めませう。」

「いゝえ、もう一言私のお願ひする事をきいて下さいまし。」

「何ですか。」

ドクトルは餘裕をもつて笑ひながら云つた。ドール嬢は眞顔になつたまゝ續けた。

「ドクトル、どうか私の意識を全く失はせた後に、治療を行つて下さい。」

「意識？」

ドクトルは意外なドール嬢の言葉に眼を見ひらいて、ドール嬢を見つめた。

「えい、どうか私の意識を全くうばつた後、お願ひ致します。」

ドクトルはドール嬢の心中を読んだ。

「分かりました、御希望にそふ様に致します。意識を失ふ様な注射をしてあげます。」

「どうぞ。」

ドール嬢はすべてを決心した。そして覺悟の上の心の靜寂に居ながら、靜にドクトルの後について室を出た。

二

ドクトルの治療室には、百燭の電燈が、晝をあざむいて光を降らして居る。純白のベッドの上に仰向きに倒れたまゝ、ドール嬢はかたく眼を閉ぢて居た。ドクトルは只一人藥品戸柵の前に立つて、注

ドール嬢は氣を引き立て、ベットから立ち上つた。甚だしい眩暈が彼女を捕へた。彼女はしばらく床に腰を下して居た。

——人々のめざめぬうちに——

ドール嬢は辛うじて立ち上つたそして不安に思ひながらドアに近づいた。案じて居たドアは苦もなくあいた。靜かに足音をしのばせて、ドール嬢は階段を昇つた。自室は電氣も灯らず、全く夜があけて居た。

ドール嬢はしばらくは室の入口に立つたまゝ、茫然として立つて居た。室内にちらけてある荷物はかなり多かつた。

——身だけ逃げればいゝ。荷物などはどうでもいゝ。——

ドール嬢は小さなトランクに身づくろひの道具と一二冊の本とを入れた。そして一二枚の衣類を入れた。階下から物音が聞えて來た心はせきたてられた。

そはくした心に追ひ立てられて、ドール嬢はトランクを一つ手にさけて、手近にある帽子をかぶつて、音を立てぬ様に自室を出て階段を滑る様に降りて立關に出た。書生が今起きたばかりらしく立關に立つて居た。ドール嬢はしばらくためらつて居たが、又家の内から人聲が聞え出したので、勇氣を起して立關にとび出した。

射器を捜して居る。雨がシト／＼と窓外の街の灯に降りそいで居る。

ドクトルは強ひて心の平靜を保ち續けるためか、口笛を吹きながら、注射器を消毒器の内に投げ込んで、電氣のスキツチをひねつた。

窓外はまだ宵のうちの物音が、雨の音と混つて騒しかつたが、治療室のなかは深夜の静けさであつた。

十分の時間が過ぎた。ドクトルは注射器の蓋をあけた。湯氣がバツと立つた。ドクトルはピンセットをもつて、注射器を引きあけた。

注射器に麻酔劑が吸引された。ドクトルは注射器を手にもつて、ドール嬢の仰臥するベットに近づく。

「ドール嬢……」

ドクトルの聲にドール嬢はかすかに眼をあけたが、すぐに又瞼をとぢた。

「今注射します。」

ドール嬢は全く無抵抗に、ドクトルのなすまゝになつて居る。ドクトルはドール嬢の手をまくりあげた。そして靜かに注射器を皮下にさした。ドール嬢の上腕の皮膚が、かすかにふるへる。注射液が全くドール嬢の皮下に注入されて、注射器がぬかれた。

「大變です。ドールさんが居なくなりました。お起きになつて下さい。」
 妻君の叫聲にドクトルは我破と起き上つた。
 「變です、確に變です。」

「どうしたのだ。ドールさんがどうかしたのか。」

ドクトルは不安に満ちて立つ妻女を見つめた。

昨夜治療室に眠つておいでになるのを、心配でしたから二度程私は見に行きました。午前の四時頃迄は確かに治療室に眠つておいでになつたのです。山本さんの話では、今朝五時前にドールさんはトランクを一つ持つて立關から出ておいでになつたさうです。」

「午前五時に？」

ドクトルは寢巻のまま、寢室を出て藥局へ行つた。

「山本君！」

書生の山本は新聞を見て居た顔をあけて、朝の禮をして。

「ドールさんの出たのは何時頃なのだ。」

「五時前です。」

「どんな様子だつたのだ。」

五

思はず朝寢をして居た森ドクトルが、妻君に夢を破られたのは午前の八時を過ぎて居た。

ドール嬢がトランクを手にして出て來たのを見て書生は一寸驚いたが、まゝおほえのあやしけなフランス語で云つた。
 「おはやう。」
 ドール嬢はそれに答へる心の餘裕も持たずに往來にとび出した。そして方角も考へずに朝の街路を急ぎ出した。一町程も來た時初めてドール嬢は稍安心した。と同時に森ドクトルからはのがれたが、何處に行くべきかに迷つた。電車が走つて來た。ドール嬢は四周を見廻した。まだ戸をあげぬ家が多かつた。
 タキシードが一臺走つて來た。ドール嬢はすぐそれをよびとめた。

「どちらへ行きますか。」

ドール嬢はしばらく返事が出來なかつた。

「丸の内ホテルへ。」

と答へてドール嬢は轉ぶ様に車内に這入つた。

「何だかかう少しそはくして居られました。小さなトランクを一つ手に提げて、蒼い顔をして出て行かれました。」

「何故すぐに話さないのだ。」

ドクトルは叱る様に云つた。

「朝早かつたので、つい……」

「そんなに早いならば尙更云はなくてはいけないぢやないか。」

ドクトルはかう云ひ捨て、其ま、階段を上つた。ドクトル夫人も後からついて行つた。ドール嬢

の室は鍵もかゝつて居なかつた。

ドアをあけて入つて見ると、室内の様子は何も變る事がなかつた。

「おい、置手紙でもしてありはしないか。」

ドクトルは夫人にかう云ひながら自らも、室内をあちこちとさがした。それらしいものは全く見當らなかつた。

「困つた事になつた。」

ドクトルは椅子に腰を下して嘆息した。その様子を見て夫人が云つた。

「一體どうなさつたのでせう。逃けておいでになつたのでせうか。」

「さうだ、身をかくしたのだ。」

ドクトルの言葉は斷定的であつた。夫人がドクトルを見返した。

「どうしてそんな事をなさつたのでせう。」

夫人の此間にはドクトルは、ハタとつまつて了つた。狼狽の心がドクトルの顔に姿を現した。

「一體昨晚はどうしてドール嬢は麻酔劑など必要だつたのです！」

夫人の問は詰問の調子に満ちて居た。ドクトルは答へる言葉がなかつた。

「何處がお悪かつたのですか。どうして治療室におやすみになる程深い麻酔が必要だつたのです。」

夫人はドクトルが答へぬのを知つて疊みかけて問うた。

「そこはお前の知るには及ばぬ事だ。」

ドクトルは夫人を叱りつける様に云つた。

「無理に伺はなくともいのですが、何だか變ではありませんか。昨夜さう云ふ事がある。そして今朝はもう姿が見えない。何ですか私變に思はれます。」

「俺には分つて居るのだ。」

ドクトルは自信を以て云つた。祕密を知らるゝ事がどれ程ドール嬢には苦痛であつたらうか。あの刺青を知らるゝのは命をたゝるゝ程に苦痛であつたであらう。然もあの刺青を抹殺する覺悟をして、

特に意識を失つた状態で、醫者に刺青を見せる事に決心したものの、意識が歸つたならば、どれ程此秘
密を第三者に知られた事に恐怖を感じたであらう。家出をするのも當然であると、ドクトルには思は
れたのである。

夫人は尙も猜疑めく眼をドクトルに向けて居た。

「どうも私には合點の參らぬ事がありました。あなたは今迄時々私をとりのけにして、ドールさんと
話しておいでになりました。今だから申しますが、私は心配して居ましたのです。」

「馬鹿奴！」

ドクトルは大聲で夫人を呶鳴りつけた。が心の中には幾分のやましさがないではなかつた。と云ふ
よりは、そのやましさのために却つて夫人を呶鳴りつけたのである。

「俺も立派な口ばかりはきけない。昨夜全く意識を失つて居た。ドール嬢に對して……それは自
分の内心の問題だけで終つたとは云へ……全く醫師の良心だけで居たであつたらうか。——

夫人は靜かに室を出んとした。

「おい、待て。お前は馬鹿々々しい事を考へてるのだぞ。」

夫人は一時足をとめたが、又靜かに足を動かして室を出て行つて了つた。

ドール嬢が絶望的に悲嘆に沈んで、丸ノ内ホテルに、重い頭を抱いて、食事もとらずに、又學校も
無斷缺勤して居る日の朝、小原君は小林畫伯と自家の應接間で話して居た。

「小原君、本氣でたのむのだ。僕はもう堪へられなくなつたのだ。彼女から手紙が急に來なくなつて
以來、随分やけになつて酒も呑んだ。そして花柳の巷をもさまよつて歩いた。だがそれはみんな空虚
な氣まぐれだつた。まぎれやうとすればする程、彼女の事を思ひ出して來る。もうこの上は辛棒出來
ない。僕は日本の女性ではどうしても満足出來ないのだ。本氣でたのむのだ。山路さんに話してくれ
ないか。」

小原君は小林畫伯が泣かんばかりに云ふのをきながら、何とも云はず痛快を感じた。「
話しては見るが、交換條件が出るのが恐ろしくてね。」

「それもお察しする。だが君はどうせ名家の出だ。一度は結婚しなくてはならない。夫ならば僕の爲
に、それもしのんでくれないか。それも山路男爵家の娘さんが君の氣に入らぬならば、ともあれ別
いやでないのだし、又娘さんはその積りで、君と一緒にフランス迄行くのを樂みにして居るんだ。た
のむ。」

「だが、君はさうして向ふへ行けば戀人に逢へるのだらう。そして僕は見劣りのする日本女をつれて行くのでは……」

「そんな事はない。あの娘さんならば、決して向ふの人にまけはしないよ。それに又近來の様に手紙一本よこさぬ様では、彼女の現在だつてどうなつて居るのやら分りはしない。だから一層僕は早く行きたいのだ。」

「勿論僕だつても君の行く事は一日も早い方がいゝと思つて居る。」

「それならば何分たのむ。僕は又今日もこれから金策に出かけるのだ。」

「とにかく山路に話しては見る。どうなるかは分らないが。」

小林畫伯は家を出た。家を出ても金策のあてがあるのではなかつた。世の中は二箇月前に突發した銀行の破綻、續くモラトリアム等から甚だしく不景氣であると云はれて居た。

小林畫伯は今迄自分の繪を買つて呉れた人々の内、所謂富豪と云はれる人達を、心に思ひ出しながら、梅雨明けの暑い街路を歩いて居た。彼は電車通り迄出て來たがまだ行先が決定しなかつた。眞白く強い日のあたる街路は目に痛かつた。其強烈な刺戟に堪へられなくなつて、彼は丁度目についた横町に入つた。屋敷町に入ると、すべてがすくすく思へた。高い塀の上からは青葉が往來の上迄ものびて居た。金魚屋が荷を地の上におろして煙草を吸つて居た。青梅賣がなつかしい緑色の梅の實を

ざるに入れて、賣聲を立てながら通つて居た。小林畫伯は梅雨明けそのもの、姿を見た様に感じて、ゆつたりとした氣分になつた。此二三週間の焦慮が心から解けて行つて、ゆつたりとした心に餘裕が出來て來た。

「あせらなくてもいいのだ。秋迄に出發すればいい。秋のサロンの終る迄に巴里へつけばいいのだ。」

小林畫伯は愉快であつた。ドール嬢の事も左程心配でなくなつて來た。

「あれ程愛しあつた仲だもの俺が近く行くであらう位は云はなくつても分つて居るだらう。——かう考へながらふと通りかゝつた家の標札を見上げると、梅村良之助と讀めた。それは大阪の大商店主の名であつた。」

「さうだ、大正九年に春の展覽會の繪をかつて呉れた人だ。——」

小林畫伯は別に特別な期待を持つてもなく、此家の門をくゞつた。

「御主人はいらつしやいますか。」

小林畫伯は名刺を出した。取次に出て來た女はあだッほい粹姿の女であつた。おめかけさんだらう……と思つて小林畫伯は興味を持つて居た。

「どう言ふ御用ですか伺ふ様に旦那様がおつしやいます。」

は物慣れてコップにビールをついだ。

梅村氏はビールをグツと飲み乾してから笑ひながら話し出した。

「どうもすつかり近來は非道い目にあつて了ひましてね。しばらく身をかくして居る譯なのです。標札などひつこめなくてはならないのを忘れて居たのです。もつともあんな様な、心安くお話の出来る方には標札もある方がいゝですが、實は臺灣銀行問題から、私の仕事などもすつかりめちやくになつて了ひましてね。大體破産と云ふ段取になつちやいました。それでしばらくこんな所に身をかくして居るのです。どうも私達は身體に藝がついて居ないのですから、かう云ふ事になると、まるで臺なしですよ。今頃女房の奴一人で頭の下げつこをやつて居るのでせう。どうせ落ち行く先はすつぱだかになるにきまつて居ますから、一週間程前にあちらを逃ける時、出来るだけ現金を持って逃げて來たのです。が考へて見れば金で持つて居れば結局とられるにきまつて居るので、新橋で大騒ぎを五六日、夜晝ぶつ通しでやつて居ましたが遂ばれさうになつて來ましたので此奴をひつこぬいてのわび住るを初めたのですよ。」

梅村氏は一向困つてゐる様子もなく他事の様に話した。女もクス／＼笑つて酌をして居た。小林畫伯は破産などを何とも思つて居らぬ梅村氏の様子を芝居でも見る様に愉快に思つた。

「それは途方もない事になりましたな。」

簡単なありふれた氣候の話などが二人の間に交換されて居る間にビールと果物が運ばれた。粹な女

七

小林畫伯は女の言葉が却つて面白く思はれた。私は畫家です、大正九年に私の畫を買つて戴いたのです。別に用事はありませんが、たゞ御門前を通つてこちらにお住ひなのを知りましたのです。女は又内に入つた。小林畫伯はどうなるかと新しい興味を持つて待つて居た。程なく奥の唐紙があらいて、浴衣姿の六十歳の梅村氏が出て來た。「思ひ出しましたよ。さアお上り下さい。」以外に歓迎してくれるので、小林畫伯はうれしくなつて上つた。庭を見晴らしにした十疊の座敷へ梅村氏は畫伯を案内した。

「しばらくでしたな。相變らず御勉強ですか。」

梅村氏は舊友に逢つた様に話しかけて後、お茶を持つて來た女に云つた。

「ビールでも持つておいで。今日は面白くお話出来る方が見えたのだ。」

小林畫伯は近來になく愉快になつた。

「だが、かう云ふ景氣になれば仕方ありませんよ。今迄い、夢を見たゞけ徳をしたと思ふのです……
ですがかうなると小林さんの御仕事などにも影響するでせうな。」

「えい、大影響です。實は又フランスへ行きたく思ひまして、金主をさがして居るのですがなく、
なくて困つて居ます。」

「さうでせうな。私なんかも何とか金をかくす事が出来れば、連れて行つて貰ひたいものですが。あ
ちらの女は美人でせうな。」

梅村氏はかう云つて女を見た。

「仕様のない方ね。」

女は小林畫伯を見ながら云つた。

「まあ日本に十人並と云ふのが、普通の女で、ちよつと美人だと思ふ女は、日本國中さがしてもない
かと思ひます。」

「ほい、それは。で、どうです金は出来ますか。」

「とても出来ません。」

「だが、さう度々では奥さんがお氣の毒ですな。」

「女房なんかありません。」

「へえ？ まだ獨身で。なる程それではフランスへ氣をひかれるのも御尤ですよ。」

「あはい。」

女が口を入れた。

「藝者なんて云ふものがあちらにもありますか。」

「マアさう云つたものもありますよ。踊り場の踊りッ子がマア日本の藝者でせう。ですがさう云ふ商
賣人でなく、素人娘がいくらも友達になります。」

「マア、便利ですね。」

梅村氏がくすくす笑つた。

「さう云ふ譯ならば尙更フランスへおいでになりたいでせう。まつてる人があるんでせう。」

「ありますね。」

「そいつは痛かつた。それでどう云ふ人なのです。」

「子爵の娘さんです。」

「へえ？ 華族さん？ なる程、それでは。……と伺ふと何とかして金を造つてあげたくなりませ
が、今の私では。……私は女にほれる男を見つけると今迄もきつと金を出して來たものですよ。まア
一種の病氣ですね。そしてその二人が仲よくして居るのを見ると、自分の事の様にくれしくなるので

す。」

「さうですか。それでは今年の春頃お願ひに上るのでしたな。」

「さうですよ。春ならばきつと早速に用立しましたらう。残念ですな。」

梅村氏は心から残念さうに腕を組んで考へ出した。

「電報! 梅村さん。」

玄關で聲がした。女は玄關に出て行つて、電報を持つて來た。梅村は電報をあけて讀んだ。

「あは、たうたう臺なしだ。これで萬事終りだ。おい。俺は歸るぞ。」

梅村氏が立ち上つた。

「桃助。もう駄目だよ。お前はいつでもするさ。自由な身體になつたのだから勝手にするさ。」

女は別に驚く様子もなく、次の間へ立つて行つた。その後姿を見た梅村氏が小林畫伯に云つた。

「どうですか。フランス女をやめて、今の桃助でしばらく辛棒しませんか。あの女は當分は此家に居るでせうから。」

梅村氏は着物を着換へる爲に隣室へ行つた。小林畫伯は狐につまゝれた様に呆然と坐つて居た。

八

梅村氏隱棲の家を辭し去つた小林畫伯は、金のある人々が此度の經濟混亂のために受けた打撃の深刻であるのを知つて、渡歐の費用を實業家方面から引き出す事の至難であるのを思ひながら、街路の夏ほこりをあびながら、たゞあてもなく東京をあるき廻つた。

夕暮になつてから彼は思ひ出して郊外の中野に棲む友人を訪ねた、此友人は小林畫伯の小學時代からの知合であつたので、年に一度位は訪問して、秘密のない仲であつた。法科出の友人は地方の内務部長をつとめて居たが先頃の政變と共に潔く辭職して浪人生活を樂んで居た。

「しばらくだつたな。たうとう浪人したよ。」

友人は舊友の小林畫伯を招じて話しかけた。

「政變で浪人をする様になれば、もう一人前だよ祝福して可なりだ。」

「まアさう思つてるよ。だが今度の浪人は永いらしいので心細いよ何しろいつの間にか憲政會系と相場をきめられて了つたが、その憲政會がごたごたしてるのだから、僕達は心細くてね。」

「然しいよ。浪人出来るだけ金がたまつて居るんだから。」

「ところがさうでないのだ。金などあらう筈がないさ。だが幸か不幸か女房の里が仕送りをして呉れ

「知つてるとも、パリで君を訪ねた時御馳走してくれたから。實際いゝ人だつたよ。あの人ならば僕だつて逢ひたいよ。」

「だから僕が行きたいのも尤もだらう。」

「うん。今度行つたら結婚してつれて歸り給へ。」

「あゝさうするしかないと思つてるのだ。だから金の心配をしてくれないか。友人はしばらく考へて居た。」

「さうだな。同情は十分にする。だが現在僕が仕送りをうけて居る身分なのだから、僕からは一寸云ひ悪いのだ。今女房を呼ぶから君女房に交渉して見ないか。女房は情にもろい奴だし、君の事をよく話してよ。實際僕は本當の友人が少いので、時々君の事が僕等夫妻の話題に上るのだ。」

「では話して見るか。」

「あい。」

友人は女中をよんだ。

「奥さんに小林さんが見えになつたと話してくれ。」

夫人は化粧くづれをなほして出て來た。

「やアしばらくでした。今度はお目出度い浪人をなさつて結構でしたな。」

るよ。」

「そいつは浦山しいな。もつとも君が憲政會とにらまれた理由の大部分は奥さんのお里の關係なのだらう。」

「さうだよ。だから仕送りをするのは義務だと云へば云へる。」

「ほんとだな。それで奥さんのお里は今度の銀行さわぎには關係はなかつたのか。」

「少しはあつたかも知れないが、何しろ憲政系の政商とにらまれて居る位だから、うまくあれを逆用する位の智慧はあつたらうよ。」

「なる程なア。さう云ふ事になれば、一つのみがあるんだ。どうだらう、奥さんのお里では僕に金をかけて呉れないだらうか。」

「さアそいつはどうだかな。何に金が入用なのだ。」

「又洋行したくなつたのだ。」

「贅澤だな。そんなに度々行つたつて仕方ないぢやないか。」

「何も贅澤ぢやないよ。僕等がパリへ行くのは君等が役所へ行く様なものだよ。」

「まアさうかも知れないな。どうした例の美人は。」

「うん、君は知つてるのだな。」

「あらッ、いやですよ。困つて居りますのに。」
友人は夫人に云つた。

「小林さんが又フランスへおいでになりたいのださうだ。それで其金を豊田が出してくれないかとおつしやるのだが、お前一つ交渉してあげないか。」

「さあ話しては見ますが、良夫が世話になつて居る矢先ですから。……」

「その矢先だからお前に話させるのだ。さうでなければ僕が行くのだ。それに小林さんはフランスに仲のいい人があるのだ。その人に逢ひに行くのだから、同情してゐるんだ僕は。」

「まあさうですか。フランスの方はみんな美しくておいで、すからお逢ひになりたいのも御尤ですわ、奥さんになさつてお連れになればいいでせう。」

「奥さん、その積りなのです。ですからお願いします。」

「え、明日でも話して見ます。此頃末の妹がフランス語をならつて居ますが、フランスの方が教へに来て下さる様です。それは美しい方なのです。私も一寸お目にかかりましたが。」

「さうですか。どう云ふ方なのですか。」

「何でも華族さんのお嬢さんですドールさんとか。……」

「え？ ドール？」

小林畫伯は夫人を見つめた。

九

小林畫伯は夫人の言葉に驚いてしばらくは言葉が繼げなかつた。友人は小林畫伯の驚きを知つて言葉かけた。

「どうしたのだ。君はその人を知つて居るのか。」

辛うじて小林畫伯は落著いて來た。

「彼女が今日本に來て居る筈がない！」

「ぢや君も知つて居るあの人もドールと云ふ姓なので一寸おどろいたのだ。」

「さうか。然し或は來て居るかも知れないぢやないか。やつぱり華族だらう。」

「うん。華族だ。だが日本へ來れば眞先に僕を訪ねて來る筈だよ。だから別人に相違ない。」

「なる程、別人だらう。」

小林畫伯はすつかり落著いて夫人に向つた。

「奥さん、私を助けて下さい。幸ひに御承知願へるとすれば、私の滞歐中の作品は皆豊田さんに差上げる考へで居るのですから。」

「あれで豊田も案外晝をすきなのだからお前の交渉のしやうによつては成功するだらう。うまくやつてごらん。」

「え、話して見ませう。父も近來は茶屋遊びをやめてそんな方面をたのしむ様になつて來ましたから。」

「どうかお願します。これで一安心だ。では失敬する。」

「まア飯でも食つて行かないか。」

「浪人の飯を食つてはすまないからな。」

小林晝伯は安心して友人の家を出た。もう日は暮つて居たので、一寸した洋食やで飯をすませて、小林晝伯は小原家へ歸つて來た。

彼が立關を入つた時、小間使が云つた。

「若旦那様がお待ちです。」

小林晝伯は小原君の室へ入つた。

「おい、今歸つたよ。何か色よい話があるのか。」

「うん、今日山路をくどいて見た。全く脈がないでもなささうなのだ。で一つ君にたのみがあるのだが、例の僕の結婚問題の方を何とかして君がくひとめて呉れないか。」

「そいつは罪だな、どうしたのだ。是非娘さんを同伴しろと云ふのか。」

「まアさうなのだ。ところがあの娘は結婚が目的でなくて洋行の方が目的なのだ。つまり僕を護衛兵として行く積りなのだから馬鹿にして居るぢやないか。」

「それは稍よろしくないな。」

「そしてそれを豫定してフランスの女をやとつて會話をならつて居ると云ふのだ。」

「さうか。で話は自由なのだな。」

「僕よりはうまいだらうよ。」

「そんならば、大して足手まとひでもなからう。」

「だが、いやだよ遊べやしない。」

「それはさうかも知れない。」

小林晝伯は話して居ながらも考へて居た。

山路よりも豊田の方が却つて可能性がありさうだ。小原を通して却つて小原のために利用されるのも考へ物だと思つた。

「小原君、山路さんの娘さんを教へに來るフランス人はどう云ふ人なのだ。」

小林晝伯は只豊田家へ來ると云ふ人を思ひ出して偶然きいて見ただけであつたが、小原君はその言

葉で甚だしく狼狽した。

「一向知らない。只フランスの女の人ときいたゞけだ。」

「ドールと云ふ人ではないのか。」

小林畫伯は只云つて見たゞけであつた。然るに小原君は甚だしく狼狽して了つた。

「知らないよ。全く知らないよ。」

小原君が狼狽するのは小林畫伯には只をかしかつた。小原君は心配でたまらなくなつて來た。然し今自白して了つては困ると思つた何とかして一時はごまかさなくてはならぬと思つた。

「ドールと云へば君の戀人ぢやないか。」

小原君は小林畫伯が既にすべてを知つて居るであらうと思つたので、後日のために裏をかく積りで云つた。

「さうだよ。何でもドールと云ふ女が日本に來て居るのは確なのだ今日きいたのだ。」

小原君はいよく押し込められる様に感じた。危険であるのを思つた。

「僕も今夜或る處でそれをきいてびつくりしたのだ。やつぱり弱があるよ。考へて見ればもし僕の彼女が來たのならば、先づ僕をたよつて來るに相違ないと考へたよ。それで自分ながらをかしくなつたのだ。」

小林畫伯は小原君の心配などは全く考へずに暢氣に云ひ續けた。小原君はやつと救はれた。てれかくしに云つた。

「今度山路へ行つたらば、何と云ふ人かきいて來るよ。」

「それには及ばないよ。なまじ姓が同じだと却つて氣にかゝつていけない。そんな事より一日も早く出發するのだ。」

「あゝ、さうし給へよ。」

小原君はかう答へて、本氣になつて小林の洋行費を心配しなくては、自分が危険であるのを思つた。

刺青の男

「たうとう私が矢表に立つ日が來ましたよ。」

刺青の男は白服に夏帽で森ドクトルの診察室に表れた。

「ドール嬢の行方は全く分らないのです。昨日も學習院女子部へ訪ねて行きましたが、あれきり無斷

解して居るから差支へないのですが……あなたの様な方とドール嬢とが知り逢であると知ると、ドール嬢をも疑はないとも限りません。」

「へえ？ 妙な事があるものですか。及ばない事だ。まあそれでは又辯明にも行きますがな。それよりも私は又これから思ひあたる筋をつきとめて、ドール嬢の行方を一つさぐる積りです。そいつは差支へないでせう。」

「それは勿論いゝでせう。私とても心配ですから。ですがなるべく常識的にお願いします。」

「常識的とは？」

「つまり、今の日本はあなたのお考へにならぬ妙な心の人居ますから、なるべくあたり障りのない、様にと云ふ意味です。」

「分かりました。つまり私にも日本的なケチ臭い、云ひたい事も半分しか云はぬ様に、氣をつけろと云ふ事ですな。」

「まあさうです。」

「さうしませう。つまり嘘でかためて、それを體裁だと思つて行動する。さう云ふ事でせう。」

「さうですよ。」

刺青の男は急にドクトルの家をとび出した。——馬鹿らしい事だ云ひたい事も云へやしない。お體

缺勤だと云ふのです。それだけならばいいのですが、女子部の主事が、私が行くと待つて居ましたと云はんばかりに、私に逢ひましたそして私の身分しらべを始めるんです。私はドール嬢の行方不明とは何の直接關係もあるものでないのに、主事は私をどうしたのか、甚だしく疑つてる様子なのです。——どう云ふ機会にドールさんとお知り合ひになつたのですと——まるで吐られてる様なのでせう。私も大分癢に障つたので、身の上話をざつとばらんに述べ立て、やりましたよ。そして序だから背中を拜ませてやりました。——此刺青がとり持つた縁ですよ。ドール嬢と知り合つたのは。——とやつ、けて主事を煙にまいて來ましたよ。どうですか、その後ドール嬢の行方はこちらでま全くお分りになりませんか。」

刺青の男の痛快な話をきながら、稍心配にもなつて來たドクトルは、眉をひそめて云つた。

「全く分かりません。心配はして居るのですが。……坂上さん、日本の現在にはあなたが考へておいでになるよりも古いのですから、あまりすばくとおやりになると却つてあなたのためにも、ドール嬢のためにも面白くない結果になりやしませんか。」

ドクトルは大部遠慮がちに云つた。

「どうして？ 私世界を股にかけて流浪してあるいたのを話しては悪いのでせうか。」

「まあそれはいゝでせうが、主事などから考へれば、あなたの様な方……勿論私はあなたを正しく理

裁ばつかりの國なのだ。——かう考へて刺青の男は電車にとび乗つた。電車の中の客は皆外出の顔をして居た。笑の片影さへも見えない。車掌も喧嘩腰であつた。刺青の男は電車の客にも車掌にも反感を持つて了つた。

——かまうものか、やるだけやれ、そして虚偽に充ちて居る日本をかきまぜてやれ！——
刺青の男は小原君を訪問する事にした。小原は確に知つて居る筈だ。小原がきつと黒幕に相違ないあいつを高飛車におどかして白状させてやらう。又もごまかしを云ふならば頭の一つ二つ殴りのめしてやらう。それしかない。

刺青の男は小原君の立關に立つて呼鈴を押した。小間使が出て來た。

「小原一郎さんは御在宅ですか。」

「はい、いらつしやいます、あなた様は？」

「僕は坂上と云ふものです。お目にかゝればお分りになります。」

小間使は一度引き込んで後又出て來た。

「失禮ですが只今お仕事中ですから、明日にお願したいとおつしやいます。」

「さうですか。……では一寸おきき下さい。ドール嬢と云ふ人を何處におかくしになつたかと。……」
小間使は不思議さうな顔をして引き込んで行つた。刺青の男は今の問をきく時の小原君の狼狽を考

へて痛快に思つて小間使の再び表れて來るのを待つて居た。

突然荒々しく取次のドアが内からあけられた。

「何をあなたは云つて來られたのですか。」

大聲で小原君自身立關に表れて來た。刺青の男は思はぬ收獲に喜んだ。

「何でもない事です。ドール嬢を何處にかくしたかを伺ふのです。」

「そんな事は知らん。」

小原君は不愉快千萬の顔をした。

二

「あなたが知らなくて誰が知つて居るのですか。」

刺青の男は相手が喧嘩口調で出たのに應じてかう云つた。

「どうして私が知つて居るのだ。私がそんな事を知つて居る筈がないではありませんか。第一ドール嬢が行方不明だと云ふ事さへ初耳です。」

「或はさうかも知れない。だが小原さん、私は本氣なのですよ。ドール嬢を苦境から救ひ出す事は私は本氣になつて居るのです。だから嘘をつかずに話して下さいませんか。」

「お返事がお出来にならぬでせう。現在此お宅に小林さんは居られるではありませんか。それを何故あなたはかくして居られたのですか。」

小原君は徹底的にやりこめられて、とみに言葉も出なかつた。刺青の男はもう満足して了つて第一目的に歸つた。

まア。過ぎた事はどうでもいゝのです。たゞドール嬢の今の居所さへ分れば、私はそれでいゝので「す。それを話して下さい。」

「それは全く知らないのです。」

小原君の言葉には嘘がなかつた。刺青の男は小原君の言葉を疑はなかつた。

「さうでしたか、本當に御存じなかつたのですか、そいつは失禮しました。」

刺青の男は今迄の激越した口調とはうつつて變つた調子で云つた。

「どうです。まアお上り下さいませんか。」

小原君もかう云ふしかなかつた。

「では失禮させて戴きませう。さうきまれば御相談したい事もありますから。」

刺青の男は靴をぬぎ出した。小原君は案外さつぱりして了つた刺青の男を面白く思つて、先に立つて應接間に入つた。

「まだ君は私を疑つて居るんですか。第一私が何の必要があつてドール嬢をかくすのです。」
「必要？ なる程、私から考へれば必要は全くないと思ふのです。だがあなたはその必要があるではありませんか。」

「そんな必要は斷じてない？」

「あります。確かにある！」

「ない！」

「ある！」

「何を君は云つてるのだ。それならば君の思ふ所を云つて見給へ。」

「云ひませう。あなたはドール嬢と相思の仲である小林畫伯に、ドール嬢を逢はせぬために、ドール嬢をかくす必要があるのです。」

「想像もいゝ加減にし給へ。小林とドール嬢と逢ふ事を何故に私が邪魔をする必要があります。」

「そいつは私には分らない。あなた々けしか知らない事だから。……だがそれならば何故に私が小林畫伯の住所をあなたに伺つた時知らぬと云はれたのです。」

刺青の男は勝ちほこつて云つた。小原君は一寸返事に窮した。まさか此男が小林が小原家に居るのを知つて居るとは思はなかつたが、さすがに氣はとがめて居た。

刺青の男は今迄の態度をがらりと捨て、了つて云つた。

「失禮しましたよ。私はてつきりあなたがドール嬢を誘惑したのだと一人ぎめにして居たのです。」

「そいつは全くぬれ衣ですよ。」

小原君も笑つた。

「一體あなたが小林畫伯の事を私におかくしになつたのがいけないのですよ。」

かう云はれると小原君は何とも云へなかつた。只口をつぐむしかなかつた。

「實は一週程になりますが、ドール嬢が急に森ドクトルの家から身をかくして了ひましたのです。勿論稍理由はあつたのですが、それきり學校迄無斷缺勤して居るんですそれで私はてつきりあなたの方策だと思つちやつたのです。」

「全く私は知らないんです。どうしたんでせうか。」

「小林さんはどうでせう。」

「小林は尙何も知らないでせう。」

「でもドール嬢と小林さんとは思ひあつてる仲なんですからな。私やあなたを出しぬいてもうどこかで逢つてるかも知れませんか。もつともそれならば私はちよつとも心配するに及ばないのですが。」

小原君はその時小林畫伯の先夜の言葉を思ひ出した。

「いや、そんな事はたしかにないでせう。實は先日小林はドールと云ふフランスの貴族の娘が日本へ来て居ると云ふ事を知つて居ましたが、その娘さんが自分の知つて居るドール嬢とは全く考へて居なかつた様でした。」

「へえ？ 小林さんもうすくは感づいてるのですか。」

「いゝえ全くさうは考へて居ないのです。もしあのドール嬢ならば眞つ先に自分を訪ねて来る筈だ。それを日本に迄来て訪ねて来ないのは別人だと云つて居ました。」

「さうですか。その時あなたは話しておあけにならなかつたのですか。」

「えい、つい……」

小原君は紅くなつた。

三

刺青の男は小原君がすつかり降服して了つたのを知つて、彼に對する悪意を全く捨て、來た。

「まアあなたもその時すぐにお話しになる事はお出来にならなかつたでせう。それ迄かくしておいでになつた手前もあるでせう。それはそれとして、ドール嬢と小林さんとを逢はせぬ様に苦心しておいでになつたのは、私には實はちやんとよめて居るんです。つまりあなたがドール嬢にほれて居たので

す。だから惜しかつたのです。その氣持は私にも分りますよ。初對面の時から小林さんと相思の仲の人と分つてたならば別ですが、途中からさう分つたのでは、なかなかあきらめがつかぬものです。だからあなたは小林さんに出來るだけドール嬢を逢はせぬ様にして居られたのだ。それは當然だ。私だつても……」

刺青の男が此處迄云つた時、小原君は安心して顔をあげた。

「あなたも？」

「え、私だつてドール嬢にはほれましたよ。すつかりほれちやつたのです。だが私はすぐにドール嬢は小林さんと云ふ戀人のあるのを知つちやつたのです。それで私はあきらめちやつたのです。その反動として、私はドール嬢と小林さんとの仲をうれしくして見たくなつたのです。淋しいあきらめです。かう云ふあきらめはなかなか出來るものではありませんよ。私なんか子供の時から世界を股にかけて飛びあるいたので、いつも淋しくあきらめたものです。それしかない場合がなか／＼あつたのです。それであきらめがよすぎるのです。」

何とかして小林畫伯とドール嬢とを長く暮させたく思つたのです。そしてそれを外から見て自分もうれしく思つて満足しやうと思つて居たのです。私の方が恐らくはあなたよりも眞劍にドール嬢を思つて居るでせう。あなたは一時の出來心位のものでせうが、私は恐らく一生忘れずまい。もつとも

一生忘られない淋しい叶はぬ戀はいくつもあるのですが。……」

刺青の男はかう云つて淋しい顔をした。小原君は刺青の男の本心をきいて、自分の心もめざめて來た様に思つた。

「よく分りました。私などはあなたの云はれる通り浮氣な心に過ぎないのです。云はゞ不良少年の心になつて外國の女をからかひたかつた位です。一つには物珍らしくもあつたのですが。……かう話が分れば、早く小林とドール嬢とを逢はせたいものです。」

「私もそれをひたすら願つて居るのですが、第一ドール嬢の行方の不明なのが困りものです。それに又先日一寸お話ししましたが、ドール嬢が今は小林さんに逢ひたくないらしいのです。例の刺青のために。」

「なる程。……」

小原君は腕を組んで考へ出した。刺青の男も沈痛な顔をして考へて居た。

「どうも私には分らん。ドール嬢が何故にあれ程刺青の事を氣にかけるのか、一向に見當がつかないのです。刺青……どんな刺青か知らないが、想思の仲で刺青があつたとでも祕密にするには及ばないと私は思ふのです。又祕密にしたつてもいつかは分る事ではありませんか。」

刺青の男はしきりに考へて居る。小原君が云つた。

「何か私達に分らない事があるに相違ないでせう。一體その刺青と云ふのは何時又誰が植ゑたものなのでせう。」

「それは全く分りません。恐らくドール嬢一人しか知らないのせう。」

二人はドール嬢の刺青の歴史を頻りに想像した。刺青の男は急に心を轉換させて云つた。

「まアそれはそれとして、ドール嬢の行方をたづねる事が私には先決問題です。又大活動をしなくてはならないのです。どうかあなたも一つお手をかして下さい。」

「承知しました。小林にもすつかり話してしまひませう。」

「それはまだ早いでせう。そのために却つて事がまづくならぬとも限りません。ドール嬢が身をかくしたと云ふのも、或は小林さんに逢ふのがまだ時期が早すぎると云ふ理由からかも知れませんから。」

「それもあり得べき事ですな。よろしい。私も小林を監視して居ます。そしてドール嬢の行方も私も心あたりからかぎ出す事にしますから。」

「さう願ひます。私はどんな苦心をしてもドール嬢と小林畫伯の幸福をいのるのです。それが淋しい私の心の糧となるのです。意地を通して見せなくてはならない。」

刺青の男は元氣な聲で云つて居たが、顔は失戀者の如く淋しかった。

小原家を出た刺青の男は、その足でフランスの大使館を訪うて、ドール嬢の行方について問うたが矢張り要領を得ずに、書記官室を出んとした。其時入れ違ひに髪を長くした洋服姿の未知の青年が、室に入つて來た。

刺青の男は、室を出かけながら、後から聲をきいた。

「今もそのドール嬢の居所をきかれましたが……」

それは老書記官の聲であつた。刺青の男は、それを小耳にはさみながら、室を出て、大使館の門に立つて居た。

絶望の表情で、先程の青年が出て來た。

「一寸失禮ですが。」

刺青の男は聲をかけた。問はれた青年はバタリと足をとめた。

刺青の男が近づく人に云つた。

「あなたは小林畫伯でせう。」

「小林畫伯は此奇妙な混血兒を見つめて答を待つた。」

「私ですか。私はお話する程の人間でないのです。刺青の男と自稱して居る遊び人です。」

刺青の男の語調はズベラそのものであつた。

小林畫伯には此態度が別に不思議でなかつた。

「あなたもドール嬢を知つておいでになるのですか。」

「えい、すこしばかり。」

刺青の男は急に遠慮がちに云つた。

「では伺ひたいのですが、そのドール嬢と云ふ人は子爵令嬢ですか。」

「さうです。」

「そしてどう云ふ履歴の人でせうか。」

小林畫伯の言葉の調子では明かに、畫伯はドール嬢を十分に知つて居なかつた。刺青の男はもうかくして居る事が出来なかつた。

「小林畫伯！ そのドール嬢はあなたと想思の仲です。」

「えい！」

「たしかにさうです。」

刺青の男は落着いて云つた。小林畫伯はまだ自分の耳を疑つて居た。

「リオン生れの人ですか。」

「それはきゝ落しました。ドール嬢自身からあなたの事を、私自身伺つたのですから確實です。」

「やつぱりさうだつたか。」

小林畫伯は安堵の聲を發した。

「それを確めるために私は大使館に來たのです。」

「私もすぐにさう思つたのです。」

「何處に棲んで居るのですか、彼女は。」

刺青の男は、はたと返事につまつた。その様子を小林畫伯は見つて低い聲で獨語した。

「どうも變だと思つた。何か譯がある。」

刺青の男が言葉を挟んだ。

「譯とは？」

「日本へ來れば先づ私を訪ねる筈なのです。それに私にかくして居るのが不思議でした。今あなたが彼女の住所をかくして居られるのを見て、私には凡そ理解出來ました。」

「一寸お待ち下さい。ドール嬢はあなたに逢ひたがつて居られるのです。」

「それならば何故來ないのでせう。」

「それが譯があるのです。」
「譯とは？」

「とにかく、ドール嬢の今の住所はドール嬢自身以外は全く知らぬのです。私は今それをまくために大使館に参つたのです。」

「分りましたか。」

「分りません。」

「一體どうしたのです。私には一向譯が分らなくなりました。」

「いづれ詳しくは分りませう。一週間前迄は私も時々お目かにつて居たのですが。」

「その頃は何處に居たのですか。」

「神田の森ドクトルの家です。」

「森？ 知らない。」

「何でも巴里で知合になられた様です。森夫人も巴里に居られたので、寄寓して居られたのです。それなのに、一週程前に突然姿をかくして了つたのです。」

「何故なのでせう。」

「その理由がどうもはつきりしないのです。」

刺青の男はかう云ひながら、ドール嬢の刺青の事だけでも小畫林伯の耳に入れてはならぬ事であると考へた。

「とにかく今は至急にドール嬢の居場所をさがさなくてはならないのです。それで私は毎日とび廻つて居るのです。私は只ドール嬢とあなたとに幸福の日の來るのを、ひたすらに祈つて居るだけなのですが、現在の事業はそれ一つしかないのですから、全力をさへけて居るのです。」

刺青の男の熱情は何物をも焼く程であつた。

「感謝します。私は實はドール嬢に逢ふために巴里へ行く金を造るのに全力をあけて居たのです。」

もしドール嬢の來て居るのを知らずに私が出發して了つたならば、大變だつたと冷々して居ます。私の友人なども大分心配して金を造つて居るのです。がまだ出來なかつたのが幸でした。」

「その友人と云ふのは小原畫伯でせう。」

「さうです。よく御存じですな。」

「その小原畫伯は前からドール嬢の來て居らるゝのを知つて居たのです。」

小原畫伯は驚いた。

「そんな事はない！ 斷じてない！」

「いや、私の云ふ事は本當ばかりです。どうですか、一つ小原さん呼び出して、三人してザツクバ

ランに話して了つた方がいゝと思ひますが。」
「さうしませう。だが小原がそんな不都合をやるだらうか。」
「魔がさせばどんな事をするか、人間は分りませんよ。とにかく小原さんを呼び出させよう。」
二人はあるき出した。

五

刺青の男と小林畫伯とが大河端の料亭に世間話しを待つた小原君は、程なく自動車でかけつけて来た。

「坂上さんと云ふ方が見えて居ますか。」

小原君は初めて、家の入口できいた。

「え、お待ち兼ねです。どうぞこちらへ。」

小原君は女中に案内されて、長い廊下を通りながら、急用があると云つて電話をかけた刺青の男が意外にも料理屋の奥の間に收まつて居るのを不思議に思った。何かドール嬢に關する事件であるのを想像して居たが、特に小原を呼び出す程秘密の用件があるのを妙に思った。

「こちらです。」

女中が唐紙をあけた。

「おつれ様がお見えになりました。」

小原君は唐紙の隙から座敷を見て愕然とした。意外にも刺青の男と小林とが話して居た。小原君は此二人の組合せを知つた時、ハツとして身を引いた。

「小林と刺青の男とが自分より先に話し合つて居たのだ。」

「小原さん、さアどうぞ。」

小原君は釘づけにされた様につき立つて了つた。

「さア入り給へ。意外だつたらう。」

小林畫伯もかう云つた。今迄ドール嬢の事は全く小林にはかくして來たのであつたが刺青の男と小林が逢つて居るのでは、小林が自分の家に寄寓して居る事も又故意に自分がドール嬢の事をかくして居た事も、皆ばれて了つたに相違ない。

小原君は覺悟して座敷に飛び込んだ。

「意外だつたなア。」

「さうでせうね。私と小林さんがかうして居ようとは全く思ひもよらぬ事だつたでせうね。」
刺青の男の言葉は皮肉たつぷりである様に小原君には思へた。小原君が女中の出す蒲團に坐るや否

「それは勿論知つて居たんですよ小原さんは。ところが變なものでしてね。あなたが好きになる様な人は、誰でも好きになるのです。小原さんもドールさんが好きだったのです。それでコソソリとして居たのでせう。そればかりぢやないですよ。小林さんが小原さんのお宅においでになる事を、私も承らくかくして居たんです。みんな悪意があつての事ぢやないのですよ。」

小原君は救はれてやつと口をきつた。

「實際失敬した、許して呉れ給へ。」

小林畫伯はいゝ様に暗の中を引き廻された様に感じた。

刺青の男が又云つた。

「誰だつてドールさんにはほれますよ。私の様に世界を股にかけてあるいた奴でさへ、ドール嬢のためならばどんな苦勞でもしたくなりますよ。唯私などは、あきらめがいゝから一心になつても小林さんとドールさんの幸福のために骨を折る一方になつて居るのです。其處へ行くと小原さんはまだあきらめられなかつたのでせう。だから出来るならばドールさんを手に入れたい。それが出来ぬ迄も小林さんとドールさんの仲をさきたく思つたのでせう。ねえ小原さんさうなのでせう。」

小原君は恥かしくなつて下を向いて居た。小林畫伯は刺青の男の言葉に段々と心がほされて來た。

「さア何事も水に流さうではありませんか。そして私は改めて小林さんとドール嬢とのために一肌ぬ

や、小林畫伯が小原君に云つた。

「君、驚いた事があるではないか今日日本に來て居るドール嬢と云ふのは、僕の友達のドール嬢なのだ。」

小原君は全く返事に窮して了つた。小林畫伯の此言葉の眞意が全く分らなかつた。小原君は刺青の男の顔を見つめた。刺青の男は何事もなかつた様に平然として居たそれが一層小原君を當惑させた。

「そして彼女は僕に逢ひたがつて居るのださうだ。」

小林畫伯が此處迄云つた時、刺青の男が初めて口を開いた。

「小原さん、先日は小林さんにはお話ししない事にお約束したのでしたが、今日偶然フランスの大使館で小林さんにお目にかゝりましたので、みんなしやべつて了ひましたよ。私は心にある事を黙つて居られない性質でしてね。」

小原君は刺青の男がどの程度迄小林に話して了つたのか、不明であつたので、何とも答へる事が出來なかつた。

小林畫伯は此時けゝんに思つて小原君に云つた。

「小原君、それでは君はドール嬢が僕の知つて居るそのドール嬢なのを、先から知つて居たのか。」

小原君はさすがに紅くなつた。刺青の男がいかにも他事らしく云つた。

ぐ積りです。小原さん、あなたも私の仲間入りをして下さい。」
刺青の男はキビくくと云つてのけた。

六

刺青の男の心の美しさは、小原君にも小林畫伯にもよく分つた。二人は刺青の男のさす盃をうけていつの間にか笑ひ合ふ事が出来た。

「それで問題はドール嬢の行方不明の事だけが残るのです。何とかしてドール嬢の行方だけは三人してさがし出さうではありませんか。」

刺青の男は先に立つて元氣よく云つた。

「ほんとだ。僕もその義務がある今迄小林君に對して失敬な行動をして居た罪ほろほしに、是非ドール嬢の行方だけはさがし出す事にする。」

小原君もかう云つた。

「どうかお願ひします。私も一心になつてさがしますが。……それにしてもどうしてドール嬢は姿をかくして了つたものだらう。」

小林畫伯は又も沈痛な表情をした。その時小原君は刺青の男を見た。刺青の男は思ひ出した様に小

林畫伯に云つた。

「小林さん、ドールが嬢を姿をかくした理由は實は私には大體想像がついて居るのです。それは先日小原さんとは話しあつたのです。だがそれだけは私達からはあなたに話してはならぬ事と思ひます。それはドール嬢から直接あなたに話して貰ふしかないので。ですから其點だけはもうきかずに居て下さい。又小原さんもその點だけは決して小林さんには話さぬ事を誓つて下さい。これは小林さんのためでもあり、又ドール嬢のためでもあると私は思つてゐるのです。」

刺青の男は謹嚴な顔をしてかう云つて口をつぐんだ。小林畫伯は刺青の男の態度に決して不服がなかつた。

「何れにしてもドール嬢の行方をさがすのが先決問題です。私はもう一生懸命でやる積りです。三人が手を分けて眞剣でやれば二三日で分るかも知れません。小原さんはドール嬢が今迄出入りした方面から手をつけて下さいませんか。私は専ら外國人の方面からさがし出します。小林さんはまああまりあせらずに心のまゝに行動して居て下さい。程なく又三人よつて愉快に飲む時も來るでせう。」

刺青の男は手酌をしてクビリと一盃飲み込んだ。

「小林さん、もしドール嬢の行方が分つたらば、今度は早速結婚して下さいませんか。あれ程の美人を野ばなしにして置くと近所迷惑ですよ。ねえ小原さん、さうではありませんか。」

「ほんとだよ。早くさうし給へ。そして又巴里へ行くさ。僕も例の娘と結婚するよ、そして一緒に行く。」

小原君も大分考へさせられた。刺青の男は一人ボカンとして居たが、急に大聲で笑つた。

「いやはや、みなさんはさうしてうれしい話があるが、私は何もありはしないのだ。考へて見れば淋しいものだ。餘り面白をかく暮して来た報が今になつてめぐつて来たのですよ。……が。まアドル嬢さへ幸福ならばそれで満足します。」

刺青の男は心底から淋しい様子になつて来た。

「もうおそくなつた様ですね。お二人ともお歸り下さい。喧嘩をせずに。私はこれから又まぎれる様にのみ廻るんです。追ひ立てる様ですみませんが、どうか私の心も察して下さい。」

刺青の男は手を打つて女中に自動車をも命じた。

「私はまだ五千圓程金を持つてゐるのです。此金を一日も早く使つて了ふのです。そして素寒貧になつて、又日本を飛び出すのです。ドル嬢のおかげで、私の本心が私に歸つて来たやうに思はれて、自分ながら恐しくなつて来たんです。酒ですよ。毎晩酒なんです。あゝ淋しい愉快だあア。」

小林畫伯と小原君は沁々と刺青の男に同情した。自動車が来たので二人は立ち上つた。

「失禮しました。では何分。」

と小林畫伯が云つた。

「形勢の分り次第報告しますよ。」

と小原君が云つた。

刺青の男は大分酔つて「さよなら」と云つたゞけで横に倒れて了つた。二人は心配しながら座敷を出て行つた。

二人が座敷を出て行つたのを知つた時、刺青の男は急に起き上つた。そしてキヨロヨロと室内を見廻したが、思ひ出した様にボロボロと涙を流し出した。いつ迄も泣いて居た。

女中が入つて来た。

「坂上さん、お一人になつたらば誰かお呼になつたらば。」

女中は坂上に近づいた。女中は泣いてる坂上を見出した。

「まア、坂上さん。」

女中は驚いて刺青の男の肩に手をかけた。

「邪魔をするなよ。おれは泣いてるのだ。心から泣いてるのだ。」

さう云ひながら刺青の男はボロボロと涙をこぼし續けて居た。

花の菖蒲

不安と絶望とに追ひかけられて丸の内ホテルに隠れ家をもとめたドール嬢は、狭い室のベッドの上
に身を投げて、やるせなさの涙を流しながら身をもだえて居た。

小林畫伯に逢ひたい。小林畫伯より外にたよる人もない。その小林畫伯にはどうしても打ち明けて
話す事の出来ない内股の刺青、それを抹殺するのをひたすら急いだために、思ひもよらず森ドクトル
から、拭ふべからざる恥辱をうけた。

今となつては到底小林畫伯に合はせる顔もない。一思ひに巴里に歸りたい。そして花の巴里で心を
ごまかして面白をかくしく一生を、たゞれた戀と、捨鉢の出來心の愛で過したい。それにしても歸國の
旅費など手もとにあるべくもない。

ドール嬢はさめくと泣いて居た。ふと窓外を見れば又も雨がシヨボくと降つて居た。時計を見
れば午前七時である。

今日は學習院の授業が八時からある日であつた。どうして此心と此身で教壇に立つ事が出來よう。

ドール嬢はそのまゝベッドの内に入つて懸蒲團を顔迄かけて了つた。

過ぎし日が走馬燈の繪の様に心に浮んで來る。幼けなき日のリヨン生活、巴里での師範學校生活
それについての獨逸の畫家ホフマンとの戀——それは純な心と純な身とを捧けつくした初恋であつた
そしてベルリンで別れる夜のあの焦慮、遂に内もの刺青。その後の巴里、戦時の巴里市中のメリ
カ兵の横暴さ。突然現れて來た日本の畫家小林。——それ等は我身か他人の身かも分らぬ夢物語と思
はれた。

——今日は學校も缺勤して居よう。そして明日も明後日も。どうなつてもいい。このまゝ死んで了
つてもいい。

廢殘の身のドール嬢はいつともなく泣きながら眠つて了つた。かすかに物音がした。ドール嬢
は物に襲はれた夢で目をさましたもう時は正午近かつた。ドール嬢は引きたゝぬ心で化粧をして食堂
に下りて行つた。

食堂には餘り客はなかつた。日本人などは一人も居らなかつた。六十過ぎの英國人らしい夫婦と、
五六人のアメリカ人とが居るだけであつた。日本人の一人も居らぬ事は、ドール嬢には却つてうれし
かつた。

ドール嬢は隅のテーブルに淋しくついて、定食を不味さうに食べて居た。コーヒーをのんで幾分氣

も引きたつて来たのを感じてドール嬢は食堂を出た。すぐに又蔭鬱な室へ歸る氣がしなかつたので、ふと見出したサロンに入つて行つた。

サロンの内には新聞などがテーブルの上のせてあつた。所在なきにドール嬢はテーブルの上から名畫集を手にとつて見出した。先程食堂で見た英國人の老夫婦が入つて来た。そしてドール嬢に向つて軽く挨拶した。ドール嬢はその老夫婦の樂しげな様子を見て、心の底から羨ましくなつて来た。

「あゝして日本の見物に來て居る人もある。自分とても戀人に逢ひに來た日本である。それを今はかうして淋しくたつた一人で心を痛めて居なくてはならない——」

老夫婦は小聲で話して居たが、老夫婦は思ひ出した様にドール嬢に近づいて來た。

「いつから日本においでになりますか。」

上品な老婦はスラ／＼とフランス語で話しかけた。ドール嬢は其言葉をきいて、リヨンに居る母親を思ひ出した。

「半年近くなります。」

「半年？ それでは日本もお分りになつたでせうね。」

「いえ、唯東京を少し知つただけです。」

「見物においでになつたのですか。」

「いえ、戀人を訪ねて。」

「それは楽しい旅行でしたらう。そしてその戀人は。」

「まだ逢はぬのです！」

かう云ふドール嬢の眼には涙が光つて居た。

「どうなさつたのです。あなたの戀人は日本には居られないのですか。」

「日本に居るのです。けれども事情がありまして逢へぬのです。」

「事情とは？」

ドール嬢は此なつかしい老婦にならば何でも話して了ひたかつたそして救ひを求めたく思つた。けれども刺青の事を話さなくては、結句他人には自分の今の境遇が分る筈がないのを思つてしばらく黙つて居た。その時遠く居た老夫婦が老婦に向つて笑ひながら聲をかけた。

「又話し出したね。若いフランスの人を詰問してはいけないよ。」

かう云つても叱る様子は毛頭なかつた。

「この方は日本へ戀人をたづねていらしたのです。それをまだお逢ひにならぬと伺つたので、今同情してあけてるのです。」

老婦はかう云つてドール嬢を我子の如く見た老夫婦は、ニコ／＼と笑ひながらサロンを出て行つた。

老夫の出で行くのを見送つて後老婦は又ドール嬢に云つた。

「お金は十分に持つておいでになりますか。」

「いえ、ありません。學校の先生をしたり個人教授をしたりして生活費だけ得て居るのです。」

ドール嬢の聲は哀れであつた。老婦は眉をひそめながら、ドール嬢の言葉を氣の毒さうにきいて居た。

それは心配でせう。戀人の居所がお分りならば早くお逢ひになるのが一番いいでせう。私達は二三日東京を見物して、それから日光へ行く積りです。室は六番です。遊びにいらつしやい。」

「ありがとうございました。」

老婦は靜かに室を出て行つた。

ドール嬢は涙が出て来て困つたもう室に歸つて、又一人淋しく床の中に入つて了つた方がいい。と思つてふと顔をあけて見ると、サロンの隅に一人のアメリカ人らしい老人が葉巻を啣へて新聞をよんで居た。ドール嬢が此老アメリカ人を見た時、アメリカ人も亦ドール嬢を見た。そしてアメリカ人も似合はず氣持のいい笑顔をして一寸挨拶をした。ドール嬢も挨拶を返した。

「又雨になりましたね。日本の今頃はどうも雨が降ります。今年は少しシーズンがおくれて居るのです。」

アメリカ人はスラ／＼とフランス語で云つた。日本には度々來るらしい人であつた。

「あなたは初めての日本ですか。」

アメリカ人は少しのいや味もなく云つた。ドール嬢は初めて話してもいいと思ふアメリカ人に逢つたと思つた。

「え、今年の春の初めに來ました。」

「さうですか。これからの日本はあまりよくない時です。あなたはまだ永く御滞在ですか。」

ドール嬢はいつともなく此アメリカ人に氣が置けなくなつた。

「どうなりますか分りません。お金さへあれば、早く歸りたく思つて居ます。」

「さうですか。そして巴里へ！」

「え。」

「あなたは日本に用事がありになるのですか。」

「え、大事な用事があつて參つたのですが、もうその用事も果さずに歸らなくてはならぬかと思つて居るのです。」

「それは残念でせう。私は貿易商です。毎年日本へ來ます。今年はこれから佛領印度へ廻らうかと思つて居ます。あなた佛領印度へおいでになつた事がありますか。」

「いえ、參る時にアメリカを廻つて來ましたので。」

「いゝ所ですよ。果物がうまい、毎日夕立がする。熱帯地方としては佛領印度が一番でせう。」

「さうですか。一度は行つて見たく思ひます。」

「行つてごらんなさい。巴里へお歸りの時、フランス船ならば、自然よる事になります。」

「私は歸りたいのですが、歸るお金もないのです。」

「それは心細いでせう。」

「老アメリカ人は時計を出した。その手に大きなダイヤが光つた。」

「約束の時間になりました。又お話しませう。」

彼は出て行つた。ドール嬢も室へ歸つた。室の内は蔭鬱であつた。ドール嬢はベツトの上に腰かけて考へ出した。

あの英人夫婦、そしてあの老アメリカ人。その人達は各日本の生活を享樂して居る。それを自分はたつた一人、日本の生活の苦惱を堪へしので居る。

どうしたらばいいのであらう。歸るにも歸る旅銀がない。又日本にとゞまるとしても、生活費を得

るだけ働く勇氣が今はもうない。何のために來た日本であらう。小林畫伯に一思ひに逢つた方がいゝのか知ら。いや今はもうあの刺青の男にさへ逢つてはならぬ、どうして自分一人小林畫伯に逢ふ機會を見出したらばいいのであらう。」

ドール嬢はしきりに考へて居た。

コツ／＼とドアが叩かれた。ドール嬢はいやく返事をした。ボーイがドアをあけて入つて來た。

「フランス大使館からお電話です。」

「え？」

ドール嬢は自分の耳を疑つた。

「大使館？」

「さうです。」

「居ないと云つて下さい。」

ボーイは妙な顔をしてドール嬢を見たまゝ出て行つた。

——どうして此處に居るのが分つたのであつたらうか。——

ドール嬢は不思議に思つて考へた。

再びドアが叩かれた、仕方なく返事したドール嬢の鼻の尖にボーイ長が立つた。

「こちらから届けましたので電話がかゝつて参つたのです。今朝程フランス人の止宿人を皆届ける様に云つて参りましたので届けました。」

「來なかつた様に届けなほして下さい。」

ドール嬢は叱る様に云つた。

三

ドール嬢は不愉快であつた。今朝森ドクトルの家をコツソリぬけ出して來たばかりであるのに、もう自分の居所が他人に知れて了つたのが、残念でならなかつた。

程なくボーイ長が又入つて來た。

「只今は失禮しました。フランス大使館でなく、アメリカの大使館からでした。」

「アメリカ？」

ドール嬢は目を丸くしてボーイ長を見つめた。

「アメリカの大使館が私に何の用があるのでせうか。」

「それは存じません。」

ドール嬢は尙更電話口に出る氣がしなかつた。

「何處からでも、私は電話口に出るのがいやです。居らぬと云つて斷つて下さい。」

ボーイ長は當惑の顔をした。

「でもおいでになる事を話して了りましたから、一寸お出になつて下さいませんか。」

ドール嬢は不愉快でたまらなかつたが、仕方なく、ボーイ長の後について電話口に出た。

「アロー、ドール嬢です。」

ドール嬢はすゝまぬ聲で云つた。

「あゝドール嬢ですか。私は先程ホテルのサロンでお目にかゝつたアメリカ人です。急に相談したい事がありますが、何時頃迄ホテルにおいでになりますか。」

ドール嬢は意外の言葉をきいてすぐに返事も出来なかつた。

「夕方迄はホテルに居りますが、その後は一寸分りません。」

「さうですか。では一二時間後ホテルへ行きますから逢つて下さいまし。」

電話はきれて了つた。ドール嬢は奇妙なアメリカ人を思ひ起しながら室へ歸つて來た。

どんな用なものであらうか。只ホテルのサロンで初めて逢つただけの人が、自分の名を知つて居るさへ不思議なのに、用事があるとは一層合點が出来なかつた。

考へて居る間に好奇心も起つて來て、ドール嬢はアメリカ人を心待ちに待つ氣になつて來た。

一時間程して室のドアが叩かれた。ドール嬢はアメリカ人が来たと思つて、返事をしてドアを内からあけた。思つた通り先程のアメリカの貿易商が笑ひながら立つて居た。

「失禮ですが、サロンでお話し致しませう。」

アメリカ人は先に立つてサロンをさして行つた。ドール嬢はその後につきながら、アメリカ人の用件を色々想像したが、どうしても分らなかつた。

サロンに入つたアメリカ人は、いかにも世なれた様子でドール嬢に椅子をすゝめた。

「或は失禮にあたる事を申すか知れませんが、あらかじめお許し下さい。私は近く佛領印度へ行くのですが、一人フランス人を雇つて連れて行きたく思つて居たのです。先頃からアメリカの大使館に人選をたのんで置いたのですが今大使館へ行つて見ると、どうも適當の人がないと云ふ事なので、偶然何かの必要で、東京の外國人の泊るホテルの宿泊人を大使館で調べて居ますので、丸の内ホテルの止宿人名簿がありましたので、何の氣なしに見ると、あなたのお名前があつたのです。それで電話をおかけした様な譯ですが、先程あなたから現在の經濟上の事を伺つて居ましたので、若し幸ひに御承諾が願へるならば、私と旅行を共にして戴きたい氣になりましたのです。どうでせう、御承諾下さいませうか。」

ドール嬢は意外の交渉をうけて日本を逃げ出して下さいたい氣もあつたので、承諾してもいいと思つ

た。

「條件によりましては、お供致してもいいと思ひます。」

ドール嬢はしつかり答へた。

「さうですか、それは有難い事です。條件はあなたの御希望の通りでいゝのです。多分八月の末に日本を出る事になります。そして佛領印度での用事は十一月の初めには終るかと思ひます。その後はあなたはフランスへお歸りになつても、或は尙私と一緒にアメリカへ渡つて下さつてもいいのです。」

「どうでせうか。」

ドール嬢はアメリカ人の言葉が自分にも申分ないものであるのを思つた。

「それならば私も希望する所です。」

「さうですか。では旅行の終りに二萬法さしあげませう。それ迄は月々宿料は私が出しまして二千法の割に差しあけます。」

ドール嬢は此條件がうれしかつた。

「ではどうぞお願ひします。」

「さうですか、それで私も安心しました。まア日本出發迄は別に用もありませんから、自由に遊んで居て下さい。そして旅券の方はなるべく早くつくつて置いて戴きませう。では後程契約書をかいて來

ますから、サインをして下さい。これで私も安心しました。」
 大まかなアメリカ人は簡単にきめて了つた。
 「今夜は芝居でも観に行きませういづれ又。」
 アメリカ人はサロンを出て行つた。ドール嬢は行手に夜が明けて来る様にうれしかった。

四

帝劇見物をすませてドール嬢は自動車でアメリカ人と共にホテルに歸つて来た。帝劇では知る人に逢ひはしないかと思つてドール嬢は餘り廊下にも出なかつた。
 「少し廊下を散歩しませんか。」
 「もう一度食堂へ行つて日本の甘いスープを飲みませう。」
 などとアメリカ人は云つたが、ドール嬢は矢張り氣がすまなかつた、ホテルに歸つた時、ドール嬢はやつと安心した。そして當分は外出しない方がいと沁々思つた。

アメリカ人はサロンつきの上等の室に居た。そのサロンでドール嬢はその夜契約書にサインした。署名に子爵と肩書をつけた時、アメリカ人は稍驚いた様であつた。

「貴族でおいでになつて、どうしてたつた一人日本迄おいでになつたのですか。」

ドール嬢は正直に云つた。

「日本人の戀人をたづねて来たのです。それで親にも餘り相談しませんでしたので、お金がなくて随分苦勞をして居ました。」

「戀は盲目の冒険者です。それでその戀人に逢はずにあなたは日本を見捨て行つてもいいのですか。」
 「それしかありません。」

ドール嬢は泣かんばかりに云つた。アメリカ人は、カバンの中から財布を出した。

「とにかく當座のお金として日本貨百圓程あけて置きませう。此ホテルの宿料は私が支拂つて置きませう。」

「有難う存じます。」

ドール嬢は經濟的にめぐまれるのが心からうれしかった。

「私もかうして四十年近く世界を巡り歩いて居ましたが若い頃は何とも思ひませんでしたが、六十になると段々と淋しくなつて来ました。男でも女でも矢張り若い内に家庭を持たなくては嘘です。あなたも今度フランスにお歸りになつたらば、家庭をおもちになるのをおすめします。」

ドール嬢は此言葉をきいて悲しくなつた。家庭を持つならば、小林畫伯とより外には人がないと思

つて居る自分であつた。

アメリカ人は悲しくして居るドール嬢の鼻の尖に突然カバンから寶石箱を出した。

「戀人の代りにこれをあげませう。お部屋へ歸つてからあげてごらん下さい。」

ドール嬢はそれが寶石箱であるのをすぐに知つたが、今日初めて逢つた他國人から、こんな高價のものを貰ふのが氣恥しく思はれてしばらく躊躇して居た。アメリカ人はドール嬢の心中を察したらしく云つた。

「遠慮しなくてもいいのです。私はひとに物を贈るのが道樂なのです。まだいくつも持つて居ますがとにかくお近附きになつた最初の贈物なのです。どうかうけとつて下さい。それが私にはうれしいのです。」

ドール嬢はアメリカ人の言葉に何の危険をも感じなかつたので、快くそれをもらつた。

「有難う存じます。」

「いゝ夢をごらん下さい。もう十二時ですおやすみなさいまし。」

ドール嬢はいそぐと寶石箱をもつて自分の室に歸つて来た。今朝迄の陰鬱さは今はもう全くない明るい室であつた。ベットに腰かけて靜かにドール嬢は寶石箱をあけて見た。

キラ／＼とダイヤモンドが三つ光つた一つは一カラットを越えて居た。ルビーが甘い色をして居た。ヒス

キも碧つかた。エメラルドの親指の尖程のもあつた。

ドール嬢は茫然として寶石に見入つた。今迄あこがれの的であつた寶石が今自分の手の上につて居る。一つ／＼石を掌にのせてチツと目を吸ひつける様にして見た。魂が石の中に解け込んで行つた。

何と云ふ幸福の日が自分にめぐつて来たのであらうか。どの位の價値のものであらうか。と考へたがなかく見當がつかなかつた。巴里の、リュ・ド・リボリーの飾窓によつて寶石を見入つた頃の事が思ひ出される。

ドール嬢は二時間近くも此刺戟を享樂して居た。見つめても見つめてもあきなかつた。昨夜と今夜の自分の境遇の變化を思つても見た。もう何も欲しくなかつた。

ドール嬢はやつと心を靜めて寢間着にきかへてベッドの内に入つた。寶石箱を胸にかたく抱きしめて居た。

なかく眠られなかつた。日本に来て以來の事がしきりに思ひ出された。喜びの底に居ながらドール嬢はふと小林畫伯を思ひ出したとして此寶石と小林畫伯とを自分は交換して、あこがれの櫻咲く國に別離を告げなくてはならぬのだらうか。かう思ふとさすがに悲しかつた。逢ひたくてあらゆる苦惱に堪へしので覺悟で來た櫻咲く國に、戀人に逢ふ氣になれば逢へるのに、自分が持つ一つの秘密の大

めに——そしてその秘密を抹殺したい一心の油断につけ込んだ悪魔からうけた拭ふべからざる恥辱のために——逢はずに去る自分が今夜は思ひも儲けぬ寶石に恵まれて居るのである。

五

浅いながら長い眠からドール嬢がさめた時は、もう夏の日が高かつた。ベッドから出て室の隅にとりつけられた洗面器によつて朝の化粧をしながら、鏡の中の自分を見れば、何と云ふ瘦せやうであらう。只一日の焦慮は頬の肉をゲツソリと落して、眼のふちは黒ずんで居る。

ドール嬢は一時間近くも一心になつて化粧をして居た。今迄は學校の先生をやつて居たので、お化粧も薄くして居た。それでも大抵の女には負けぬ美しさであつた。今日は思ひきつて巴りに居た頃の様なケバ／＼したお化粧をした。

パンの一片と紅茶一杯に朝飯をすませて後、ドール嬢は室を出て大サロンに出て來た。昨日の英國の老夫婦が今朝も睦／＼話して居た。

「お早うございます。」

ドール嬢は靜かに挨拶して入つた。老婦はドール嬢を認めてにこやかに笑ひかけた。

「お早うございます。今月はお天気になりましたから暑くなるでせう。私達はこれから日光へ行かう

と思つて居ます。どうですかあなたもおいでになりませんか。」

ドール嬢は此夫婦の心配のない生活がうらやましくなつた。

「えい、参りたく存じますが、お金がありませんから。」

ドール嬢は昨夜アメリカ人から貰つたお金のあるのを忘れはしなかつたが、日本著以來金の苦勞をなめた後であつたので、その金も費して了ふのが心配であつた。

「學校はもう休みになつたのでせう。」

老婦がきいた。

「まだ今月一杯は授業をしなくてはならないのですが、もう學校へも行く氣がなくなつて了ひました。」

ドール嬢は本當にもう學校へ行く氣がしなかつた。このまゝアメリカ人の祕書役になつて巴里迄歸るのがうれしく思はれた。

「ドール嬢、お早う。」

元氣よく聲をかけたものがあつた。驚いて三人は聲の主を見た。それはアメリカの老貿易商であつた。

「お早うございます。」

ドール嬢は立つて挨拶した。

「お、今朝は本當の巴里ッ子ですね。」

「見違へる様に美しくなつたドール嬢を見てアメリカ人は笑ひかけた。アメリカ人が餘りなれなくしくドール嬢に話しかけるので、英人夫婦はあまりいゝ氣持がしなかつたと見えて黙つて了つた。

「今日午後七時から音楽をきゝに行きませう。それ迄私は外出して來ます。」

「どうぞ。」

アメリカ人は出て行つて了つた。その後姿を見送つて英國の老婦が云つた。

「あのアメリカ人は前からのお知り合なのですか。」

「いゝえ、昨日初めて知り合つた人です。私はあの方に雇はれました。そして八月になると佛領印度へ旅行するのです。」

英人夫婦は不思議さうにドール嬢の言葉をきいて居た。老婦が云つた。

「どう云ふ身分の方ですか。」

「何でも貿易商だときゝました。世界中を三四年も歩いて居るのださうです。」

「さうですか。此ホテルのお客は皆あの人を問題にして居るのです。誰ともめつたと話した事がないらしいのです。あなたはもう契約をなさつたのですか。」

「え、昨夜サインしました。」

「さうですか。」

老夫婦は不安らしく顔を見合せた。老夫婦が初めて口を開いた。

「ドールさん、餘計な事を云つて失禮ですが、十分に注意なさる方がいゝでせう。あの人の身分もよくさぐらないといけませんよ。」

ドール嬢は此言葉で、自分が悲しみのあまり、不注意に間違ひをして居るのではないかと考へて見た。云はれて見れば不思議な老アメリカ人でない事もない。初めて雇はれたばかりであるのに、高價の寶石を惜氣もなく呉れた。油斷をしてはならないと思つた。

他國へ出て居る人は、全然安心の出来る人と、全然安心の出来る人と二通りです。アメリカ人らしくない、氣のいゝ人の様には思はれますけれども、若いそして美しいあなたなどは氣をつけないといけませんよ。私なども此お婆あさんを連れて居なければ、あなたを旅行中だけでも雇ひたくありませんからね。」

老夫婦は老婦を見て笑つた。

「有難う存じます。十分氣をつけます。」

ドール嬢はかう答へながら、折角昨夜から自分を見舞つた幸福がもう今朝になつて一抹の不安に襲

はれた事が残念であつた。

「私一寸用事がありますから。」

ドール嬢はサロンを出て、自分の室に歸つて来た。所在なさに昨日の寶石箱を出して見た、寶石は新にドール嬢の心を浮立たせてくれた。幸福の結晶の様に寶石はそれぞれの光を湛へてドール嬢の目に映つた。

六

夕暮になつてアメリカ人は歸つて来た。そしてドール嬢を室に呼んだ。

ドール嬢は空恐しい氣がしてきものなどキッチンとして行つて見た。

「さア、お約束のコンサートに行きませう。」

アメリカ人は氣輕に云つた。

「私、ソアレの服を持つて居ませんので……」

ドール嬢はきものゝためのみならず、人の出さかる席に行くのを恐れたのであつた。

「きものなどは何でもいでせう日本など……特に夏は服装などどうだつていいのです。」

「でも相當のきものをきて行かなくては笑はれます。それに私當分は他人様に逢ひたくありません。」

「さうならばやむを得ません。ソアレの服はお持ちにならぬのですか。」

「持つては居ますが、一昨日迄宿をかりて居ました處に置いて來て了つたのです。」

「取りにおいでになればいいでせう。」

「それが出来ません。」

「どうして。」

「一寸譯がありました。」

「譯とは？」

ドール嬢は返事に窮した。

「どう云ふ家なのです宿屋ですか。」

「いえ、日本の醫者の家です。」

「醫者の家？ どうも分りませんな契約もすんで居るのですから、一通り何事もお話し願ひたく存じます。」

ドール嬢は皆話して了ふ方がいいと思つた。

「そのお醫者は夫妻して巴里に行つて居た事がありました。其頃知り合になつた人なのです。それで其方の家に居る様になつたのです。一昨日の夜は一寸した手術をそのお醫者にたのみました。そして治

療室にドクトルと私と二人きりで居ました。私は注射をうけて昏睡して居ました。其間に……」
 ドール嬢はズツとして言葉をきつた。恐しい記憶がよみがへつて来た。
 「どうしたのです。」
 アメリカ人は叱る様に問ひ返した。
 「どうかその事は私の口から云はせないで下さい。」
 ドール嬢は顔を伏せて了つた。
 「ふん、大體は想像がつく。とにかく怪しからぬ事です。どうです訴へてやつたらば。……」
 さう云はれてドール嬢は森ドクトルの仕打ちが悪くてならなかつた。
 「怪しからぬ事です。一體日本人の内には實にけしからぬ奴が居るのです。日本と云ふ國は婦人を全く奴隷視して居る國です。妻を奴隷の如く取扱つて居るのです。そして妻も亦それに甘んじて居るのです。だから日本の男は婦人を尊敬する事を全く知らぬのです。それは同國人同志ならばまアいゝ然るに外國の婦人に對して迄も、さう云ふ無禮を働らくのは許す事が出来ない。いゝ機會です。一つ訴へてやるがよいです。けしからぬ奴だ。然も醫者でその技術を悪用するのはますます／＼けしからん。十分に懲らしてやるがよいのですドール嬢！ 勇氣を出さなくてははいけません。費用は私が出してあげます。……」

老アメリカ人は我事の様に立腹した。ドール嬢もアメリカ人の言葉に憤怒の情がわき立つて来た。
 「私も腹が立ちます。懲らしてやりたくは思ひます。たゞ不幸にも私は貴族です。此事が社會に知れる様になれば、私の家系にも傷がつくのです。ですから私は堪へしのぶしかないので。」
 「それもさうです。もし公式に訴へるのがおいやならば、私が直接その醫者に交渉して見ませう。そして彼の面目をつぶしてやりますどうです、其程度ならばいゝでせう。」
 ドール嬢はまだ返事をしなかつた。
 「ドール嬢！ 悪人は必ず懲らして置かなくてはならぬものです。それを黙許する時は、一層恐るべき悪徳を敢てするでせう。とにかく私に託して下さい。あなたより私の方が腹が立つのです。フランスの大使館から交渉すれば一番いゝのでせうが、それではあなたがお困りになるかと思ふ。決して他には洩らさぬ様にませう。私にまかせて下さい。」
 ドール嬢も此アメリカ人の言葉を有難く思つた。
 「どうかお願ひします。」
 「承知しました。痛快にやつ／＼けてやりませう。其醫者の名と住所を。」
 ドール嬢はふるふる指先でアメリカ人の差し出す手帳に森ドクトルの住所と名をかき込んだ。
 「とにかく一週内に何とか解決します。そしてあなたの荷物をとつて來ませう。」

「どうぞお願ひ致します。」
ドール嬢は全く心配がないではなかつたが、森ドクトル悪さのために、とにかく事件を老アメリカ人に依頼して了つた。

七

ドール嬢を雇つた老アメリカ人は、ドール嬢がうけた耻辱に憤慨して、森ドクトルを面責するため、夏の日の朝早く診察にかこつけて森ドクトルの玄關に表れた。
診察室に呼び入れられた時、アメリカ人は森ドクトルが意外にも温厚篤實らしい風采の醫者であるのを見た。

「どうなさいましたか。」

森ドクトルは日本語で書いた。アメリカ人は全く日本語を理解せぬので、英語で話しかけた。

「ワツセルマン反應を検査していたゞきたく思ひます。」

森ドクトルは英語よりもフランス語の方が樂であつた。日本に來る外國人でフランス語を話さぬものは、下等な人間であると云ふ考へをもつて居る森ドクトルは、わざとフランス語で答へた。

「承知しました。何かそれらしい症状があるのですか。」

「いえ、けれども又旅行をしますので一應検査を願ひたく存じます。」

アメリカ人はすらくとフランス語で答へた。森ドクトルは患者がフランス語を話すので大變喜んだ。

「どうして私の住所をお知りになつたのですか。」

森ドクトルは開業以來初めての外國人の患者に興味をもつてきた。アメリカ人はその時いかにも落ついた聲で答へた。

「ドール嬢……子爵令嬢にあなたの事をききました。」

此言葉に森ドクトルは相當に驚く理由があつた。たつた今迄刺青の男とドール嬢の行方について話して居た所であつた。

「ドール嬢に？　そしていつですか。」

「昨夜です。」

「昨夜？　そしてドール嬢は今どこに住んで居られますか？」

「それはお話す事でないと私は思ひます。」

アメリカ人の態度がガラリと變つた。ドクトルは稍不安めく表情をしてアメリカ人を見つめたまゝ、口をひらかなかつた。

「昨夜、ドール嬢から皆ききました。それで私はあなたを面責するために来たのです。勿論誰の依頼をうけたのでもない。私一個の考へです。あなたはドール嬢に對して謝罪する義務のあるのをお認めになりますか。」

アメリカ人の語調には力があつた。ドクトルはアメリカ人の言葉を到底理解する事が出来なかつた。

「何をあなたは云はるゝのか、私には全く理解出来ません。私はドール嬢に謝罪すべき何事をもして居ない事を断言します。」

「何事も私は知つて居るのです。ドール嬢の如く私もあなたに對しては憤慨して居るのです。人間として誰もがそれである通りに。」

アメリカ人の言葉は自信があつた。森ドクトルはますます分らなかつた。

「一體あなたはドール嬢とどう云ふ關係のある方なのです。」

「人間である點に於て……。」

アメリカ人は痛快さうに云つた。

「一體私がドール嬢に對して何をしたらと云ふのですか。それを先づ話して戴きたい。」
森ドクトルも憤慨せざるを得なかつた。

「私はそれを口にするのさへ不愉快だ。あなた自身が最も詳細にそれを知つて居るのです。」

「一向分らん。あなたは患者として私を訪問したのではないのですか。」

「患者ではない。あなたを面責するために来た正義の士である。」

「正義？ ふん、あなたの身分を云つて下さい。」

「云ひます。私はコエンスキーと云ふ露西亞系のアメリカ人だ。貿易商として日本へも十何回は來て居る。日本の紳士、特に上流の紳士が無作法且無節操である事を常に憤慨して居る者だ。そして今度最も悪むべき行爲をもつて、フランスの貴族に辱かじめを與へた日本の所謂紳士……然も職務上の知識を利用して悪徳をはたらく紳士……を確實に見出したのだ。人間として、一人の人間として私は憤慨に堪へないのだ。私が一人居る事は所謂日本の紳士にとつて如何に恐ろしいかを、今あなたは感じつつあるであらう。」

アメリカ人は儼然として云ひ放つた。森ドクトルは意外な暴言に對して心底から立腹した。

「言葉をおつしみなさい。あなたはそれでも紳士であり得るのですか。」

「それはあなたが私から云はれるべき言葉です。」

「もうお歸りなさい。」

森ドクトルはアメリカ人をにらみつけた。

「歸れと云はなくとも、歸るべき時が來れば歸る。あなたはドール嬢に謝罪する積りですか。それを今答へて下さい。」

「その必要もなく又理由もない。私はあなたと續けて話す時を持ちません。」
森ドクトルは憤慨の極室を出て了つた。

八

老アメリカ人が歸つた後、ドクトルは自分の室にとち籠つて、かたくドアをしめて考へて居た。

——たとへ彼女が祕密を極力依頼したとは云へ、唯自分一人しか治療室に居らなかつたのは、終生の失敗であつた。その失敗はあらゆる方法を講じても取返しつかぬ程度である——

ドクトルはしきりに後悔した。たゞ自分の人格を信頼する他人によつて自分の行動を證明して貰ふより外に方法はない。かう思つて自分の人格の保證人を心の中で求めて居た時に、又彼は冷ツとした。

——立派な事は云へない。あの時の自分の内心は？——

ドクトルは両手で頭をかへへて机に顔を伏せて了つた。

コツ、コツ、ドアが打たれた。ドクトルは不愉快氣に「おはひり」と云つた。ドアがあいて思ひ

がけなくも、刺青の男が入つて來た。

「お早う、ドクトル。」

ドクトルはやむなく答へた。

「お早う。」

「ドクトル、顔色が悪い。」

刺青の男は卒直に云つた。ドクトルは心の中で考へた。此刺青の男こそ今の自分にとつては、最も都合のいい存在である。

「坂上さん。實はあなたを今私は待つて居たのです。」

「私を？ それはメルシ・ムツシユウ・ドクトル。」

「實は今馬鹿を見た所です。」

「あゝ、今外國人が來た様ですね。金でも支拂はずに逃げたのですか。」

「そんな事ならいいのですが、意外にもドール嬢に關係のある事なのです。」

「ドール嬢に？」

「えゝ、私がドール嬢を凌辱したと云つて私を責めに來たのです。」

「……………」

「實は私も不注意でした。ドール嬢が刺青を除去してくれと云ふので、それを初めやうとしたのですが、意識のあるまゝでは、どうしてもいやだと云ふので、麻酔劑の注射をしたのです。その時私一人しか治療室に居なかつたので、辯明が出来ないのです！」

ドクトルはかう云ひながら、再び頭を両手でかゝへてしまつた。

「ドクトル、神はすべてを知つて居ます。なした行動と同時に、なさぬ行動も。そして内心だけにとどまつた行動迄も……」

刺青の男の言葉の末句は、ドクトルの心を眞向から射通した。ドクトルは背筋に汗の沁み出すのを感じた。

「まアそんな事は問題でない。その他國人が登場して来た事は、我等には誠に都合のいゝ事だ。私はすぐにあの他國人を追ひかけなくてはなりません。丸の内ホテルの自動車だつたのを、偶然見たのは神が我々に味方して居ると云ふものです。」

刺青の男は云ふだけ云つて、ドクトルの家を飛び出して、タキシードに打ち乗つて、丸の内ホテルの玄関に現れた。

「俺はかう云ふものだ。たつた今歸つて来た外國人の國籍と姓名を知りたい。」

刺青の男は、いつ手に入れたのか、警視廳外人課刑事の名刺を出した。

受付の男は、名刺と刺青の男との顔を等分に見て居たが、一寸帳簿をくつた後、明瞭に答へた。

「只今お歸りになつたのは、アメリカ人のコエンスキーさん一人です。」

「此ホテルの自動車でか。」

「さうです。」

「よし！」

刺青の男は手帳にかきつけて、すぐに玄関を離れた。

九

丸の内ホテルを出た刺青の男は、小原君の家に向つて自動車を走らせた。自動車の内で彼は今知つたアメリカ人の名を云つて見た。

「コエンスキー。」

いつかきいた名である。かすかながら記憶に残る名であつた。彼は世界を流浪して居た頃逢つた人々を後々と思ひ出して見た。名の思ひ出せぬ人々がかなり多かつた。名は思ひ出せなくても、その人と自分との交渉や、その人の行動やは深く印象に残つて居た。——コエンスキー——。彼は又口の中でくり返して見た。どうも確に記憶に残る名であつた。一體果してアメリカ人であつたらう

か
刺青の男の頭の中を、コエンスキーがかけめぐつてまだまとまりのつかぬ内に自動車は小原君の玄關に到着した。
應接間に通つて待つ間もなく、小原君は小林畫伯と一緒に出て來た。刺青の男はいつになく狼狽して云つた。

「一大事が起りましたよ。」

かう云つて刺青の男は自己暗示をうけて身をふるはせた。

「どうしたのです！」

と小原君が云つた。

「ドール嬢が自殺しましたかー」

と小林畫伯が蒼くなつた。

「いや、さうではないのです。誘惑されちやつたのです。」

「え、誰に。」

小林畫伯が刺青の男に近づいた。刺青の男は此時やつと落著いて來た。

「まアお靜かに。幸ひ居所は分つたのです。丸ノ内ホテルです。」

「丸ノ内ホテル。……」

小林畫伯はすぐにも丸ノ内ホテルへ出向く様子をした。

「まア落著いて下さい。事件はなかなか複雑して居るのです。それで私には策がきまつて居るので、小原さん、あなたは丸ノ内ホテルを警戒して居て下さい。小林さんはしばらく落著いて形勢を見て居て下さい。私は私でする事があるのです。」

刺青の男は確信のある調子で云つた。小原君は刺青の男の報告に好奇心を起した。

「一體どう云ふ事なのです。」

「それがまだしつかりは分らないのです。妙な事があるものです。今朝突然コエンスキーと云ふアメリカ人が、森ドクトルを訪ねて來たのです。そして森ドクトルがドール嬢に恥かしめを與へたと云つて恐喝に來たのです。それでみんな分つたのです。私は早速そのアメリカ人が後をつけて行つて、ドール嬢の住所をつきとめて來たのです。ところがどうもそのアメリカ人が私には怪しく思はれるのです。たしかにドール嬢はそのアメリカ人に誘惑されたらしいのです。相當なした、かものだと私には思はれるのです。私はこれからそのアメリカ人の素性を洗ひ出さうと思つて居るのです。がドール嬢を見失つてはならぬと思ひますから、小原さんはそれを氣をつけて下さい。一週間もすれば大體事情は判明するだらうと思ひます。」

小林さん、あなたは明日森ドクトルを訪ねて居て下さい。そのアメリカ人が明日又森ドクトルを訪ねて行く筈なのです。森ドクトル一人では危際がないではないかと心配です。」

「さうしやう。」

と小原君が云つた。

「承知しました。」

と小林畫伯が云つた。三人はしばらく緊張しきつた心で顔を見合せて居た。

刺青の男がしばらく考へた後云つた。

「とにかくドール嬢は今危険に陥りかけて居るんです。だから或は事を構へて、ドール嬢をホテルから盗み出さなくてはならぬ事となるかも知れません。みんな勇氣をもつて居なくては仕事は失敗にならぬとも限りません。そして或はドール嬢を日本に置いてはいけなくなるかも知れません。小林さんとドール嬢とを日本から逃がさなくてはならなくなるものとして、何とか至急金を造つて置かなくてはなりません。どうでせう。小原さん、何とかありませんまいか。」

「大體に金の出所はあるのです。だがまだ決定的にはなつて居ないので。それも急ぐ様に話しませう。」

「さう願ひますよ。私も心配はして見ます。小林さんはいつ何時でも日本を逃げる心で用意して居て

下されは、それでいゝのです。」

小林畫伯は刺青の男の友情を思つて涙が出て来た。

「感謝します。何分お願ひします。あなた方に心配をかけてすまない。」

刺青の男は叱る様に小林畫伯に云つた。

「すむすまないもない。大それた私に思つて居るのです。愛するドール嬢の幸福のためなんだから、私はもう夢中なんだ。」

かう云つて刺青の男は、淋しく笑つた。

10

森ドクトルの應接室に小林畫伯は呆然として時の移るのを待つて居た。

「やつて来ましたよ。」

森ドクトルが笑ひながら入つて来た。

「どうしませう、席をはづしませうか。」

「いえ、こゝにいらして下さい。」

森ドクトルは事件が事件であるから、小林畫伯に疑惑を抱かれるのを恐れて、わざと同席するのを

すゝめたのであつた。

看護婦の案内でアメリカ人が室に入つて來た。森ドクトルは落著いて握手した。

「昨日は失禮しました。」

アメリカ人は不愉快氣に握手を返した。そして小林畫伯を氣にかけて盗み見た森ドクトルは氣輕く云つた。

「私の親友の小林さんです。」

小林はアメリカ人と握手した。

「私は小林です。」

三人は椅子に腰を下した森ドクトルが云つた。

「小林さんは私の親友として今日の會合に立會を希望されたのです。どうぞ御遠慮なく。」

一時不安氣に見えたアメリカ人は落著いて來た。

「森ドクトルは昨日の返事をきくに來ました。かくさずに云つて下さい。」

森ドクトルは皮肉な笑を湛へて答へた。

「昨日の通りです。私は何等やましい所がありません。」

「まだあなたは後悔しないのですか。」

「後悔する理由がありません。」

「……ではやむを居ない。私はあく迄もあなたを面責しなくてはならない。ドール嬢の云ふ所によれば、治療と云ふのはホンの一寸した事ださうではありませんか。それに麻睡劑の注射をする必要がどうしてあつたのです！」

此問に對して森ドクトルは辯明しなくてはならなくなつた。が此辯明を他人の得心する様にする事は出来る筈がなかつた。特に小林畫伯の前では尙更云ふ事の出來ぬ事が多かつた。やむなく森ドクトルは答へた。

「その理由は私の口から云ふ権利がありません。」

「権利がない？ あなたが云はなくて誰が云ひますか？」

「ドール嬢が居ます。」

森ドクトルは力をこめて云つた。

「ごまかしを云つてはいけません。ドール嬢に私は今朝もきいて見たのです。……何故に麻睡劑を用ゐたのかと。……ドール嬢は答へなかつた、そして森ドクトルが知つて居ると云つたのです。」

「勿論私も知つて居ます。」

「それならば話して下さい。」

「話(はな)せません！」

「さうでせう。話(はな)す事(こと)が出来(でき)ないのでせう。あなたは不(ふ)必要(ひつよう)な麻(ま)睡(すい)劑(ざい)を用(もち)るたのです。そして昏(こん)睡(すい)に陥(おち)つて居(ゐ)る婦(ふ)人(じん)を犯(をが)したのです！」

「うそです。そんな事(こと)は絶(ぜつ)對(たい)にない。」

「それならば麻(ま)睡(すい)劑(ざい)を用(もち)るた理(り)由(ゆう)を云(い)つて下(くだ)さい。」

「理(り)由(ゆう)は云(い)へないが、麻(ま)睡(すい)劑(ざい)の注(ちゅう)射(しゃ)をしたのはドール嬢(ぢやう)が希(き)望(ぼう)したからです。」

「それはうそだ。ドール嬢(ぢやう)はさうは云(い)つて居(ゐ)ない。」

「それには理(り)由(ゆう)があるのです。」

「どんな理(り)由(ゆう)です。」

「それも云(い)へません。」

「理(り)由(ゆう)があるとなあなたは先(さき)刻(こく)から云(い)つて居(ゐ)る。内(ない)容(よう)を話(はな)さないならば、理(り)由(ゆう)と云(い)ふ言(こと)葉(は)は云(い)つても云(い)はなくても同(どう)様(やう)ではありませんか。」

「或(ある)はさうかも知(し)れない。その點(てん)は遺(い)憾(かん)ながらやむを得(え)ないです。だが唯(ただ)これだけは云(い)つて置(お)きま(す)。醫(い)師(し)が職(しやく)務(む)上(じやう)知(ち)り得(え)た秘(ひ)密(みつ)を口(こう)外(がい)する事(こと)は、法(はふ)律(りつ)の力(ちから)をもつて禁(きん)じられて居(ゐ)ると云(い)ふ事(こと)を……」

「それは患者(くわんじや)に損(そん)害(がい)損(そん)失(しつ)を與(あた)へた場(ば)合(あひ)だけでせう。」

「勿(もちろん)論(ろん)さうです。」

「それならばドール嬢(ぢやう)は決(けつ)してあなたを此(この)件(けん)で訴(うた)へぬと云(い)つて居(ゐ)るのであるから、何(なん)の心(しん)配(はい)もなく話(はな)したらばどうです。」

「話(はな)せません。絶(ぜつ)對(たい)に話(はな)せません。」

森(もり)ドクトルは力(ちから)強(つよ)く云(い)ひ張(は)つた。

「それならばそれでいゝ事(こと)にします。では次(つぎ)に伺(うかが)ふが、あなたは昏(こん)睡(すい)狀(じやう)態(たい)にあるドール嬢(ぢやう)に對(たい)しどう云(い)ふ行(かう)動(どう)をしましたか。」

「何(なに)もしない。」

「治療(ちりやう)はしたのですか。」

「しません。」

「しない？ 治療(ちりやう)はしない。そして唯(ただ)婦(ふ)人(じん)の尊(そん)嚴(げん)を犯(をが)したゞけなのですな。」

「やめて下(くだ)さい。そんな事(こと)は絶(ぜつ)對(たい)にないと云(い)つて居(ゐ)るではありませんか。」

「その證(しょう)據(こ)は？」

「證(しょう)據(こ)？」

森(もり)ドクトルはグツとつまつて了(しま)つた。

「證據？」

と云ひつまつた森ドクトルは冷汗が背にビツンヨリ出て居るのを感じた。

「證人がありますか。あなたがドール嬢を犯さぬと云ふ證人がありますか。」

アメリカ人は勝ちほこつて問ひつめて來た。森ドクトルは絶對絶命であつた。

「證據も證人もない。」

「ではどう云ふ方法でか、あなたは辯明して下さい。ドール嬢の名譽のために。」

森ドクトルは頭を垂れた。——油斷であつた。油斷をし過ぎた。ドール嬢が秘密の暴露するのを餘

りに恐れるので、誰をも治療室に入れなかつたのが油斷であつた。

「私の不注意でした。實際治療室にはドール嬢と私しか居なかつたのです。たゞ私の人格を信頼して

戴くしかないので。そしてドール嬢の名譽のために。」

「勿論私とてもあなたの人格を信頼したいのです。がドール嬢自身今はあなたの恥づべき行爲を肯定

して居るのです。ですから事は既にまづくなりきつて居るのです。やむを得ない。あなたはドール嬢

に謝罪しなくてはならないのです。」

「謝罪はしません。」

「謝罪しない？ まだあなたはごまかすのですか。」

「ごまかすのではない謝罪すべき理由がないのです。」

「あゝ、私は實に遺憾に堪へない、やむを得ない。國際的問題にするしかない。」

アメリカ人は椅子を立ち上つたその時今迄黙つて居た小林畫伯が口をひらいた。

「一寸待つて下さい。私は今初めて事を知つたのです。ドール嬢の名譽は實は私の名譽です。私とド

ール嬢とは相思の仲です。私が解決します。待つて下さい。」

小林畫伯は興奮して云つた。アメリカ人が椅子に再び腰を下した。

「あゝ、あなたが小林畫伯ですかそれはいい所でお目にかゝりました。ドール嬢は私にあなたの事を

話しました。そして泣きながら云ひました。相思の人にも逢はずに日本を去らなくてはならぬと……。」

「え？ 日本を立つ？ いつ立つのです。」

「それはまだ決定して居ません。私はドール嬢を祕書役に雇つたのです。私が出發する時にドール嬢

は一緒に出發する筈です。まだ一二箇月は居るでせう。」

「さうですか。とにかく今の事件は私に委せて下さい、私こそ最も重大な關係のあるものです。」

「さうです。私は唯一人の婦人の名譽のために心配して居るのです。あなたは愛人のためです。しば

らくお委せしませう。では……」

「アメリカ人は静かに椅子を立つた。そして室を出ながらドクトルに云つた。『ドクトル、あなたの親友があなたを審判するでせう。私は結果を待ちます。』」

「アメリカ人は室を出て行つた。小林畫伯は玄關迄送つて出た。」

「あなたの愛人の名譽のために、あなたは一人の親友を失ふでせう。それを悲しみます。アメリカ人は出て行つた。」

小林畫伯は重い足どりで應接間に歸つて來た。應接間には頭を重く垂れて森ドクトルが居た。小林畫伯は静かに椅子によつた。そしてドクトルを見た。

「森さん。」

ドクトルは黙つて居た。

「森さん。私とあなたと二人きりです。私はあなたを信じて居るのです。話しませう。」

ドクトルはやつと顔をあげた。

「申譯ないです。私は油斷をしました。治療室に二人だけで居たと云ふ事は終生の失敗でした。どうか私を信じて下さい。」

「私はあなたを信じて居ます。唯さつき伺つた内、麻睡劑の件は私にも分らないのです。どうして麻

睡劑の必要があつたのですか。」

森ドクトルは小林畫伯に對しては一層話す事が出来なかつた。小林畫伯はしばらく答を待つたが、森ドクトルが返事をせぬので、やむなく又たづねた。

「森さん。ドール嬢はどう云ふ治療をあなたにたのんだのですか。」

ドクトルは一層黙つて了つた。

「森さん。どうか話して下さい。」

ドクトルはしばらくして重い句調で云つた。

「小林さん。どうか私をせめないで下さい。私は何も云へないのです。ドール嬢からあなたはきいて下さい。その時期の一日も早いのを私は神にいのるしかありません。」

小林畫伯は全く疑心暗鬼に捕はれて了つた。しばらくは沈痛な顔をして居た。

「……ドール嬢は私に逢はずに日本を立つてせう、そして私の心は永世晴ない。」

小林畫伯は絶望の言葉を洩らした。森ドクトルは唇をかみしめたまゝであつた。

小林畫伯は絶望の極いつともなく森ドクトルの家を出た。そして夜に入つて酒に酔つて小原君の家

あいつは怪しから奴だな。」

「どうして。」

「どうしても糞もあるものか。あいつドール嬢を治療するとか、云つて、麻酔劑を注射して、ドール嬢を凌辱しやがったのだ。ふとい奴だ。」

「何？ 凌辱？」

「うん、残念千萬だが事實なのだ。」

「そんな事ないだらう。」

「ある。」

「あるものか、それは君の思ひ違ひだらう。」

「さうでないのだ。今日アメリカ人が森をたづねて来て、散々面責したのだ。所があいつ一言も辯明が出来ないのだ。……おれはもう絶望だ。」

小林畫伯は頭を両手でかへて椅子に埋まつた。

小林。君それはほんとうなのか。」

「残念ながら本當なのだ。どうしてくれやうか。」

小原君はしばらく考へて居た。小林畫伯はうなりながら身もだえした。

に歸つて来た。それ迄東京市中を何處をどう廻り歩いたのか記憶しなかつた。

「おい、小原、歸つて来たぞ。」

酒の元氣で小林畫伯は小原君の書齋にとび込んだ。

「歸つたのか。大分上機嫌だな。」

「嘘つけ、やけ飲みなんだ。」

「どうして、ドール嬢の行方が分つたので祝酒なのだらう。」

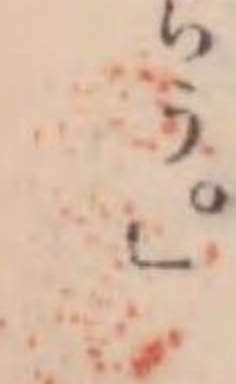
「ほんとにやけ酒だよ。」

「そんな事はどうでもよい。俺は今日すつかりドール嬢の事を探偵して来てやつたぞ。室にひつ込んだきりらしいのだ。そしてアメリカの爺さんが娘の様に可愛がつてゐるらしいのだ。危険ではあるがまだ大丈夫だ。だが祝酒なんかくらくらつてる時ぢやないぜ。早く盗み出して駈落しなくちや駄目だ。俺は今日又例の男爵家へ行つて談判して来た。君は幸福だな、周圍でみんな心配してやるのだから。」

「おい。勝手に自分ばかりしやべるのはやめろ。おれはもう絶望なのだ。ドール嬢は俺にはもう一生逢はないだらう。そして日本を逃げて行くんだ。」

「おい。そんな氣の弱い事を云ふな。大丈夫だよ俺がついてるぞ。」

「お前なんか何の役に立つものかとかにかくもう駄目なのだ。お前森つて云ふ醫者を知つてるだらう。」



「小林。たしかなのか、それは。」

「たしかだ。おれは森と云ふ奴をぶんなぐるのだ。あんな奴が醫者をして居やがると思ふと癩に障つてたまらない。もうどうなつたつていゝ。あの野郎の面の皮をひんむいてやるのだ。色魔醫者奴！」

「さうか、或はさうだらう。初めから俺はあやしい奴と思つて居たのだ。今だから話すが、そもくドール嬢があゝの醫者の家へ行つた頃からあやしいのだ。それ迄居た家に何の斷りもなく突然ドール嬢は森の處へ身をかくしたのだ。それについては俺ばかりぢやない。誰でも憤慨して居る。初めからドール嬢を手に入れる積りで森は仕組んで居たに相違ない。いまくしい奴だな。」

「おい、小原。どうしてくれやうか。」

「なぐりつけてやるのさ。」

「ほんとにやつつけやうか。」

二人は拳をかためて顔を見合せた。

「おい、小原。貴様これから出かけやうぢやないか。そして貴様から森に電話をかけろ、あいつを引つぱり出してぶんなぐらう。」

「うん、よからう。とにかくやるだけやつておかないと内攻していけない。出かけやう。」

二人は立ち上つた。

「痛快にやらうぜ。」

「うん。だが出来るなら、あいつのいつも行く待合か何かでやつけた方がきゝめがあるぜ。」

「それがいい。」

「では俺は電話をかけて来るぞ。」

小原君は電話に出た。小林畫伯は酔眼朦朧としてコクリくと居眠つて居る。

室に歸つて来た小原君は居眠をして居る小林畫伯の肩をついた。

「おい。居眠なんかして居る時ぢやないぞ。」

「うん？」

小林畫伯はキョトンとして眼をさました。

「今電話をかけたよ。至急お話ししたい事があると云つたら、向ふも心配と見えてすぐに承知したよ。奴の行きつけの待合をきいて置いたよ。赤坂の竹のやと云ふのださうだ。どうせ藪だから竹のや位のものたらう。さア行かうぜ。」

小原君は小林畫伯をひつぱり起して、家を出て往來で小原君は圓タクを呼びとめて、酔つて居る小林畫伯をかへ込む様にのせた。

「おい、しつかりしてろ、戦ひに行くのだぞ。」

「あゝ戦ひになれば大丈夫目はさめるよ。」
と云ひながら小林畫伯は又コクリコクリと眠り出した。

一三

森ドクトルから電話がかけてあつたので、竹の家ではすぐに小原君達を座敷に通した。

「森さんはまだが。」

女中に小原君はきいた。

「えい、もうすぐにお見えになりませう。どなたかお名指は？」

「そんな人はないよ。森さんの仲のいゝ人を呼ぶさ。とにかくお酒を大急ぎでたのみますよ。」

小林畫伯はもう眠くなかつた。

「おい、しつかりやるんだぞ。」

「やらうぜ。」

「來たらすぐにやらうか。」

「その方がいゝぜ。氣がぬけるといけない。」

「腹を今から立て、居なくちやならないぞ。」

「大丈夫だ。腹は此通り立つてる。」

女中が徳利を持つて來た。小原君は女中を去らして五六杯グイグイ飲んだ。

「小林、森つて云ふ奴はドール嬢を最初に日本で逢つた日に鎌倉ホテルへつれて行つた奴なのだ。堂たる色魔なのだ。」

「だから今日今夜天誅を加へるからいゝだらう。」

「シッ！」

小原君が注意した。

「お待ち兼ねです。どうぞ。」

森ドクトルが著流しで入つて來て、一寸小原君を見たが、思はずも小林畫伯が居たので顔を曇らせながら坐つた。

小林畫伯が小原君にめくばせした。小原君が口をきつた。

「森さん。伺ひたい事があるんです。あなたは麻睡劑を注射してドール嬢を凌辱したさうですな。一分のすきもなく身構へて小原君は攻めよせた。」

「斷じてそんな事はないです。」

森ドクトルは沈痛な語調で云つた。それをきくや否や小林畫伯が云つた。

「何？」

小原君は自分の弱點をつかれて暴力の解決以外には何物も残らなかつた。小原君は手をのばして森ドクトルの横面をなぐつた。

「何をなさるのです。」

森ドクトルが逃げんとした時、小林畫伯は猛然として立つた。

「畜生！ 色魔！」

ボカ／＼と二人は森ドクトルを所嫌はずなぐりつけた。森ドクトルはもう反抗しなかつた。兩手をくんで動かなくなつた。其態度が一層二人を興奮に導いた。

「これでもか、これでもか。」

小林畫伯は泣きながらなぐつて居た。小原君は片足をのばして森ドクトルの背をけつた。ドクトルは前にのめつた。

小林畫伯も足をあけて蹴つた。

「思ひ知つたか、色魔め！」

動かす、又反抗もしない森ドクトルに吐きかける様に小林畫伯は云つた。
「天誅だ！ 思ひ知つたらう。」

「口でないと云つても、僕は信用出来ない。」

「それはやむを得ません。」

「大抵に白状したらどうなのだ。」

「白状？ ない事が白状出来ますか。」

森ドクトルも腹立つて來た。小原君が論歩が轉じた。

「それはどうでもいい。あなたはドール嬢を誘惑して鎌倉へつれて行つたでせう。」

小原君の聲は嘲笑にみちて居た。

「誘惑？ 失敬な言葉はつゝしんで下さい。」

「失敬な言葉？ 何が失敬だ。事實ぢやないか。」

小原君達の態度は喧嘩であつた。

「小原さん、自分の心に問うて見たらいいでせう。」

「あなたこそドール嬢を誘惑したでせう。」

「何？ 僕が？」

「さうです、あなたです。あなたこそ、ドール嬢を誘惑したのです。且又友情を賣つて小林さんにドール嬢の事を押しかくしにかくして居たでせう。」

「おかアさんすみませんが、おしほりをお願いします。そして誰も来ない様に話して下さい。」
 女將は下りて行つた。藝者が森ドクトルの横顔を見て云つた。
 「先生、どうなさつたのです。」
 ドクトルはまだ答へなかつた。女中の持つて来た手拭で藝者はドクトルの顔を拭つてやつた。
 「まア血が出て居ますわ。一體どうなさつたのです。」
 ドクトルは初めて顔をあげた。
 「馬鹿な事なのだ。けれども仕方ないのだ。」
 ドクトルは後をつがなかつた。
 「口惜くていらつしやいませう。何て亂暴な人達でせう。」
 「あゝ、亂暴には相違ない。だが俺も悪かつたのだ。」
 「どうなさつたのです。話して頂戴。」
 「あゝ、俺の家に今年の春の末から来て居たフランスの女の人があつたのだ。今居た二人の中の一人は其人と思ひあつた仲なのだ。其フランス人はあの日本人より先に思ひあつた人があつたのだ。その人から内も、に刺青をされたんだ。それも蛇の刺青なのだ。それをとつてくれとたのまれたのだ。そのフランス人は所が所なので恥かしいので魔薬をかけて、刺青を捜してくれと云ふので俺は治療室で

一四

二人は顔を見合せた。小原君が室を出んとした。飛鳥の如く藝者が一人とび込んで来た。
 「何をなさるのです！」
 「何？」
 小原君は拳をふりあげた。
 「さアなぐるならなぐつて下さい先生に何の罪があるのです。」
 小原君は女と知つて拳のやり場に困つた。
 「色魔醫者の相手か、まア看病してやれ！ おい小林、行かう。」
 二人はドカ／＼と玄關に出た。蒼くなつて居る女中を突とばして二人は下駄をはいて出て了つた。
 女將が狼狽して座敷へ来た。森ドクトルはやつと起き上つた。藝者がぬけかゝつた羽織を肩にかけ
 てやつた。
 「先生！ どうなさつたのです。まアお羽織も、こんなに破れて了ひました。」
 森ドクトルは亂れた頭を手でかき上げて後、腕を組んで頭を垂れて了つた。
 森ドクトルは下を向いたまゝ何も云はなかつた。藝者も女將も黙つて居た。

魔薬を注射したのだ。そして眠らせてから、からだをさがしたが、なか／＼刺青が分らない。さがしあぐんで、やつと内もゝで蛇の刺青を見つけて出した。氣味が悪くなつたので、俺はそのまゝ書齋に入つて了つた。フランス人は一晩治療室に眠つて居たが翌朝早く俺の家から逃げ出して了つた。所が運が悪い事には、そのフランス人にアメリカ人がついて俺が魔薬をかけてそのフランス人をどうかしたと云つて来た。俺は身におほえがない事だから、斷じてそんな事はないと云つたけれども、俺も油斷があつたのだ。治療室には俺とそのフランス女との二人しか居なかつたので云ひ譯をするにも證人がないのだ。又尙都合のわるい事には、何故魔薬をかけたと問ひつめて来るのだ。それは刺青のある所が所だから、恥かしいのでフランス女が頼むからした事だがみんな云つて了へば、フランス女の祕密が分つて了ふ。又俺をなぐつた一人はフランス女の戀人なのだが、あの男には尙更刺青の事は話せない。フランス女がくれぐれも誰にも話してくるなと頼んだし、又俺だつてももしうっかりして話して、あの男がフランス女をいやになる様では氣の毒だと思つたので何も話さないのだ。だから結局俺が悪い事をしたと云はれるしかなくなつたのだ。けれども仕方がない。俺は殴られても仕方がない。醫者なのだから色々な事を知るが、それは話してはならないのだ。だからなぐられ損なのだ。」

藝者はドクトルの言葉のきれた時云つた。

「だつて、あんまり馬鹿々々しいぢやありませんか。あんな青二才に亂暴を働かれて黙つておいでに

なつては先生の名折れです。私口惜しくて……」

藝者は齒を食ひしづつた。

「だが、そのフランス女をどうもしないと云ふ證據がないから仕方がないのだ。」

「そんな證據の出しやうがありませんか。たとへば先生と私とが何でもないと云ふ證據は出しやうがないでせう。」

「だから分る迄しばらく待つしかない。」

「一體誰がそんなありもしない事を云ひ出したのです。」

「それが一番困るのだ。そのフランス女が云ひ出したのだ。」

「え？ 自分で。まるで美人局ぢやありませんか。ひどい女ですね。」

「だがさう云ふ事があるのだ。魔薬がかゝつて居てさめかゝつた時に色々の事をうろおほえにおほえて居る事があるものだ。そのフランス女には注射をしたのだが、それ程澤山には注射しなかつたから半醒半眠だつたらう。そして俺は女の背中を真先にみた。何も無いそれから胸や腹を見たがない。それで最後にゾロスを下にさけたのだ。そしたら何かあるから兩もゝを開いてやつて蛇の刺青を見つけて出した。だからそれを半眠りでおほえて居れば、どうかされたときから思つたかも知れない誰か看護婦でも傍に置けばよかつたのだが、餘り祕密に祕密にと女がたのむので、俺一人しか居な

つたのが、こちらの手落なのだ。仕方ない、なぐられ損ですすしかない。いづれ分るだらう。」
 「でも餘り馬鹿々々しいぢやありませんか。みんな話してやつた方がいゝでせう。」
 「俺は話さない。決して話さない話さずに時の來るのを待つしかない。決してお前も話してはいけな
 いぞ。俺は此事で女房にまで疑はれて居るのだ。それでも決して話さないのだ。」
 森ドクトルはなぐられた頬にハンケチをあてたまゝ沈痛に考へ込んだ。

敵味方

丸ノ内ホテルのサロンに、ドール嬢はコエンスキーと話して居た夜の九時夕飯を二人してすませた
 後である。

「暑い。日本の七月末は歐洲にはない暑さです。こんな暑さは人を弱らせる以外の何に効果をもた
 らさぬ暑さです。」

老アメリカ人は口をまめて、日本の夏を罵つた。ドール嬢も初て日本の夏を焦熱地獄と感じて居た。

「ほんとですね。よくもこれ程の暑さを日本人は堪へしのぶものですね。此夏になつて私は初めて歐

洲がどれ程天の恵を厚くうけて居るかを思ひます。」

「ほんとですよ。南洋などの暑さは此東京の暑さよりは勿論酷いのですけれど、夕方になつて毎日降
 る雨が人の身體を柔けてくれるのです。それを東京の暑さは只痛烈であるばかりです。私達ももう避
 暑の旅に上らなくてはなりませんまい。どうです、軽井澤へでも行きませうか。」

「さう致したいと思ひます。」

老アメリカ人はドール嬢が全く日本に愛想をつかして居るのが愉快であつた。

「明日出かけませうか。」

老アメリカ人はドール嬢の夏瘦の姿を見た。

「えい、私は何と云ふ幸福に恵まれて居るのでせう。」

「では明日出發出来る様に準備をなさつて下さい。私も準備しますから。」

老アメリカ人はサロンを出て行つた。ドール嬢も後をついてサロンを出やうとした。

「ドール嬢！」

突然サロンの隅から聲がした。ドール嬢は驚いて聲のした方を見た。

「しばらくでした。」

その聲は小原君であつた。いつの間に此サロンに小原君は居たのであらうか。純白のコートをきて

小原君は笑ひながら椅子から立ち上つて、ドール嬢に近づいた。思はぬ人に呼びとめられてドール嬢は一時は逃げ出したく思つたが、小原君が案外にも無邪氣の態度で近づくのを知つて立ちどまつた。

「ドール嬢しばらくでした。」

小原君は毒を含ます話しかけた。

「しばらくでした。」

ドール嬢は快よく手を出した。小原君は握手を返して後、椅子に腰を下した。ドール嬢も腰を下す。外には誰もサロンに居なかつた。

「明日コエンスキーさんと軽井澤へおいでになりますね。」

小原君の言葉には全く棘がなかつた。ドール嬢は一寸秘密をぬすみ聞きされたのを不愉快に思はぬではなかつたが、きかれて了つた以上は、言葉を濁す氣になれなかつた。

「え、餘り東京が暑いので。」

「さうですね……あなたが森ドクトルの家を出られてから随分私は心配しました。森ドクトルは實にけしからぬ男です！」

小原君は本心から森ドクトルを悪む調子で云つた。ドール嬢は思はぬ人から思はぬ事を云はれて一

時は返事の言葉も出なかつた。

「然し森ドクトル一人を通じて全日本人を評價なさつては間違ひです。」

小原君はドン／＼と言葉を續けた。ドール嬢は何處迄小原君が森ドクトルの行爲を知つて居るのかを案じて尙更言葉が出なくなつて了つた。

「十分に懲してやる必要があります。あなたよりは私や小林君の方が遙に腹を立て、居るのです。」

ドール嬢は驚いて顔をあげた。

「小林さんも？」

「え、小林君も私も、昨夜私達二人は森ドクトルに十分復讐しました。」

「復讐？」

「え、あ、云ふ下劣な人格には口で罵つただけでは不十分ですから、暴力を用ゐて置きました。」

小原君が興奮してかう云つた時ドール嬢はうれしくなつて來た。

「まアさうでしたか、それは有難うございました。」

ドール嬢は小原君と小林畫伯とが、森ドクトルに暴力をもつて制裁を加へる場面を想像して溜飲が下る様に感じた、が考へて見れば小林畫伯迄が森ドクトルの行爲を知つて了つたと知るに及んで不安を感じぬ譯にはならなかつた。

もう近く去る日本ではある。再び小林畫伯には逢ふ機会があるまいとは思ひながら、矢張り小林畫伯に、森ドクトルの行爲が知れて了つたのは口惜しかつた。

「小林さんも？」

ドール嬢は淋しくきいた。此問をきいて小原君は初めて自分の言葉の過ぎたのを思つた。

「いえ、しつかりした事は誰も知らぬのです何か不都合の事を森ドクトルがしたのを想像しただけです。」

小原君は大分狼狽してどもりながら云つた。ドール嬢は只不安が深くなるばかりであつた。

二

「小原さん。」

ドール嬢は淋しく呼びかけた。

「……私はもう小林さんにお目にかゝる自由を失つて了りました。……」

ドール嬢の眼には涙が光つた。

「何故ですか。」

かう小原君が問ひ返したが、我ながら問ふ必要のない事を問ふたのを後悔した。ドール嬢もしばら

くは何も云はなかつた。小原君はドール嬢が森ドクトルのために、小林畫伯に再び逢ふ事の出来ぬ身となつた事を悲しんで居るのを知つて居た。然しこのまゝでは別れる事が出来なかつた。

「ドール嬢、小林さんは森ドクトルを悪んでは居ますが、あなたを悪んでは居ません。」

ドール嬢は小原君の言葉をきいて一層悲しかつた。すべてが小林畫伯に知れて了つたと思ふと、絶望であつた。が我から我身の不幸を承認して了ふ事は出来なかつた出来るならば森ドクトルの行爲は特に小林畫伯には知られたくなかつた。

「先程からのあなたのお話は私にはよく理解出来ません。私は自分の都合で森ドクトルの家を出ましたのです。そして或アメリカ人の祕書となりました。それ故近く日本をたゝなくてはならぬのです。そのため小林さんにはもうお目にかゝる機会がないと申しましたのです。」

ドール嬢はやつとこれだけ云つて稍心の平静をとりもどした。けれども不安はまだ残つて居た。

「さうですか。それは残念です。折角逢ふために日本まで来て、小林さんにも逢はずにおたちになるのは私も悲しく思ひます。」

小原君はかう云つてドール嬢の心を救ふしかなかつた。ドール嬢は尙續けて小原君と話すのが恐しくなつて來た。

「小原さん、私明日旅に出ますので準備がありますから失禮致します。」

「……一人の女性、それは神の美をそのまゝ享けて来た女性であつた。彼女は生れながらにして神の嫉妬をうけて居たのであつた。神とても自らの美をそのまゝ人の身に與へるのは惜しかつたであらう其處に嫉妬があつた。嫉妬とは蛇である。蛇の姿が生れながらにして彼女の皮膚にあつた。……」

刺青の男は豫言者の様な冷たさで語り續けた。ドール嬢は段々と血の氣を失つて来た。蒼白な顔が伏せられて、膝の上に置かれた兩の手がかすかにふるへ出した。

「……彼女は神の嫉妬を人力をもつて除かんとした。それが既に神に對する冒瀆でなくて何であらう……」

刺青の男は重々しく云つて口をつぐんだ。ドール嬢がその時うなる様に云つた。

「もうやめて下さい。おやめ下さい。」

「神の心を私は云つて居る。しばらくきかなくてはなりません。」

刺青の男の言葉には威嚴と確信があつた。ドール嬢も小原君も空恐しくなつて来た。

「……彼女は蛇を抹殺せんとした人力をもつて抹殺せんとした。一人の醫者が彼女に麻睡劑を注射したのである彼女は昏々として眠つて居た。そしてめざめたのである。彼女は醫師の行爲……それは麻睡中の妄想錯覺に過ぎない。

……實在しない行爲、それを實在と誤信したのである。……」

ドール嬢は小原君の挨拶もきかずにサロンのドアをあけて廊下に出んとした。

「子爵令嬢ドールさん。」

突然落著いた語調で廊下で呼びかけたものがあつた。ドール嬢は喫驚して聲の主を見た。

「刺青の男が登場しました。」

愉快な人を食つた調子で刺青の男が云つた。ドール嬢は只呆然として彼を見つめた。刺青の男はドール嬢の後に立つ小原君を見た。

「あゝ、そゝつかしやの繪かきさん。」

落著いたフランス語であつた。

「さアお二人とも私の言葉をおきき下さい。世の中の誤解がどれ程の悲劇を仕組んだであらう。」

刺青の男は彼獨特の役者めく表情で、兩手をひろげてドール嬢と小原君とをサロンの中へ押しもどして了つた。

「まアおかけ下さいまし。」

刺青の男は主人らしく云つた。ドール嬢も小原君も椅子に腰を下ろすしかなかつた。

「で、刺青の男が物語るのです。」

彼は全く劇中の人物になつて居る。

刺青の男はそれぎり何も云はなかつた。そして靜かにドール嬢を見つめた。

ドール嬢が顔をあげた。

「理解出来ましたか。ドール嬢。」

刺青の男が會話の語調で云つた。ドール嬢は返事なく再び顔をうなだれた。

「あなたの思ひ違ひです。錯覚です。」

刺青の男が斷定的に云つた。今迄サロンを極度に壓迫して居た空氣が急に輕くなつた。

「さうでせうか。」

「さうです。斷言します。」

刺青の男が眞顔になつてドール嬢を見た。ドール嬢はホツと呼氣を吐き出した。

三

「小原君馬鹿氣たことをしたではないか。」

刺青の男が急に小原君を叱る様に云つた。

小原君は不意を食つて、返事も出来なかつた。

「ドール嬢、それでは明日の準備をなさつたらばいいでせう。今コエンスキーさんにきいて來まし

た。」

ドール嬢は刺青の男が餘りキビキビして居るので薄氣味が悪い程であつた。

「では又、近いうちにお目にかゝります。」

ドール嬢がサロンを出て行つたそれを見送つた刺青の男は小原君に笑ひかけた。

「やア、失禮しましたよ。全く意外です。それにしても、あなたは亂暴な事をやりましたね。今朝森

ドクトルにききましたよ。どうもあなた方は氣が早くて困りますよ。餘り詳しくはお話する自由を持

たないが、とにかくドール嬢は森ドクトルを誤解して居るのです。それを昨夜の様な事をしてしつて

はドクトルに氣の毒ではありませんか。然も小林畫伯迄もひつぱり込んで少しひどすぎますよ。」

刺青の男が嘘を云つて居るとは、小原君にも思はれなかつた。

「さうでしたかなア。」

「さうですとも。まアあなたはどう思つたつてもいいが、小林畫伯には、たとへそれが事實であつても話してはならぬ事だつたと私は思ふのです。たとへばですね、人の妻がまア不埒を働いたとするその場合でも決してその不埒をその女の夫に話してはならないと私は思ふ。そんな事は不必要な事だ。夫妻二人で解決すればいい事だ。それも未解決でいつともなく忘れて……ごまかしてしつてへばそれでいい事なのだ。然るに小林畫伯迄ひつぱり出して、森ドクトルをなぐつて了ふなどは亂暴千萬です。」

を働かぬのを信じて居るのです。あなたもほれて居ながら、私とは全然反對の事を信じやうとしたのだ。それは嫉妬があるからです。今でも小林畫伯の幸福をぶち破りたくてならないのでせう。」

「そんな事はありません。」

「ところが、あるのです。まアそんな事はどうでもいい事にして、明日はドール嬢が輕井澤へ行くのです。あなたは明日からドール嬢の後をつけて居て下さい。然もなるべく後をつけて居る事が分る方がいゝのです。そしてドール嬢に悪まれる様な行動をとつて居て下さい。」

「いやだなア、そんな役廻りは。」

「仕方ありませんや。ほれた弱味ですから。ドール嬢があなたをうるさく思ふ様になれば、それでいいのです。とにかくあなたは徹頭徹尾敵役になつて貰ふしかないので。」

「仕方ないからさうやりませう。」

「いやでせうが願ひますよ。私は私で又一芝居やらなくてはならないのです。」

「で、小林には何と云つて置くのです。」

「すべては私にきいてくれ、と云つてあなたは何もお話しなさらぬ方がいいのです。」

「承知しました。變ではあるが昨夜の失敗の手前やむを得ないから、命令に従ひませう。」

「さう願ひますよ。ところで一つあなたに願ひがあるのです。明日輕井澤へドール嬢が出發した後で

刺青の男はかう云ひながらも、餘り腹を立てゝる様子もなかつた小原君はすつかり當惑して了つた。

「さうでしたな、私の失敗でした大失敗でした。まア許して下さい。」

「それは許しますよ。森ドクトルとても理由があるので辯明しないのです。世の中の事はあなたの思ふ様に單純には行かないのです。」

「重々私が悪かつたです。森さんにもお詫びします。だが小林にはどうしたらばいいでせうか。」

刺青の男はクス／＼と笑ひ出した。

「それは心配御無用です。さつき小林畫伯には話して來ましたよ。とにかく森ドクトルは決してドール嬢に對して不都合な行爲などはなかつたのだと、私が云つたらば大變森ドクトルを氣の毒がつて居ましたよ。やつぱりドール嬢にほれてるんだ。それをありませぬ事を話して落膽させるなんて、あなたも性質がよくありませんよ。あなたもまだドール嬢にほれてるんでせう。それで内心痛快にでも思つたのでせう。」

「まさか。」

小原君は頭をかいだ。

「確にさうですよ。私もドール嬢にはたしかにほれて居る。ほれて居ればこそ、森ドクトルが不都合

いゝのですが、小林畫伯をひつぱり出して、上野の日佛交換展覽會へ行つて下さいませんか。」
 小原君は刺青の男の考へが分らなかつた。
 「何の必要かあるのです。」
 「まアとにかく行つて下さい。そして私はドール嬢を出發させて後丸ノ内ホテルに本城を構へる事にしますから、何か事件が出来たなば私に話して下さい。」
 「承知しました。」
 「では私はこれから小林さんに逢ふ必要があるのです。あなたは今夜のドール嬢の行動を監視して居て下さい。」
 刺青の男は小原君を置きざりにしてサロンをあたふたと出て行つた。

四

日光中禪寺湖畔のホテルに、五十年來ないと云ふ日本の暑氣に追ひたてられた他國人が、三四十人暑を避けて居た。日本人は大抵はホテルから斷られて腹を立て、白根山麓の湯の湖畔迄登つて行つた。

暑氣のために發狂するものがあつたと新聞紙が報じた日の夕暮、中禪寺湖畔を一人の混血兒が口笛

を吹きながらあるいて居た。彼は何の目的があるでもなさうに、涼風を追つて居るらしかつた。

三人の亞米利加人が今中禪寺湖のモーターボートを乗り捨て、湖畔の路を歩いて居る。混血兒はステツキを振り廻しながら、アメリカ人とすれちがつた。

「今晚は、いゝ風が湖面をなめて來ますな。」

混血兒が未知のアメリカ人に心安く英語で話しかけた。亞米利加人達は氣軽く答へた。

「日本の夏が此湖畔を享樂させて呉れるのです。」

「さうです。もう灯がともり出しました。そして夏だけの日本の情緒が吾等の心を柔け出す。」

混血兒が詩人らしく云つた。亞米利加人等が三人何か小聲で話して顔を見合せた。最も年老た亞米利加人が、混血兒に近づいた。

「あなたの國籍は？」

「あは、國籍を強ひて求むれば日本人です。だが私の正直な心は國籍を忘れさせて三十年になつて居る。」

老アメリカ人はしばらく混血兒の言葉の謎を解かうとして黙つて居た。

「あなたの知つて居る港は？」

「横濱、長崎、上海、そしてサンフランシスコとリバプール。もつとお尋ねになるならば、ウラジオ

ストック。都は？と問はるればリオ・デ・ジャネロ。レニングラード。……世界の隅々迄も。」

混血兒は自分の過去の履歴を思ひ起す様に、日の光りの残る湖面を見て云つた。
「私達も一生の旅行者です。」

老アメリカ人が云つた。他の二人のアメリカ人が混血兒に近づいた。

「どうです、夕食を一緒にとらうではありませんか。」

混血兒は一寸躊躇したが、何か心に決する所ある様に云つた。

「夕食も結構ですが、もしばらく散歩しませんか。」

「それもいい。」

と老アメリカ人が云つたが、すぐに他の二人を見て小聲に何か云つた。それはロシア語であつた。

混血兒は二三語他國人によつて話される言葉をロシア語とは分つたが、其の言葉の内容を知る事は出来なかつた。混血兒は彼等の内容の話をぬすみ聞きする事を遠慮でもする様に、わざと彼等からはなれて先に歩き出した。夕風が涼しく混血兒のコートを吹き去つた。彼は他國人が彼より既に五六間おくれ居るのを感じて居たが、故意に歩調をゆるめずに、歩き續けて居た。

老アメリカ人が彼を追ひかけて近づいて來た。

「あなたは、まだ永く日本にとまるのですか。」

アメリカ人の間に混血兒は答へた。

「さアそれは神も知らないでせう私の心が日本をあきた時、私の旅行が又始まるでせう。」

「さうですか、私達は近く日本をたつ積なのです。」

「どちらへ向つて。」

「佛領印度へ。」

混血兒は立ちどまつて老アメリカ人を見つめた。

「貿易の事ですか。」

「さうです。」

「そして寶石の事です。」

混血兒の言葉をきいて老アメリカ人は一時狼狽した様であつたがすぐに答へた。

「さうです。私達は寶石商なのです。……だが日本の税關は世界どの港にもない程うるさくて困つて居ます。」

「さうでせうな。ワイロはきかず蜘蛛の絲を算へる主義ですから。」

「どうでせう。私達の仲間に入りませんか。」

老アメリカ人は熱心に云つた。混血兒はしばらく返事をしなかつた。

「どうです。あなたも世界を廻り歩いた人でせう。まんざら私達の仲間になれぬ人でもありませんまい。」

老アメリカ人が氣味の悪い程な熱をもつて云つた。

「仲間になる寶石は？」

と混血兒が云つた時、いつの間にか近づいて居た一人のアメリカ人が云つた。

「知つてるのだな。」

「知つてるよ。……」

と混血兒がぞんざいに云つた時、スッと一人のアメリカ人が彼の目の前にピストルをつきつけた。

「よせよ。素人臭い！」

混血兒は右手をのばして、ピストルを持つ手を叩いた。ピストルが叢に落ちた。

五

三人のアメリカ人は電光の様にすばやい混血兒の手先を見て、呆氣にとられて居た。混血兒はすっかり落著いて笑ひ出した。

「日本人の血をうけて居るんだ。大抵の見通しはついて居るのだ。仲間に入れても損はなからうぜ。」

言葉も態度も立派なアメリカ人の波止場ゴロになつて居た。

「どうだね、寶石が持ち込めなくて困つてるね。毛唐だけぢやア、日本の港も駄目になつて来たよ。

やつぱり日本だつて、さういつ迄も毛唐を恐れちや居ねえぜ。日本の税關は日本人同志でなくちやア

うまく行かねえのだ。どうだねたのむとなら仲間になつてやる。それともいやかね。」

混血兒の言葉はベラ／＼と舌をころんだ。アメリカ人達は度膽をぬかれた形である。

「第一ピストルを日本でふり廻しちやいけねえ。日本つて云ふ國は刀の國だ。サムライの國だよ。日

本では度胸なのだ。ピストルなどはヤンキーにしか脅しにならねえ代物だ。どうだね。かうなつたら

おれを仲間に入れるかい。それとも日本の警察へつき出さうかねおれはどつちでもいいのだ。」

混血兒は溜飲の下る様に啖呵をきつた。アメリカ人は三人顔を見合せたまゝである。

「おい、コエンスキー。しはらくだつたな。」

混血兒はおどろく老アメリカ人を見つめた。

「三年前だつてかな。北の海の港のメトロポールカフェーの事をおほえて居るかい。」

「え？」

老アメリカ人は喫驚して混血兒を見つめた。

「そんなに驚くなよ。あの時はアメリカ種の支那人として逢つたんだ。よくもアラビヤのダイヤを……」

まかして逃けたな。」

「さうか、お前はキウン・チウ・ニヌーか。」

「あゝさうだよ。だが今は日本人さ。坂上と云ふ立派な日本人だよ。」

コエンスキーは只驚き果て、居る。他のアメリカ人がコエンスキーに云つた。

「どうしたのだ。老人。」

コエンスキーはまだ驚きから静まらなかつた。他のアメリカ人が云つた。

「君、日本人！ 古い事はまアやめないか。アフリカのダイヤモンドなら、いくらでも返すだけあるよ。とにかく仕事の都合から云へば、仲間になつて貰はなくてはならないのだ。さア老人！ 謝罪するんだ。それがいい。」

コエンスキーが紳士らしく手をのばした。

「キウン・チウ・ニヌー。あの時は悪かつた。許してくれ。」

坂上はコエンスキーの手を握り返した。

「分つたよ。もういいんだ。」

「あの時は、實は……」

「もう分つたよ。日本人は過去の罪をさつぱり許すのが特徴だ。で仲間になると云つたつても、一體

何の役をふられるのか聞かなくちやア返事も出来ねえよ。」

アメリカ人三人は顔を見合せたコエンスキーが重い口調で云つた。

「みんな話すよ。例の通りアメリカから寶石を持つて来たんだ。此間持ち込んだのはそれ程のものでなかつたから、船の中で女を一人使つて持ち込んだのだが、二週間程すると又一船つく筈なんだ。それを旨く持ち込むのに大分頭を痛めて居るのだ。そいつを持つて横濱へ来る仲間が大分困つてると見えて電信をよこしたが、こつちも工風がつかなくて困つてるんだ。何とか智慧をかしてくれないか。」

「うん、さう話されば、何とか工風して見る。」

「それは有難い。ではホテルで飯をすませてから相談しやう。」

「あゝ、承知した。」

四人はもと来た道を引き返した。

坂上は又先に立つて歩いた。後に来る三人のアメリカ人はまだヒソヒソと話して居る。

「後からピストルを打つのはやめてくれよ。」

坂上は暢氣さうに云つてふり返つた。

「大丈夫だ。」

コエンスキーが坂上に追ひついた。

「おい老人、女は仲間に居るんだらうな。」

「あ、一人だけやつと捜したのだ。」

「アメリカ人か。」

「フランス人だよ。」

「さうか。」

坂上は心の中で笑つた。

「情をあかして仲間にしたのか。」

「まだなのだ。フランスの貴族なのだ。秘書にやつたよ。」

「うまくやつたな。」

坂上はそのフランス人がドール嬢であるのを知つて居た。コエンスキーはふと思ひ出した様に云つた。

「それでな。そのフランスの貴族を種にして一芝居やる事にして居るのだ。此方も手傳つて貰ひたいのだ。」

「ふうん、いづれホテルで聞かうよ。」

坂上は後は何も云はなかつた。只何か考へながら湖畔の道をおるいて居た。

六

坂上を加へて四人の人々は、水入らずにホテルの食堂で食事をすませた。コエンスキーが食堂を先に立つて出た時、坂上をふり返つて云つた。

「私の室で謀議をめぐらせよう。」

四人はコエンスキーの室に入つて、ドアに鍵をかたくかけて椅子によつた。

「坂上さん、……あは、支那人でなくなつたね。……で今夜はフランス女は室で一人食事をとらせて置いたが、私を信頼して居る様子だ。いづれ君も逢ふ機会があるだらうから、何分うまく話して置いて貰ひたい。君はフランス語は？」

「僕はフランス語の方がいいのだ。」

「それは好都合だ。とにかく近く到着する寶石をうまく日本に持ち込む時に、君の腕が入用になる。それ迄にフランス女と君とがうまく聯絡をとれる様にする。」

「だが、いつ迄もそんな女を連れて居ては厄介で困りはしないか。」

坂上はコエンスキーの本心を捜る様に云つた。

「勿論、佛領印度迄しか用のない女だから、あちらへ到着すれば處分して了ふのだ。」

「うまく處分が出来るか。」

「それは心配ない。賣つて了ふのだ。」

「買手があるだらうか。」

「勿論あるとも。君はまだ女を知らないから分るまいが、申分ない女だから、賣口は十分にある。」

「それならば安心だ。」

坂上はコエンスキー等の本心を知るを得て心の中で、ドール嬢に危険がせまつて居るのを感じた。

コエンスキーは坂上かドール嬢を知つて居り、又無二の同情者であるのを知る筈がなかつた。坂上を仲間に入れた事が、事を運ぶ上に種々都合であるのを思つて喜んで居た。

アメリカ人三人は坂上を入れて口々に相談した。

例の船が入港する迄に、船に居る仲間はうまく運ぶだらうか。」

「彼奴の事だから何とかやるだらう。」

「だがこちらに、子爵令嬢があるのを知つて居れば尙都合がよからうが。」

「それはさうだ。どうだらう、無線電信を打つて知らせてやらうか。」

「然しこちらに子爵令嬢があると知つたらばどう工夫するだらう。」

「さうだな。俺ならば一人船の上で女を手に入れるよ。そして旅券を盗んで了ふ。日本の税関は外國

の婦人には、不必要に遠慮するから、寫真と引き合せなどはやらない。入港前に旅券調べをやる筈だが、その後旅券をうまく盗んで了ふのだ。そして出迎ひに子爵令嬢を乗込ませて、ごまかすのだ。子爵令嬢のあの上品さを見れば、税関の官吏なんかは、寶石箱の二つや三つは黙つて通すだらう。」

「さうだな、先づそんな工夫がいだらう。だが、さうするには子爵令嬢にも情をあかさなくてはならぬまい。」

「それは、それに越した事はないが、餘程うまくやらないと失敗するかも知れない。」

坂上は三人の話をきいて居ながら、心の中で決する所があつて云つた。

「それは俺にまかせてくれないか。うまくやるが。」

三人は坂上を見た。

「どうやるのだ。」

「まア俺にまかせて置いてくれ君等は其子爵令嬢の過去を知つてるのか。」

コエンスキーが答へる。

「大體は知つて居るのだ。」

「さうか。それを一應話してくれないか。それを知れば俺には工夫がつく。」

かう云つて坂上はドール嬢の過去をどの程度迄コエンスキーが知つて居るかを試した。

「子爵令嬢は日本の畫家と相思の仲なのだ。その畫家に逢ひたくて單身日本へやつて來たのだ。それで經濟上の關係から學校の先生をやつたり、個人教授をやつたりして居たのだ。けれどもどうしてもまだその畫家に逢へないのだ。逢はうと思へば逢へるらしいが、何か譯があつて逢はずに居る。ところが新しい不幸が彼を見舞つて來た。彼女が間借りをして居たのは日本の醫者なのだが、その醫者に一寸した治療をして貰つた時、怪しからぬ醫者が、彼女を昏睡させて、恥を與へて了つたのだ。それで彼女は全く絶望して了つて日本を去らうと決心して了つたのだ。それで俺の居たホテルへ逃げて來たのだ。俺は早速寶石を呉れて了つたのだ。かう云ふ女だから親切にしてさへ置けば、こちらの思ふ通りに踴る人形になる。で坂上君、どうだ。おれは其醫者から相當な金をまき上げてやる計畫を立て、居るのだ君も一つ手傳はないか。」

坂上はコエンスキーの言葉ですべてを理解した。

「よし！ すべてをおれにまかせてくれ！」

坂上はいかにも悪黨らしく云つてのけた。心の底では此アメリカ人達の間抜けさ加減を嘲つて居た。

七

夜更けて坂上は急用があると云つてアメリカ人と別れてホテルを出た。坂上としてはアメリカ人の

計畫をすつかり知る事が出來たので、その對策を講じなくてはならぬと思はれた。先づ最も心を痛めたのは、ドール嬢の身の上であつた。このまゝ抛置するならば、アメリカ人達はどんな悪事にドール嬢を利用するかも知れぬ。且又ドール嬢は森ドクトルの行爲を尙疑つて居るのである。そして再び小林畫伯には逢はずに、日本を出發する決心をして居るらしい。

坂上が次に心配するのは森ドクトルの事であつた。森ドクトルが全く立會人なしにドール嬢に麻醉劑を注射した事は、確かに森ドクトルの油斷に相違ない。それが單なる油斷であつたにしても、アメリカ人等がこの事を材料として森ドクトルを恐喝するならば、森ドクトルは辯明の方法がないであらう。其處につけ込まれたならば、森ドクトルも恐らくは泣寝入をするしかないであらう。

坂上はホテルを出て闇の湖畔をあるきながら、如何にすべきかを考へて居た。スタく人と人が坂上の傍を通り過ぎた。が突然聲を立てた。

「坂上さんではありませんか。」

坂上は驚いて聲の主を見た。

「どなたですか。」

「僕ですよ。小原ですよ。」

坂上は小原君に近づいた。

「どうしたのです。いつからこちらへ。」

「昨日来ましたよ。ドール嬢のあとを追つて来たのです。」

「あ、あなたもさうだつたのですか。私も今日午前に来たのです。」

坂上はかう云ひながら、立聞きをして居るものがありはせぬかと四圍を見廻した。

「小原さん、そして收穫がありましたか。」

「まだないのです。何とかしてドール嬢に逢はうとして居るのですが、まだその機会がなくて困つて居ます。」

「ドール嬢に逢つてどうなさるのです。」

坂上は無鐵砲な小原が何を仕出かすか、心配になつた。

「森ドクトルに天誅を加へた事を報告する積りなのです。」

「天誅？ どうしたのです。」

「餘り怪しからぬ奴ですから、小林と二人でなぐりつけてやつたのです。」

「え？」

坂上はびつくりして闇をすかして小原君を見つめた。

滅茶苦茶になぐりつけてやつたのですが、森の奴只黙つて降参して了ひました。」

坂上は聲を落して云つた。

「小原さん、あなたは何と云ふ馬鹿氣た事をしたのです、あなたは森ドクトルがそんな悪事を働く人だと思つて居るのですか。」

「勿論さう思ひます。」

「それはあなた方の誤解ですよ。」

「いや誤解ではない。元來森と云ふ奴は計畫的にドール嬢を犯さうとして居たのです。以前ドール嬢が世話になつて居た家から、ドール嬢をそのかしてつれ出したのです。それはともかく、僕等が面責した時にも一言も辯明しないのです。」

「それは當然だ。」

「當然？ 何故當然です。」

「まア、いづれ分る時があるだらう。出来た事は今更仕方がありません。だがドール嬢にそんな事を報告してはいけない。あなたは早速東京へ歸つて下さい。私は今日すつかりドール嬢の周圍の事を探偵して了ひました。いづれあなたの方の手をお借りしなくてはならぬ時が来るでせう。それ迄はあなたは東京でチツとして居て下さい。」

坂上の言葉は命令的であつた。小原君は坂上には反抗する事が出来なかつた。

「では一應引きあけますかな。實は森をやつゝけたうれしさで前後の考へもなくとび出して来て了つたのです。」

坂上は言葉の調子をかへて云つた。

「小林さんはどうしておいでになりますか。」

「すつかり悲觀しちやつてます。どうかしなければいゝと思つて居ます。先日阿久川孝之助が自殺したのを知つて以來は餘計に變になつて居ます。阿久川は小林の親友なので、誠にもつともです。それで僕はドール嬢に逢つて、森ドクトルに天誅を加へた事を報告して小林は決してドール嬢に對しては情を變へないと云ふ事を知らせたくなつたので、大急ぎでやつて來たのです。」

「さうでしたか。それは御苦勞でしたな。ですがあなたの考へはしばらく思ひとまつて戴かなくてはなりません。どうか一刻も早く東京へお歸りになつて、小林さんに落著いておいでになる様によく話して下さい。私も一二日中には必ず好結果をもたらして上京する事が出來ますから。」

「さうですか。では僕は明日早朝に歸京します。」

「さうして下さい。では。」

「さよなら。」

二人はさつぱりして湖畔で別れた。

湖畔のホテルに夜が更けて、サロンで食後のリキユールのコップを前に話して居た人々も、いつの間にか室にひき込んで了つた。

泊り客は秋めく夜風の冷たさに安らかなの眠に落ちて居た、コツコツと奥の一室のドアを打つものがある、廊下の電燈のほの暗さに、ドアを打つ人もさだかでない。

「コツ、コツ。」

しのびやかながらドアを打つ音は廊下に反響した。

「アントレー」

美しい調子の聲が室に聞えた。ドアの外の人はまだ動かない。ギーと音がしてドアが内から開かれた。

「どなたですか。」

フランス語のなめらかな言葉と共に、美しい夜會姿の女の上半身が現れた。

「刺青の男が來ました。」

「男の聲はしのびやかであつた。」

「まア坂上さん。……」

「叱ッ、あなたを救ひに来たのです。」

「救ひに？」

フランス女の聲が稍甲高かつた。

「静かに。あなたの敵に知れぬ様に。」

刺青の男の聲は相變らず低い。

「私の敵。」

女の聲が再び甲高かつた時、刺青の男は身ををどらせて室にとび込んだ。女は驚いて身を引く。男は矢庭にドアを内からしめる。廊下をあるく足音がドアを通じてひびいた。刺青の男は耳をすまして足音の遠のくのをきいて居た。足音は段々と遠く消えた。

ドール嬢、御婦人の室へ御許しもうけず入つた事を先づお許し下さい。」

ドール嬢はまだ半不安に立ち續けて居た。

「只一言申すだけです。あなたは敵と味方とを錯覺なすつてはいけません。明後日あたりあなたを迎ひに来る人がある筈です。その人は誰であるか、私にはまだ分らぬのです。が今夜の私の言葉を信じて、私の云ふ通りになさつて下さい。」

「どう云ふ譯なのですか。」

「そんな事を今お話して居ては事は破綻に終るのです。どうか私を信じて下さい。」

ドール嬢はしばらく無言で刺青の男の顔を見つめて居た。

「ドール嬢、私はあなたを愛して居ます、恐らくあなたを愛して居る誰にもおとらぬ程度です。どうか私の言葉を信じて下さい。」

刺青の男の聲は低かつたが熱情に燃えて居た。ドール嬢はまだ答へなかつた。

「ドール嬢！私はあなたが小林畫伯を愛して居らるゝ事をよく知つて居るのです。私はあなたから愛の報酬をうけ得る立場には居らぬ人間です。けれども私がかうしてあなたの危機を救ふのだけを私に許して下さい。」

ドール嬢が初めて口をひらく。

「危機とは？」

「さうです、あなたは今知らずに危機に陥つて居らるゝのです。私の言葉を疑つたり吟味したりなさる時ではありません。一三日中にあなたを迎ひに来る人があつたならば、それが誰であつてもあなたは、其人の言葉の通り行動なさつて下さい。それがあなたを現在の危機から救ふ唯一の手段なのです。」

ドール嬢は不安に心を追ひ立てられたが、まだ意識を失はなかつた。

「坂上さん、あなたが私にいつも好意を持つて居て下さる事は、私にもよく分つて居ます。が私は悲しみをかくして思ひきつて申上げなくてはならぬ事があります。私はもう自由な私ではありません。私は或アメリカ人の秘書に雇はれて了りました。近く日本を立たなくてはならなくなつて居ます。どうか私の心を亂さぬ様にお願ひ致します。」

「ドール嬢！それですからあなたは危機に陥つて居ると云ふのです。あなたを雇つたアメリカ人をあなたは一應取調べましたか。」

ドール嬢は當惑の極、椅子に腰を下ろして了つた。

「ドール嬢！私は何事もアメリカ人に就いては云ひますまい。唯願はくは私を信じて下さい。」

ドール嬢は淋しい顔をした。

「坂上さん、どうかもう私を迷はせて下さいませぬ。私は全く絶望して居るのです。一日も日本に居る氣になれなくなつて了りました私は日本と別れたいのです。日本にこのまゝ續けて居ましたならば、私は一日々々と悲劇の主人公として苦しまなくてはならぬのです。」

「あゝ。ではあなたは小林書伯をもう愛して居られぬのですか。あなたが書伯に對する愛情はもう打ちきりになつて了つたのですか。」

「いゝえ、坂上さん。決してそんな事はありません！」

「と云つても……」

「いゝえ、小林さんを愛すればこそ日本を去るのです！」

ドール嬢は興奮して來て半捨鉢の様に云つた。

九

「ドール嬢！あなたは私があなたに悪意を持つて居るとお思ひになるのですか。」

刺青の男はたまらなくなつて云つた。ドール嬢はすぐには答へられなかつた。實際ドール嬢には刺青の男の眞意が分る筈がなかつたのである。

「坂上さん、どうか私に靜かに考へる時間を與へて下さいませんか。」

ドール嬢は早く此男と別れたかつた。そして自分のとるべき手段を考へたくなつた。

「それは御尤もです。私は深更なのにあなたを突然お訪ねしたのです。且又御婦人の室へ許しもうけずにとび込みました。私は重ね重ね婦人に對する禮儀を破りました。あなたは私を悪んでおいでになるでせう。私は其點ではどう云ふ悪しきも甘んじてうけます。そのために私の言葉も又疑はれ易いでせう。けれども私は今夜は其餘裕がないのです。あなたを危機から救ふためには、敢て無禮の罰をもうけるしかないので。とにかく罪は私にあります。私を悪んで下さい。唯願はくは私の願をきい

「分りました。もうお目にはかかりません。お別れに際してあなたの御幸福をいのります。」

「どうぞ、あなたも。」

坂上はドアに近づいて再びドール嬢を見つめた。まだ世の中の罪も罰も知らなかつた頃の様な純真な情が坂上に湧いて来て、坂上は涙に眼尻の暖かくなるのを感じた。

「さよなら。あなたと小林畫伯とに幸福な日の来るのをいのつて居ます。」

「有難う。ですがその日は永久に参りません。」

「私です。私一人です。あなたと小林畫伯との幸福のために生きて居るものは……」

刺青の男はドアをあけて身を引くやいなや外からドアを閉ぢて了つた。

暗い廊下を坂上はトボ／＼とあるいた。そしてホテルの立間でボーイにチップを握らせて外に出た夜路が冷たく身を感じた。坂上は失戀の人の様に危い足どりで湖畔迄出た。

「おい、坂上君ぢやないか。」

亂暴な英語が通りすぎる人の口から洩れた。坂上はハツとして立ちどまつた。

「やつぱりさうだつたな。」

それは今日コエンスキーと共に居た若いアメリカ人であつた。

「どうしたのだ、今頃。」

て下さい。どうかあなたを迎ひに来る人の言葉に従つて下さい。」

刺青の男は背水の陣の様に數願の調子で云つた。
「お言葉はよく分りました。結局私自身の不幸は、私の心の動きの結果で分れるものです。私の未來がどうならうとも私はせむべき事があれば、一生自分をせめて行きます。どうか私をしばらく自由にして置いて下さい。」

刺青の男はもう何も云ふ元気がなくなつて了つた。

「さうですか。それではやむを得ません。私は私の心の命するまゝに行動するしかないので。私は色々の過去を持つて居ますが。今は純眞の我に歸つて居ます。私の純な心は私に正しい道を知らせて呉れるでせう。それだけ申しあげて私はお別れします。今夜の私の行動が無常識で且あなたに對して禮を失した事をお許し下さい。最後に一つお願があります。どうぞそれだけはおき、届けを願ひます今夜私がお目にかゝつた事と、私が今夜申しあげた事は、誰にもお話し下さいませんやう……」

ドール嬢は落著いて答へた。

「恐らく私は誰にも今夜の事は話しますまい。又話したくもありません。坂上さん、どうか私の願ひもきいて下さい。再び私を見ないで下さい。私はすべてあきらめました。私は淋しい自分を淋しく見守つて行きたいのです。」

アメリカ人が坂上にきいた。坂上はドール嬢と逢つて居た事を此アメリカ人が知つても居る様に思はれて一時狼狽したがすぐに心を取り直して云つた。

「君こそどうしたのだ。今頃。」

「あは、飲み過ぎを瀧でさまして来たゞけさ今頃から何處へ行くのだ君は。」

「僕も夜風を吸ひに来たゞけた。」

「さうか。宿は？」

「日本人専門の宿屋さ。さよならもうおそい、又明日逢はう。」

坂上は故意にアメリカ人と別れて了つた。

——どうしてもかうしてゐてはいけない。何とかしてドール嬢を救はなくてはいけない。やむを得ない。最後の手段しかない——。

坂上は急ぎ出した。そして湖畔からはなれて往來にある自動車屋を叩き起した。

「日光迄、大至急だ」

彼は闇の夜を自動車で大谷川に沿うた道を急ぐ必要にせまられて居た。

相思相問

「何れにしても申譯ない事です。何しろ小原君と云ふ男がそゝつかし屋なので困るのです。だが決して心底から悪人ではないのですから許してやつて下さい。」

刺青の男が森ドクトルを訪ねて應接間で話して居た。森ドクトルは沈痛な顔をして答へた。

「いや私が油断でありました。私一人しか診療室に居なかつたのは重々失敗でした。それにしても、先日二人からなぐられた晩、一番困つたのはドール嬢の秘密を話す事が出来なかつた事でした。あの秘密を話しさへすれば疑惑はとけたでせう。それが云へないので只なぐられ損になりました。然し私としてはいゝ経験でした、將來あゝ云ふ事に又逢ふかも知れません。その時には十分注意する氣になるでせう。まアさう思つてあきらめて居るしかありません。」

「いや先生の御心中はお察しして居ます。」

「ドール嬢はその後どうして居ますか。私の處にまだ荷物がそのまゝ残つて居ますが。」

「それが大變なのです、途方もない不幸がドール嬢をおそひかけて居るのです。」

「なのですが、お話しなくては一層危険と思ふのでお話しませんが、彼等はドール嬢の事であく迄あなたを恐喝する積らしいのです。私にも手をかせとコエンスキーが昨日云つて居ました。彼等は事實の有無などは問はないのです。とにかく先生の地位を考へて一本調子に恐喝しやうとして居るのです。それで私からたつてお願があるのですが、彼等の恐喝に對して對抗手段をおとりになるのをしばらく差控へて戴きたいのです。」

「と云ふと？」

森ドクトルは稍不服氣に云つた。

「これはまるでお話にもならぬ事ですが、しばらく先生も心をおさへつけて、どうかドール嬢の身をかばつてやつていたゞきたいのです。」

「森ドクトルはまだ刺青の男の眞意が分らなかつた。」

「勿論ドール嬢のためになる様には取計らひますが、どうすればいゝとお云ひなのですか。」

「さう仰しやられると一寸申上げ兼ねますが、……つまりドール嬢に無禮を働いた事として後悔して居られる様な風をして居て戴きたいのです。」

森ドクトルは顔色を變へた。

「それは出来ません！」

「どうしたのです。」

森ドクトルは椅子をよせて刺青の男の口許を見つめた。

「矢つ張り人間は隙が出来るものです。こちらを例の事で逃げてすぐに丸ノ内ホテルへ行つたのです。前門の虎後門の獅子と云ふのですか、丸ノ内ホテルには恐るべき悪魔がドール嬢を待つて居たのです。それは有名な……と云つても私達だけにですが……寶石の強盗團の主領にドール嬢が捕へられて了つたのです。寶石を密輸入密輸出するためにドール嬢を利用する積りでうまくドール嬢にとり入つたのです。その主領と云ふ奴が先日あなたを恐喝に来たあのコエンスキーと云ふ奴です。色々の名を使つて世界を股にかけて居る奴です。今ですから白状しますが、私もそれと知つて奴等と手を握つて居た事もあつたのです。歐洲の北で奴と喧嘩をして別れてから、今度初めて逢つたのですが、幸にも奴等が私を仲間に入れたいと云ふので、私も仲間に入る様な風をして居るのです。」

「相當に猛惡な奴等ですから下手をやるとドール嬢が生命の危険にも遭遇しないとも限りませんので、私も昨日から頭を痛めて考へて居るのです。」

「それは危険だ。」

森ドクトルは我事の様にな不安になつた。

「それに就いて又一つお話しして置かなくてはならぬ事があります。實は私としても申上げたくない事

「えい、でもつともですが、後で總てが分る時が来るのですからしばらくです。」

「何の必要があるのです。」

「つまり、あなたを恐喝し得ると彼等が思つて居る間は、決してドール嬢には何の危害をも彼等は加へないのです。それをもし先生が腹を立て、了はれて、對抗手段……たとへば警察へでも話されれば彼等は瑕持つ足ですから、ドール嬢をつれて逃げるのは足手まとひですし、さうかと云つて日本に残して行けばすべてがばれるので、たしかにドール嬢を先づ殺してから逃げると思ひます。彼等はいつもその手をやつて居るのです。」

刺青の男は汗をふきながら云つた。森ドクトルはうでを組んできいて居たが、重い口調で云つた。

「坂上君！折角の君のおたのみだが、私は自分の名譽迄も犠牲にして、ドール嬢を救ふ義務はないと思ふ。私は私として是と信ずる行動をとるしかない。」

刺青の男は眉を寄せてしばらく考へ出した。森ドクトルは不愉快でたまらぬ様に、室の中をあるき出した。

二

「森先生、私の願は無理な願だと云ふ事は私にもよく解つて居ますですがどうか私の心をお察し願へ

ないでせうか。」

刺青の男は懇願の頭を下けた。森ドクトルは其時急に椅子によつた。

「それでは、私に婦人を凌辱したと云へと云ふのですか。」

「さうおつしやられると何と申してい、か分らなくりますが、一時の方便で……」

「出来ません、私はいくら方便のためと云へ、そんな馬鹿氣た事は出来ません。」

森ドクトルが眞赤になつて怒り出した。

「重々不都合な女だ。東西も分らぬ他國に來て不便だと思つて、家内などが色々云つたが、それをも押しとめて世話をしやつたのだ然るに私にありもせぬ罪をなすりつけて逃げ出したのだ。實に憎むべき女だ。然もそれを他人……それも世界の悪黨の首領……に口外するとは實に怪しからん女だ……」

森ドクトルは獨語して唇をかたく嚙んだ。刺青の男は頭をたれたまゝである。

「坂上君、君もい、加減にあんな女に係り合つてるのをやめたらばどうです。君も僕から云へば餘りおせつかい過ぎる。」

刺青の男はまだ口をきかなかつた。森ドクトルは又不愉快の情をまぎらすために室の中をあるき出した。

「先生……」

刺青の男が重い口調で云つた。

ドクトルは返事をせずに室をあちこちと動いて居た。

「先生！お腹立ちは御尤もです。私とても先生の立場に居れば、腹が立つてたまらないと思ひます。ですがもし萬一にも私の心中をお察し下さつて、私の願をきいて戴けるならば私にとつてはこれ程うれしい事はありません。私はドール嬢を愛して居ます。生れて初めての愛をドール嬢によつて植ゑつけられたのです。私は今迄出鱈目の生活を續けて來ました。戀だの愛だのと云ふものも通り一遍にはやつて來ました。が今度初めて私は眞劍の戀を知つたのです。然もドール嬢には小林畫伯と云ふ相思の人があるのです。それを知りながらも私はドール嬢を愛せぬ譯にはならぬのです。私はドール嬢が小林畫伯と愛の巢に籠るのを見て、自分の愛の完成だと思ふしかないので。私の心を察して下さい。そしてどうか私の愛が完成される様になさつて下さい。……」

刺青の男は涙を頬に落して云ひ續けた。室の中をあるいて居た森ドクトルはいつの間にか椅子によつて刺青の男を見つめて居た。

「さうか。さうでしたか。それとは知らなかつた。」

ドクトルは刺青の男の意外な言葉に驚歎した。

「坂上君！初めて私には君の眞意が分つた。が君、君は餘り意氣地がないぢやないか。それ程君がドール嬢を愛して居るのならば、何故ドール嬢を小林畫伯などに渡さうとするのだ。何故勇氣をふるひ起して愛するものを自分のものにしようとしないのだ。」

森ドクトルは興奮して云つた。

「先生！それはどうか云はないで下さい。」

「云ふなと君が云ふならば、強ひて君の心に波瀾を起しはしない。だが君、男は男らしくやり給へ。君が君自身の眞の幸福のために僕の名譽をしばらく犠牲にして居てくれと云ふならば、僕も又考へ直して見る。どうだ坂上君、もつと勇氣が出せないか。」

坂上は顔をあげた。その顔には痛ましい苦惱の情が浮いて居た。

「よく分つて居ます。私とても時期が來れば、と思はぬではありません。只私が今恐れるのは、自身自身の幸福のために、他人の幸福を奪つてはならぬと云ふ事だけです。」

「いゝぢやないか。君のために他人が不幸になつたつてやむを得ないぢやないか。本氣ならば……眞劍ならば何も難ぜらるゝべきでない。力があるものが通る世の中なのだ。特に戀には力がなくてはならない。純眞な偽らない情は必ず力を與へてくれるものだ。勇氣を出さなくてははいけない。」

「有難く思ひます。先生、私は力もありません、勇氣もありません。がその力その勇氣がまだ出て來

ないので。それは人の心は力でも金でも買へぬからです。ドール嬢は現在小林畫伯を愛して居るのです。」

「坂上君、たしかにさうか、たしかにドール嬢は小林畫伯を愛して居るか。」

坂上はドクトルに問ひつめられて、言葉につかへた。

「或はもうドール嬢は小林畫伯を愛して居らぬかも知れない、小林畫伯には再び逢はずに日本を立たうと考へて居る——」

「坂上君、男はしつかり自分をつかんで居なくてはいけない、大方君は君の過去のために遠慮して居るのぢやないか。そんな馬鹿氣た心でゐては駄目だよ。」

ドクトルは嘲る様に云つた。坂上は心の底の暇をつかれる様に感じて、ホツと息を吐いた。

三

刺青の男はドクトルの言葉に感激して、心の温かなるのを、自ら感じた。ドール嬢に初めて逢つて以來、彼のすさみきつて居た心はいつともなく慈雨後の草木の様に清新の氣が點睛されては來たが我から進んでドール嬢に愛を求め氣分には今迄なれなかつた。それは一には最初からドール嬢が相思の仲の小林畫伯を戀慕うて、遂に海を渡つて來たのを知つた爲であつたが、又第二にはドクトルが云

つた様に、自分の過去に愛憎を我ながらつかして居るための淋しいあきらめと遠慮とのためであつた。

そして彼はいつの間にかドール嬢の幸福をひたすらに祈る事を以て、自らなぐさめるしかないものとあきらめて了つて居たのである。今ドクトルから正面きつて云はれて見ると、自分の本心が自分に見えて來た。然し矢張り自分の幸福……それも果して目的を達し得るかどうかも分らない……のためにドクトルの名譽を一時とは云へ犠牲にする事を、ドクトルに願ふ事は出來なく思はれた。

ドクトルは黙つて居る坂上をせき立てる様に云つた。

「坂上君、君は卑怯だよ。ドール嬢を愛して居ながら、それを押しかくしにかくして、小林畫伯のために心配して、そして自分の心を満足させようなどとするのは、どうしても卑怯だ。又同じ事をたのむにも、小林畫伯のためドール嬢のためと云つて、僕にたのむのは確に男らしくない。自分の幸福のためだからたのむと君が云ふならば、僕は君の心に動かされて、君の希望の如く行動する氣になれるかも知れない。さうでなければ僕だつても自分の名譽を犠牲にする氣にはなれない。」

刺青の男は顔を上げた。

「先生の御心持ちはよく分つて居ます。分り過ぎる程分つて居ます。然しかう云ふ問題は附焼刃では嘘が出來て危険だと私は思ひます。私は今迄只の一度もドール嬢との戀を私の身で完成しようと思つ

「た事はありませんでした。今先生に叱られてから段々と自分の心が自分に見えて来た様な気がします。今夜一晩よく私も考へて見ます。そして改めて又本心を申上げに参る事に致します。」

「あゝ、さうし給へ。第一君もドール嬢も同じ秘密を持つて居るのだ。同じ秘密を持つと云ふ事は、どれ程二人の心をかく結びつけるものかは、君も分るだらう。さう云ふ意味から云つて、又君達二人の秘密の抹殺者として、僕はむしろ君とドール嬢との幸福をいのりたいたのだ。勿論僕は小林畫伯になぐられたと云ふ理由で小林畫伯の幸福を阻む様な卑劣な心の持主ではない。只正直に云へば小林畫伯は僕にとつては路傍の人だ。君も亦ドール嬢も、僕には路傍の人ではない。勿論僕はドール嬢に對しては今好感を持ち得ない。だが君には永久に好感を持つ事が出来ると思つて居る。まあよく今夜一晩考へて見給へ。恐らくは僕の言葉も他山の石となり得るだらう。」

「色々御心配を願ひました。一晩考へさせて下さい。」

二人は段々と感情のつけて行くのを感じて、笑が頬に上る程の餘裕を得た。

ドアが打たれた。看護婦が入つて来た。

「先生、かう云ふ方がお目にかゝりたいと云つてお見えになりました。」

看護婦のさし出す名刺を見てドクトルは一寸眉を寄せた。

「どう云ふ御用かきいてごらん。」

「それが英語でおつしやるので、立關ではどなたも分りませんのです。」

「厄介な事だな。坂上君思ひあたる人ではありませんか。」

ドクトルは名刺を坂上に渡した。坂上は名刺を見た。獨逸人らしい名であつた。

「多分只今お話ししたもの、手下でせう。私が出ませうか。」

「それも變ですな。かうしよう。とにかく此處へ通しませう。そして私は様子によつて出て来る事にします。あなたも私を待つ様子にすればいいでせうから。」

「さうしませう。」

看護婦は立關へ客を迎へるために出て行つた。ドクトルも笑ひながら室を出て了つた。程なく若い外國人が看護婦に案内されて應接間に入つて来た。坂上は椅子にかけたまゝながし眼に客を見た。それは昨日逢つたうちの一人であつた。

「やア昨日は。」

坂上は元氣よく話しかけた。不意の言葉に客は一時狼狽したが、すぐに悪黨らしく笑つて小聲に云つた。

「あゝ、もう来て居るのか、早手廻しだな。談判はどうだつた。」

「まだ話さないのだ。丁度いい、二人して談判しよう。」

二人は心をひきたて、ドアのあくのを待つ姿勢をとつた。

四

森ドクトルはなか／＼出て來なかつた。

「なか／＼待たせるな。」

客は待ちきれなくなつて云つた。坂上は心の中で痛快に感じながら、所知らぬ顔で云つた。

「大抵俺達の用件は感付いて居るのだらう。だから出來るならば逢ひたくないのだらう。それでコエンスキーはどの位を要求して居るのだ。」

「それはまだはつきりは云はないのだ、とにかく例のフランス女を貴族の令嬢に至急仕立てるだけ……もつとも寶石類には不自由はしないのだが……それ位とれれば申分ないと云つて居た。」

「だがたしかに事實はあるのだらうな。」

「そんな事は問題でないと首領は云つて居るのだ。若し事實を否定する様ならば、やむを得ないから國際問題にすると云つておどしつけると云ふ命令だ。」

「本氣に國際問題にする積なのか、そんな事をすれば却つてこつちが危険だらう。」

「大丈夫だ。たかゞ日本だ。大抵の事は無理押しに行くのだ。」

「まアそれはさうだらう。國際問題にすると云つても、フランス女は承知しないだらう。」

「それも問題でない。承知するもしないもないよ。こつちがフランスの大使館へ行つて話してしまへばいいのだから。」

「それは亂暴ぢやないか。」

「亂暴でもそれしかない。」

「失敗したらばどうするのだ。」

「もしまづく行く様子だつたらばフランス女を處分して逃げ出すだけだと云つて居たよ。」

「まアさうきめて居れば、大抵成功するだらう。だがなか／＼出て來ないな。一寸催促して來よう。」

坂上はドアをあけて廊下に出た。丁度ドクトルは治療室から出て來た。坂上は廊下を急いでドクトルに近づいた。ドクトルは坂上を見て、一寸手招きをして又治療室に入つた。

「やつぱりさうですか。」

「えい、手下を向けてよこしたのです。なか／＼腰が強いらしいです。國際問題にすると云つてののです。」

「厄介だな、どうしよう。」

「仕方ないですから、とにかく逢つてやつた方がいゝでせう。そしてその時々私に私がうまくやります。」

勿論彼の前では私もあなたを恐喝する側に立ちますから、そのお積りです。」

「ではとにかく逢つて見ませう。」

「くれぐれも腹をお立てにならぬ様にお願ひ致します。」

坂上は何喰はぬ顔をして又應接間に入つた。

「今出て来るさうだ。」

ドクトルは落著いた足どりで應接間に入つて來た。坂上は八百長と氣づかれぬ様に、英語で話しかけた。

「私達二人はあなたの責任を問ふために來たものです。あなたは先日中あなたの家に居たドール嬢と云ふフランスの貴族を麻醉劑をかけて凌辱したでせう。」

坂上の句調は十分な恐喝調を帯びて居た。

「私は英語は不得手です。フランス語で話して下さい。」

坂上は舌打ちをした。そして客と顔を見合せた。

「フランス語よりも日本語がいゝだらう。」

坂上は日本語で云つた。

「日本語ならば一層よい。」

ドクトルは落著いて云つた。坂上は客を見て英語で云つた。

「日本語で十分に此醫者の責任を問ふ積だ。その結果は後で話すから。」

「それでいゝ。」

と客が答へた。坂上はすっかり安心してドクトルと話し出した。

「大丈夫此男は日本語を知りませんよ。それでドール嬢はかなり危険らしいのです。私はこれからドール嬢を救ひ出す事をやらなくてはならないのですが、ドール嬢が今ではすっかり連中にまき込まれて了つて居るので、なか／＼救ひ出すには骨が折れるのです。昨夜もドール嬢にコッソリ逢つて智慧をつけて置いたのですが、なか／＼難事業らしいのです。何とかうまい智慧はありませんか。」

「小林畫伯を利用したらばどうだらう。」

「私もさう考へて居るのですが、今では却つて小林畫伯ではうまくなさうです。やつぱり向う見ずの小原君を使ふ方が成功しさうなのです。」

「或はさうかも知れない。」

「もう此位でいゝでせう。」

坂上はかう云つて客に英語で話した。

「大體交渉はすんだ。さア歸らう。」

坂上が立ち上つた。他國人も立つた。ドアをあけながら坂上は力ある英語で云つた。
「ドクトル、今の言葉を忘れると自分の身の破滅が来るのを知つて居るだらうな。」
捨科白を残して坂上は他國人と共にドクトルの家を出た。
「たうとう降参した様だ。凌辱した事を否定しなかつたのだ。先づ物になるだらう。」
二人はドクトルの家の前で別れた。

五

刺青の男は暑い市中へ飛び出した。目がくらくする程街路は強烈な日光を反射して居た。彼は銀座迄タクシーをかつて出て行つた。
彼はタクシーの内、たつた今森ドクトルに云はれた事を心の中でくり返して見た。ドクトルの云ふ通り不徹底な自分の心を自ら嘲りたくなつた。男らしくドール嬢を愛するならば愛し続け得る様に我物とすればいいのだ。それを小林畫伯とドール嬢との關係に遠慮して居るのは、實際男らしくない。然もドール嬢を今の危機から救ひ出すには、自分が最も都合がいいのだ、只心配なのは自分が誘つただけで果してドール嬢が彼等悪人の手から逃げ出してくれるかどうかと云ふ事だけである。ドール嬢は悪人等の良に完全にかゝつて居る。悪人等は恐らく歐米の婦人の寶石に對する先天性の憧憬を既に

利用して、寶石をドール嬢に與へて、彼女の心を捕へて了つて居るであらう。寶石の力をもしのぐ力は只戀の力だけである。それも十分に根柢のある戀でなくてはならない。
刺青の男はドール嬢に對して、心を今直ちに捕へ得ると云ふ自信は全くなかつた。かう自らを考へつくと矢張りドール嬢を我物にすると云ふ事は到底見込がなく思はれた。

——やつぱり今の危機からドール嬢を救ふのは自分でない。小林畫伯しかない——
彼はかう考へて淋しくなつて來た。彼は銀座でタクシーを乗り捨てた。そしてフジャヤへ入つて電話をかけた。

「小原さんですか、至急にお目にかゝりたい事があります。小林さんと御一緒に銀座のフジャヤ迄來て下さいませんか。」

彼は小原君に電話をかけてからアイスクリームとソーダ水とを注文した。それを口になめながら彼は頻りに考へて居た。どう云ふ方法でドール嬢を完全に救ひ出すべきか、を彼は頻りに考へた。

彼はボーイを呼んだ。そして歐文の電報用紙を貰つて來る様にたのんだ。ボーイは彼の投げ出すチップを握りながら階下へ降りて行つた。

電報用紙が來た時、彼は萬年筆を出して、文句を考へて居た。長文の電報を彼が書き終へて、又ボーイに發信を頼んだ時、小原君と小林畫伯とは、階段を登つて來て、刺青の男を見出した。

「やアお衝たせしました。」

小原君が氣軽く坂上の椅子によつて来た。小林畫伯は何か不安らしく席についた。

「お暑い所を御苦勞でした。小原さん、私は今朝森ドクトルを訪ねました。丁度例の悪人の手下がドクトルを訪ねて来ましたので一時はうまくごまかして置きました。ドクトルはあなたの方の事を大分憤慨して居ましたよ。」

小原君と小林畫伯とは返事のしやうがなかつた。

「あれは確にドール嬢の思ひ違ひなのですよ。ドクトルは決してそんな事をする人ではないのです。小原君もかう云はれると黙つては居られなかつた。」

「あなたは森ドクトルに好意をいつも持つて居られる様ですが、ドール嬢の思ひ違ひだと云ふ證據がないではありませんか。」

「それは先づないでせう。たゞ森ドクトルの人格を信頼するしかない。」

「あの人格が私達には信頼出来ないのです。」

「さう云はれ、ば話は夫ぎりですとにかく私はあなた方の行動を難じない譯にはならないのです。」

「ではドクトルは何と云つて居るのです。」

小林畫伯が不愉快氣に口をとがらせて云つた。

「いや、何も辯解らしい事は云ひはしなかつたのです。」

三人はしばらく口をつぐんで心に考へて居た。刺青の男が急に氣をかへて云つた。

「だが今日お逢ひしたく思つたのは此件ではないのです。それはドール嬢自身身の事なのです。ドール嬢は今非常な危険な破目に陥つて了つて居るのです。それを何とかして救ひ出すのが焦眉の急です。」

小原君は刺青の男の顔を緊張して見たが、小林畫伯は他事の様に無反應にソーダ水を吸つて居た。刺青の男が云つた。

「今私はコエンスキーに電報をうちました。至急に上京する様にと。」

「そしてどうするのです。」

小原君がきいた。小林畫伯も稍興味を感じたらしく聴耳を立てた。

「森ドクトルの件が成功しさうだから、すぐに上京しろと云つてやつたのです。」

「と云ふと……」

「例のドール嬢、凌辱云々の件を材料にしてコエンスキーは森ドクトルを恐喝する積なのです。だから私から電報が行けばきつと早速出かけて来るでせう。その留守にドール嬢をつれ出してはうと云ふ謀なのです。」

小原君も小林畫伯も刺青の策には餘り賛成でない様に黙つて居た。

「で一つあなた方にお手を拜借したいのです。」

刺青の男は小原君や小林畫伯の心中などは察せず云つた。

「今からお二人して早速日光へ出向いて下さい。彼等は輕井澤へ行くとホテルに云ひながら日光へ行く云ふ様に、なかくぬけ目なく立働いて居るのです。恐らくドール嬢を日光に残して来るとは思ひますが、然し油断は出来ません。コエンスキーが上京したのを見届けて、小林さんはドール嬢に思ひきつて逢つて下さい。そして東京へつれて来て下さいます。今私は電報を打ちましたから恐らく今夜はコエンスキーは上京して来るでせう。あなた方は今夜おそくドール嬢を救ひ出して明日のうちに東京へつれて来て下さいます。さうすればすべての尻拭ひは私がうまくなりやりますから。」

刺青の男が熱心に話し終つた時小林畫伯は投げ出す様に云つた。「僕ばいやだなア。」

刺青の男は驚いて小林畫伯を見つめた。

「僕はあなたの手先になつて働くのはいやだ。」

小林畫伯の言葉には力がこもつて居た。刺青の男は喫驚して言葉も出なかつた。

「もつともだよ。僕も君の立場に居ればいやだ。」

小原君が小林畫伯に同感した。刺青の男は二人の言葉を解し兼ねて只黙つて二人を見つめて居た。小林畫伯が云ひ續けた。

「僕はドール嬢を愛して居た事は確かだが、現在はどうか自分ながら分らなくなつて来た。勿論森ドクトルの事ばかりではない、彼女がさう云ふ悪人にだまされる様な気分になつたのを不愉快に思ふのだ。それを今坂上さんに云はれて子供の使の様に出行くのはいやだ。」

刺青の男は小林畫伯の言葉をきいて、ハタと困惑した。小原君も云つた。
「それはさうだらうよ。誰だつていやになつて了ふだらう。」

小林畫伯が小原君に向つて云つた。

「なア君、ドール嬢だつても僕を本気で愛して居るならば、そんな悪人共の懐にとび込まずに、何とかして僕の處へたよつて来さうなものぢやないか。それを考へると、もう彼女との交渉は此際絶つて了ひたくなつちやつたよ。」

刺青の男は唇を噛みしめて考へ出した。此場合どうしたならばいいであらうか。森ドクトルの云ふ様に、自分が男らしく自分の情をさらけ出して了つた方がいいのだらうか。

刺青の男の心中とは無關係に小原君と小林畫伯とは話し出した。

「小林君、もう彼女など忘れて了ひ給へ、そして至急金を造つて一緒に行かうぢやないか。その方が

餘つほど面白いだらう。舊い事は此際洗ひ流して了つて、サツパリ時き直しに出るさ。」

「さうだ。何しろ心配し甲斐のない女などにひつかゝつて居ては氣がきかない。もう歸らう。」

小林畫伯が椅子を立ち上つた。刺青の男はその時顔をあけて小林畫伯を見つめた。

「小林さん。もう少し落著いてお考へになつてはどうでせう。私は前から眞劍になつてあなたとドール嬢との事を心配して居るのです。私は自分の興味や感興のために物好きをして居たのではないのです。ドール嬢はあなたに逢ふために遠く海を越えて來たのです。そしてあなたに逢ふために、日本著以來一方ならぬ苦勞をして居たのです、あなたが今そんなに無情な態度をなされば、私はドール嬢を通して日本の男の薄情なのがフランスに知れ渡るだらうと迄心配して居るのです。」

刺青の男はやつとこれ迄云つて興奮して來て言葉が出なくなつて了つた。

「坂上さん、あなたはさう云はれるが、ドール嬢の本心は分りはしないでせう。」

小林畫伯がかう云つて小原君と顔を見合せて冷やかに笑つた時、刺青の男は重い口調で云つた。

「私にはよく分つて居ます！」

「あなたには分つて居る？ ふん、どうして私に分らぬ事があなたに分るのです。」

「私はドール嬢からきました。」

刺青の男が力強く云つた時、小林畫伯は鼻の尖で云つた。

「妙な女もあるものだ。本心を無關係なあなたに話す暇がありながら、僕には話さないのだ、私はさう云ふ女は嫌ひだ。」

「違ひます、あなたの解釋は違つて居ます。やむを得ないから私は云つて了ひます。ドール嬢にあなただの住所を故意に知らせなかつたのは小原さんなのです。小原さんは嫉妬して居たのです。そのためドール嬢をながくだまして居たのです。」

「まア何とでも云ひ給へ。」

小原君は皮肉に云つて小林畫伯と笑ひ合つたが、また云ひ足りなかつたのを氣づいて付け足した。

「君こそドール嬢にほれてると云つたらう。君のために僕等を手先にしようと思つたつてさうは行かないよ。」

重い不快な氣分が三人を包んで了つた。

七

小原君と小林畫伯とは頭を伏せて考へて居る刺青の男を置去りにしてフジャをとび出して了つた。

二人は日のカン／＼あたる街路をあるきながら話して居た。
「馬鹿々々しいな。」

「本當さ。坂上の奴口惜しまぎれに君の事迄云ひ出したな。」
 「あ、勿論僕も物珍らしいから、君には申譯ないが、彼女を弄びたくない事もなかつた。それに君が餘りあてたから少々やけた事も事實だ。だが別に悪意があつた譯ぢやない。」
 「悪意があつたつていゝさ。だが坂上と云ふ奴もをかしな奴だな。夢中になつて彼女の事を心配して居る。森と云ひ坂上と云ひ、彼女に對しては悪い蟲なのだ。彼女こそいゝ面の皮だ。」
 「本當だよ。女一人で外國などへ出て來るのは危険なものだな、然し君に逢ひたくて來たとすれば、君に罪があるぜ。」

「罪があつても仕方ないよ。」

「だが本氣であきらめてるのか。」

「うん。」

「だが森や坂上なんかに渡すのは癪に障るぜ。」

「おい。君まで變になつてるな。」

「うゝ、それ程ではないが、とにかく生れて初めてだよ。あれ程の美人は。」

「日本では先づ見られないよ。」

「やつぱり惜しいのだな。」

「それは少々惜しくはある。出來るならば一日も早く日本をたつてくれるとさつぱりするのだが。」

「さうだ。その方がいい。」

小林畫伯は刺青の男の前では強い事を云つたが、矢張りこれきり二度と逢へぬのは淋しく思はれて來た。

「おい、此處へよつて行かう。」

小林畫伯は先に立つてカツフェーに入つた。女給が居眠りからさめてよつて來た。

「あらッ、小原さん、しばらくね。」

女給は小原に話しかけて後、小林畫伯をジロ／＼と見た。

「ビールが冷えていますよ。」

女給は勝手に云つて奥に入つて行つた。

「何だ。大分お馴染があるのだな。門並ぢやないか。」

「さうさ、此邊ならばどこでも勢力範圍なのだ。」

「叶はないな。」

二人は女給のもつて來たビールのコップを打ちつけてグツとの音をたてた。

小林、さつきの續きだが、どうだい、コッソリこれから日光へ行つて見やうぢやないか。」

小林畫伯は小原君の言葉で大分食指が動いて来た。
 「さうだな。」
 「坂上なんて云ふ下等な奴の手先になるのは不愉快だが、俺達は俺達の自由意志で行くならば面白いぢやないか。」

「うん、それもさうだな。」

小林畫伯はまだ決し兼ねて居た。

「向うへ行けば、いくらもあるだらうが、まア出来るならば焼棒杭に火のついた方が燃えがよいぜ。」
 「だが森の事を考へると不愉快だ。」

「だからそれを調べればいゝだらう。或は實際ドール嬢の妄想かも知れないよ。」

「もしさうならば、今きつぱり腹を立て、了ふのも考へものだ。」

「さうれ、やつぱり未練はあるだらう。どうだ、行つて見やうぢやないか。」

「さうしやうかな。」

「さうし給へ。君一人でもいい、し僕は行く方がよければ行く。」

「然し行つてどうするのだ。」

「それは僕にきく事ぢやない。とにかく君一人で先づ逢つて見るのだ。そしてドール嬢の本心が分れ

ば申分ないだらう。その上で事を決してもおそくはない。」

「さうだ。」

二人の話を黙つてきいて居た女給が言葉をはさんだ。

「何ですか、浦山しいお話ね。」

小原君が女給にコップを出した。

「浦山しいだらう、世界一のフランス美人が此君に戀こがれて日本迄追つかけて来たんだ。それに今日これから逢ひに行くのだ。僕は指を銜へて見て居るしかないのだ。」

「まア。では私を連れて行つて下さらない？」

「さうだな。つれて行つてやらうか。早く旅行案内を持つて來給へ。」

女給が去つた。小林畫伯が云つた。

「可哀さうに本氣にして居るぜ。」

「あは、大丈夫だよ、午後十二時にならないければ出られない籠の鳥だから。」

二人は女給のもつて來た旅行案内を見て居た。

「まだ間に合ふ。」

小林畫伯が時計を出して見た。

「タキシードをたのむよ。」
小原君が云つた。女給は電話口に立つた。

八

日光の湖畔ホテルに、ドール嬢の不安の一夜は明けた。昨夜おそく鼠の様にコツソリ訪ねて来て、灰色の不安な言葉を残して去つた刺青の男の不気味さに、ドール嬢はどうしても眠られなかつた。誰か近く迎ひに来ると云ふ。その迎ひの人の云ふ通りにならなければ、一身上の危険が来ると、刺青の男は云つて去つた。誰か迎ひに来るであらう。そして何故にコエンスキーと一緒に居る事が危険なのであらう。数多い寶石を與へたコエンスキーにはそれ程の有難さを感じなくとも、寶石そのものには甚だしい愛著を感じない譯にはならない。

戀もいらぬ、貴族の名も不用である。唯寶石のみがすべての不愉快さと不安とを取り除いてくれる力がある。

ドール嬢はベッドから出て寶石箱を捜し出した。電燈を灯すと共に、紫の尾を長く曳くダイヤが光つたドール嬢はたまらなくなつて顔を箱に押しつけた。

——まだ貰へる佛領印度迄コエンスキーと一緒に行けば、これに倍する寶石が自分の所有に歸するに落ちた。

そして其寶石を抱いて花の巴里に歸れるならば、戀もいらぬ位置もいらぬ。——

ドール嬢は寶石の魅力に心を奪はれて、呆然としてしばらくは失神状態になつて居た。ふと我に歸つた。鳥が窓外に鳴き出した。もう夜があける。鳥のオーケストラに窓のカーテンを繰れば、夜は紫色にあけ離れんとして、山は夜霧にまだ包まれて居る。

ドール嬢は寶石箱をベッドの枕とならべて置いて、靜かに身をベッドに横たへた。いつともなく眠に落ちた。

朝のドアを打つのも知らなかつた。かすかにドアの外で人聲のしたのも夢現であつた。

遂に午前の十時近くドアが強くうたれる迄、ドール嬢は眠つて居たのである。ドアを打つ音にめざまめた彼女は、もう朝もおそくなつて居るのを感じて、ドアに近づいた。

「どなた。」

「コエンスキー。」

老人の聲がした。その時ドール嬢は故もなく胸の鼓動の高なるのを感じた。

「まだ眠つて居ました。」

「一寸お話ししたい事があります至急に。」

「はい。」

とドール嬢は答へたが、まだ夜著のまゝである我身を見てためらつた。ドアの鍵穴の鍵をさし込みながら、ベッドのある室を今あけるべきかに迷つた。

「いいです。ドアをへだてて話させう。」

「はい。」

ドール嬢は稍安心した。

「外でもありません。昨夜あなたは誰かに逢ひましたか。」

ドール嬢は冷水をあびる様にゾツとした。昨夜逢つたのは刺青の男である。不安の言葉を殘して去つた刺青の男である。

「かくさなくともいいのです。あの人は私の友人です。」

意外の言葉がドアの外からひびいた。

「何を云つて行きましたか。」

ドール嬢は咄嗟の場合答へた。

「初見の挨拶を云ひました。」

「それだけですか。」

ドール嬢は又言葉につかへた。

「税關の話をしましたか。」

ドアの外の言葉はますます意外であつた。

「いえ。」

「さうですか。まアもうおそいのです。お起きになつたらば私の室へ来て下さい。」

ドアの外を歩いて遠くの足音が聞えた。ドール嬢は急いで又ベッドに入つて了つた。

——どうしたのであらう。どうして刺青の男の來たのが分つたのであらう。そして、コエンスキーは刺青の男を友人だと云つた。税關と云ふ言葉も云つた。——

ドール嬢は唯不安であつた。このまゝベッドを出てコエンスキーに逢ふのは心配になつて來た。起きない方がいい、室で朝食をとらう。と考へながらすべてが物憂くなつて來て、又眼をとぢて了つた。何を考へるのもいやであつた。

又何時間かの眼がドール嬢の心を安めて居た。突然又ドアが強くうたれた。

「ドール嬢。」

ドール嬢はベッドをとび起きて夢現でドアに近づいた。

「ドール嬢。」

聲は高かつた。

「はい。」

「まだ起きないのですか。私は急用で東京へ行きます。あなたは今日一日は室から出ずに居て下さい。誰にも決して逢つてはいけません私の云ふ通りになさらないと、危険です。」

コエンスキーはかう云ひ残してドアの外を急ぎ去つた。ドール嬢は又新しく不安に襲はれて来て、ベッドのうちに埋まつて了つた。

九

夕暮れて涼風が立つ。夕食後涼をとる人々が湖畔をそゞろあるきして居た。ドール嬢は夕食の食堂に出たが、コエンスキー一行の誰一人をも見出す事が出来なかつたので、一人淋しく夕食をすませ一時居室に歸つたが、慣れぬホテルの夕暮の心細さに堪へなくなつて、ケープを手にさけたまゝ、帽子をかぶらずにホテルを出た。

もう二荒山は夕霧に包まれ初めて、高原の湖畔の暮色は、旅愁をしきりにそゝつた。ドール嬢は伏目勝に湖畔を歩いて居た。スタ〜と洋服の二人連れがドール嬢を後から追ひ越した。そして十間程先にはなれてから一人が一瞬間ふり返つて、又スタ〜と急いで行つた。湖畔の徑が右にそれて行く。ドール嬢は其處迄来て初めて顔をあげた。

「ドール嬢よ。」

静かな然も情の籠つた聲が聞えた。ドール嬢は驚いて聲を見つめた。右手の木立からスラツとした夏服の青年が現れた。

「ドール嬢よ。」

も一度聲を立て、青年は飛鳥の如く、ドール嬢の前に出て一步に近づいた。

「まアあなた！」

ドール嬢は我を忘れて青年の胸にとびついた。青年は両手をひろけてドール嬢を抱きしめた。二人の唇が觸れた。ドール嬢の背が抱かれたまゝ、感激の波を打つた。

「たうとう逢へました。まア私は今日を半年前から待ちこがれて居ました。」

ドール嬢が抱かれたまゝ、顔をあげて、下から青年の顔を見あげた。

「よく遠い日本迄来て下さいました。」

青年が熱情をこめて云つた。再び熱い接吻がドール嬢の唇に額に頬に降つた。散歩しませう。巴里の日の様に。……

「えい。」

ドール嬢は小娘の様に足ををどらせて、右手を男にかして徑をあるき出した。

「マルセーユのお別れ以来、毎週手紙が来ましたのに、今年の春から全くとだえて了つたので、私は随分不安で居ました。」

「許して下さい。お知らせせず突然日本へ来てお目にかゝるのを、たのしみにして居たのです。私日本へ来てから一生に初めてと思ふ苦勞をし續けて来ました。」

「ドール嬢はかう云ひながら日本著以来の事を思ひ浮べて、話して了ひたく思つた。話しさへすれば今迄の苦惱も霧の様に消えるのである。」

「私も最近になつてあなたが日本に来ておいでになるのを知つたのです。随分東京を尋ねて廻つたのです。」

「あなた。あなたは何故私をお前と云つて下さらないのです。」

「ドール嬢は巴里時代に互に夫婦の言葉を使つて居たのを忘れなかつた。」

「もうすこし待つて下さい。あなたは私に逢ふために日本へ来たのでせう。」

「さうです。それより外には何も考へられない私でした。」

「そして今は？」

男は此間を十分に注意して發した。ドール嬢が突然立ちどまつた。そして心の動きを整理する様に両手を胸にあてた。男は其様子を見落すまいと注意する餘裕が出て居た。

「小林さん……」

「とドール嬢は初めて男の名を呼びかけて、不安な眸を男に送つた。」

「……私、今はもう其自由を持ちません。」

辛うじてかう云つてドール嬢は男の胸にとび付いて聲を立て、泣き出した。男は悲痛な心で女を胸に抱きしめて居た。

「マルグリット、お前は一生の不幸が今夜芽を吹くのを知らなくてはいけない。何も云ふ事はないのだ。今すぐに私の胸に抱かれたまゝ、すべてのお前の周囲から離れなくてはならない。お前は私を巴里の日の様に信用して居なくてははいけないのだ。」

男の聲には力がこもつて居た。ドール嬢は顔を上げた。

「私の自由を私に與へて置いて下さい。」

「いけない。お前は私の戀人だ。二人の自由は二人だけの共有物だ。」

「ドール嬢は頭を垂れてしばらく黙つて居た。男は尙も云ひ續けた。」

「マルグリット、とにかく私と一緒に日光の地を離れて呉れ。それは二人の幸福のためだ。」

ドール嬢は惻々としてせまつて来る力強い男の情にひきずられて來た。そして男の言葉に抵抗するのが虚偽であるのを自ら感じて來た。

「マルグリット、お前はそれとも俺をもう愛して居ないのか。」
 此言葉は徹底的にドール嬢の自己意識を押しつぶして了つた。
 「あなた、もう私はこらへられませんか。私をつれて逃げて下さい。そして私の周囲から私を解放して下さい。あなたは、あなたの愛は私を守つて下さる事が出来る程力強いのです。」
 ドール嬢は狂氣した様に男の胸にとりついた。接吻の雨がドール嬢の顔に降つた。

10

「さア急がう。自動車でステーションへ急がう。」

小林畫伯は胸にとりついて居るドール嬢をうながして徑を引き返した。

「ホテルにある荷物をみんな持つて此湖畔からのがれ去らう。お金はもつてるか。」

「さうか。お前の周囲には何も話してはいけない。流星の様に消えて了へばいいのだ。」

「さうします。」

二人はかたく手を握りしめながら飛び立つ様にホテルへ急いだ。ホテルの前で小林畫伯は注意深く云つた。

「マルグリット、俺は今自動車を捜して来る。お前はホテルの勘定をすまして、急用でフランスへ歸ると云つて置くのだよ。」

ドール嬢は狼狽とホテルへ入つて入つた。小林畫伯がドール嬢を見送つて後、自動車を求めんとして五六歩動いた時、往來に立つ男が聲をかけた。

「小林、どうした、成功したのか。」

小林畫伯は軽く笑つた。

「勿論さ。俺達二人は君なんかの想像出来ない仲なのだ。」

「いやはや、あてられるな。それでどうするのだ。」

「すぐにホテルを逃げ出すのだ。おい小原、自動車を呼んでくれないか。」

「おやく、俺は小使になり下るのだな。まアよし、捜して来てやる。」

「たのむぜ。いづれお禮はする。そして自動車で俺達は日光迄行く汽車の都合がつけばすぐにも出發する。君は失敬だが此ホテルに今夜泊つて、後の様子をさぐつて置いてくれないか。」

「うん、承知した。何もやり序手だからやらう。坂上の奴のおどろく顔を見てやりたいな。」

小原君は急いで自動車を迎ひに行つた。小林畫伯はホテルの前の街上に立つてドール嬢の出て來るのを心配しながら待つて居た。